性自己處置の研究

精神分析

★第7卷・第5號★昭和14年・5月★

セガンチーニ作『郷土に歸る』（岩倉具榮氏譯文六九頁參照）

東京精神分析學研究所出版部

好評・再版出來

大槻憲二著

戀愛性慾の心理とその分析處置法

菊版三百三十頁。灰色主調白文字高雅。挿圖數葉。布裝函入美本。

（定價金二圓五十錢。送料十二錢）

杉田直樹博士　東京朝日新聞紙上に　本書を評して曰く—

性慾問題を眞面目に科學的に取扱はうといふ氣運が起らない限り、社會の陰慘な人事は何時の世迄もその暗い影で浮世の生活をじめじめさせることを止めないであらう。私共は宗教よりも倫理學よりも此の性慾心理學一篇の知識の方が遙に端的に且人道的に世人の苦惱を除去し、社會風俗の秩序を醇化する基本的の力となることと信ずる。大槻氏は夙に雜誌『精神分析』を主宰し又フロイドの全著作を譯纂し、精神分析學の上に多くの貢献をなしつゝある篤學者で、その熱心な態度は、多くの道學者が態と避けて見まいとする性慾心理のあらゆる課題を捉へ來つて、少しのいや味もなく又少しの卑しさもなく、極めて平易にのび〳〵と、しかも學問的の尊嚴並に正確を失ふこともなく、述べ去り說き來つて凡ての男女を首肯せしめるに足る。其文筆の力は敬服に値する程で、種々趣味ある圖版を多數收める所にも著者の關心の該博と、親切な人間味とが視はれる。私にとつては少くも多年の待望が本書によつて充たされたやうな氣がして誠に快い。

本書の五大特色

一、戀愛性慾の心理が種別的にも年齡的にも全般的に、且組織的に說いてあること。
二、一般人に面白く、專門家にも啓發的なること。
三、實例は大部分日本的材料にして、著者自身の實驗觀察に基くこと。
四、斯學先哲の意見を尊重しつゝ、然も獨創的見解と發見とに富めること。
五、圖版を多く挿入して趣味豐かなること。

本鄕區動坂町三二七・（振替）東京七八一七番

東京精神分析學研究所出版部

月刊歴史雑誌

日本の風俗

定價五十錢

―二巻一號―

明治人物圖解……田村榮太郎
江戸風俗圖解……田村榮太郎
明治商業資料圖解……田村榮太郎
○
幕末に於ける無盡の諸形態……庄司吉之助
韮山縣御勝手方日記……戸羽山瀚
○
大衆文藝の史的解剖（一）……田村榮太郎

―二巻二號―

江戸の消防……田村榮太郎
姫路藩財政と農民一揆（上）……田村榮太郎
○
宗匠其角の輪廓……宮田戊子
高橋お傳と波の助……生島哀子
德川幕府仕官格義解（2）
大衆文藝の史的解剖（二）……田村榮太郎

―二巻三號―

江戸の商店と名物……田村榮太郎
無盡保險樣制度……一ノ倉別丈
地方御用金請拂帳……戸羽山瀚
姫路藩財政と農民一揆（下）……田村榮太郎
○
忍の者勤方と艾報告書（1）
百萬兩の埋藏金

―二巻四號―

上州遊び人風俗問答……問 田村榮太郎 答 武田愛之助
勤王博徒日柳燕石の研究（1）……荒井とみ三
江戸時代の富興行……平塚正雄
攘夷强盜青木彌太郎懺悔談（1）……口述 青木彌太郎 考證 田村榮太郎
○
大衆文藝の史的解剖（三）……田村榮太郎

發行所　東京市瀧野川區上中里町六十二番地
日本風俗研究所
振替東京一六三四〇七

性自己處置の研究・內容目次

表紙

口繪

セガンチーニ原作油繪『郷土に歸る』（寫眞）……
英國ロンドン精神分析學研究所長アーネスト・ジョーンズ博士及その署名……

卷頭

まづ性自己愛の問題から徹底的に……（五）

研究

性自己處置の問題……大槻憲二…（六）
一、現代青年に於ける性自己處置の必然性——二、自慰弊害の內的原因——三、弊害の外的原因——四、惡癖は如何にして除去すべきか——五、罪惡視の起源——六、惡癖無害說を恐怖する心理——

オナニーと神經症……延島英一譯…（二一）
オナニーと不能症——性本能の二重性——手淫と恐怖——手淫と精神錯亂——いはゆる效果——目的論——遊戲——永續の諸因——性慾——虛說——

子供の惡癖とその威赫的禁制法……藤田由美…（三三）
小序——一、舊來の惡癖觀——二、近來の惡癖觀——三、惡癖效果の實際的調査——四、結論

芭蕉と性愛……宮田戍子…（四五）

教育者のための精神分析概論（アナ・フロイド）……宮田齊譯…（六一）

畫聖セガンチーニの研究（アブラハム）……岩倉具榮譯…（六五）

『精神分析』第七卷・第五號

時評　戀愛文學教科書問題に就いて……大槻憲二…（七一）
映畫演劇寸評……（七六）
アプフウブ　一人相撲の力士……不老泉院主…（七一）
レスラーの切拔――中間作畫過程――風景――溝の清め――佛像のよごれ――昇天――
講・座　精神分析學入門講話（八）……フロイド（K・O生譯）…（八〇）
精神分析學語彙（三七）……（八四）
內外彙報　ジョーンズ博士からの來翰――『精神分析季刊誌』本年度第一册――『メニンガー診療所報』本年度第一册――『精神病學』本年度第一册――國內關係事實――本研究所研究會――本研究所講習會
――本研究所だより――……（八七）
質疑應答　國語運動の精神衞生に就いて……山本謙吾…（九一）
編輯後記……（九四）

月刊誌
正誌・冊子・隔月刊
正誌五十錢（送共）

精神分析

直接購讀者に限り半年六冊一圓五十錢、一年十二冊三圓（送料共）

昭和十四年三月　心理經濟研究　第七卷第三號

心理經濟論（經濟學の心理學的基礎確立）……大槻憲二
經濟界の精神病理（經濟人と神經症者との類似）……高水力太郎
無愛想の心理經濟……不老泉院主

時評
現代日本の心理經濟法……大槻憲二
一、文化と戰爭の問題――二、採點制度の功罪――

芭蕉とその門下との心理的關係……宮田戊子
ヂオヴァンニ・セガンチーニ（アブラハム）……岩倉具榮
教育者のための精神分析概論（アナ・フロイド）……宮田齊
苦惱の解消法と精神分析……奥本島田
春花秋葉錄（女性と戀愛）……篠原政雄
刀劍鑑定作法に於ける無意識心理……土屋秋實
新舊心理學の相違點に就いて……藤田由美

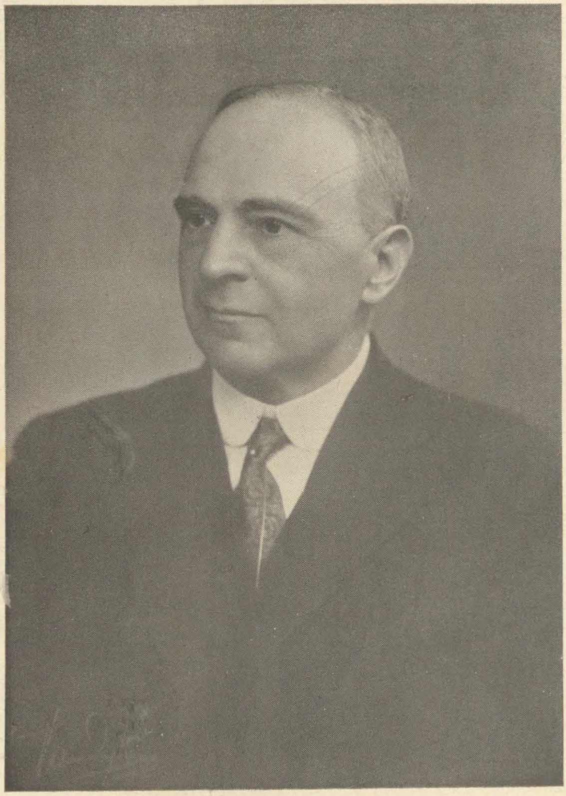
雜話
▼貧者の一燈
▼磨瓜雅
▼柘榴果阿吽
▼墨硯蒐集の心理
▼持物と持主
不老泉院主

挿圖
▼セガンチーニ作「惡母」
▼フロイド賞贈與式紀念撮映
▼その他二三

雜報
▼外國雜誌内容紹介▼我國分析學界近事報▼研究會講習會報▼讀者通信

冊子精神分析（第七卷第二號）送料共十錢
自尊心の崩壞と再建……大槻憲二
鰯の畫・ペターハーフ・夢の言葉……不老泉院主
内外彙報
通信・編輯後記

東京精神分析學研究所　本郷區動坂町三二七　振替・東京七八八一七番



Ernest Jones

『精神分析』第七巻第五號巻頭言

☆まづ性自己處置の問題から徹底的に

金子某と云ふ恐ろしく頭の粗雑な評論家が近頃の陽氣の加減で、毒菌のやうに生え出して來たやうであるが、彼は精神分析學のリビドー的見解を批難し、家族愛はリビドーとは別物であると云ふ頗る珍妙な意見を發表した。仰せの通り、別物だと云へば別物には違ひない。人間と兎とだつて別物には違ひないのだから……。併し一度受胎早期の兩者の胎兒を比較して見ると、全然相違のないことが分る。それ故に生物學では、人間をも生物の一種として（その點では人間も兎も同じ法則の下に支配せられてゐるものとして）觀察し研究する。それが科學的見地であつて、哲學的見解からそれに何とかかんとか云つて來ても始まらぬことだ。リビドーを以て一切の愛情的現象を觀察する基本とせんとするのは、さう云ふ科學的意味に於いてなのだ。差別相を我々は嘗て否認した覺えはない。國家愛、家族愛を強調せんとする人々はその意味に於いて自己性感やナルチスムスを、殊に青年の全部が惱む性自己處置の問題から出發することが、遠いが併し徹底した道であるのだ。

性自己處置の問題

大槻憲二

一、現代青年に於ける性自己處置の必然性

性處置の問題に就いて我等も青年時代には相當に惱んで來たが、近頃分析者として多くの青年を取扱ひ、彼等がオナニーその他性處置方法に關して如何に苦惱してゐるかをつくづくと知るに及び、我等はこゝにこの問題を特に取擧げて研究することが彼等青年のためのみならず、その父兄や教育家たちのためにも極めて必要であることを信ずるに至つたのである。問題は極めてデリケートであるが、また嚴肅でもあるから、讀者幸に我等の意圖の存するところを明察し、誤解なく精讀せられむことを希ふ。

性處置の問題は現代の青年にとつて加速度的に切實さを加重しつゝある。昔時はそれほどでもなかつたが、文明の進歩と正比例してこの問題は愈々重苦しく彼等の頭上にかぶさつて來る。と云ふのは、結婚適齡期（性的成熟期）と人格完成期と經濟力確立期との間の乖離が文明の進歩と社會の複雜化とに應じて益々甚だしさを加へて行きつゝあるからである。中世時代は大體に於いてこれ等三つの期が合一してゐたが、近代に於いては性的成熟期のみは依然として同樣で（これとて教育その他の事情のため多少遲延せしめられつゝあることは事實だが）而も人格智能の完成や經濟力の確立は漸次に遲くなつて行き、そのために性の不自然なる方法に依る處置は必然の勢となつて來るのである。この問題については既に前號『心理經濟論』の中にも詳說しておいたからこゝには再言しないが、性はもしこれを道德や情操に依つて品よく處理することが出來るならば（世の道學者先生や常識一點張りの人々はさう信じてゐるのであるが）、それに超したことはないし、我等もその方法を採用するに吝ではないが、我等實驗觀察の結果に依れば、それはさう云ふ風に信じてゐる人々の願望を表すに過ぎないのであつて、性の如き

本能力は云はゞ一種の物理的な勢力を有するものであるから、これを純粋な心理的努力に依つて抑制しようとしても、それは單なる「抑壓」となり、無理押しとなり、一方からの不自然な壓迫は彼方へのより以上不自然な迸出となつて、結果は一層有害となる場合の多いことを痛感するに至つたのである。その有害なる結果とは社會的には不倫行爲、肉體的には性病、心理的には神經症の如きである。で、それ等不倫、性病、神經症などの諸弊害を避けるためには、我等は是非とも科學的方法に依ることを工夫せねばならぬ。と云つても我々は道德的方面又は情操的方面を全然拒否しようとするものではなく、それ等の有効なることを認めるに吝ではないが、もしそれ等にのみ依つて他（科學的方法）を全然拒否するならば、前に述べた如き諸々の弊害を生ずるに至ることを警告するに過ぎないのである。ところで、道德的方法や情操的方法は、これを試みるに既にその人と道とが自ら別に具はつてゐて、我等の任ではない。我等心理學徒の任務はその科學的處置法を研究することにある。

現代知識階級青年の多くは、相當の程度にまで徹底して來た情操教育や衛生思想に依つて賣淫機關を利用することが餘程少くなつて來たやうである。然らば、その方面にはけ口を避けた彼等の性本能はどのやうな方面に於いてはけ口を發見するかと云ふに、それはオナニーであると云ふに私は躊躇をしない。然るにオナニーにはオナニーに特殊なる心理的弊害が隨伴してゐる。で、もしこの弊害を除去する方法が確立するならば、オナニーの如きは、少くとも社會的弊害を伴はないと云ふ點で、青年の性處置法として最も合理的なものであると云ふことが出來る。ところで、その心理的弊害を除き得るためにはその弊害が本來如何なる性質のものであるかをまづ闡明してかゝらなければならない。その闡明せられたる性質に基いて、その弊害の除去法は打ち建てられなければならないからである。

さて、オナニーの弊害の性質及びその除去法を研究する前に、私は舊來のオナニー批難者たちが批難したその方法や態度に對して一應の批難を加へておくことにしたいと思ふ。私はかつて或る患者から、そのオナニーの歴史を聞いて居た間に、極めて興味ある報告を得た。それは彼が中學在學中、偶々赴任して來た或る體操教師が赴任の挨拶早々に、オナニーの弊害を說き「へんずり（關西辨にてオナニーのことをかく云ふ）したらいかんぜ」と繰返して戒め、その後も機會ある度にそれを口にするので、遂に彼自身「へんずり」の綽名をつけられるに至つたことであつた。私は、彼の綽名の由來に興味を持つたのではない。彼が就任早々そんなデリケートな問題を口にするそのデリカシイに缺けた態度の心理的起源に興味を持つたのだ。これは恐らく彼自身オナニーの病魔にとりつかれ、その弊害のために惱み拔いてゐる人に相違ないことを私は直觀したからだ。然る

に私の直觀はその正しかつたことが、漸次に患者の報告の進展するに從つて確められて來た。何となればその敎師はその患者のクラスが卒業する際、その謝恩會の席上、或る學生が卒業後も時々便りを差上げたいと挨拶したに對し、「さうして貰へたらへんずりを百遍かくよりもうれしいことや」と云つたとのことであるからだ。この言葉は敎師自身が如何にオナニーの快樂を無上に評價してゐるかを暗々裡に告白するものに外ならないではないか。彼がオナニーにそれほどに執着し、而も他方その弊害を强く認めながらも、それへの誘惑に强迫的に靡かずに居られず、從つてそこから生ずる劣等感に苦しんでゐるとすれば、その大きな惱みから遁れるの近道は、萬人をその劣等感にまで引下げて來ることでなければならない。併しながら、敎師として敎へ子たちに向つてオナニーの快樂を說き、その方に誘惑すると云ふことは彼の自我の到底許さないところである。彼の自我と道德心とは、彼の惱む如き弊害から來るべき世代の人々を守護してやることを任とすることをよく辨へてゐる。それで相互に矛盾したこれ等二種の願望――意識的にはオナニーへの警告、無意識にはそれへの誘惑、引きずり込み――が妥協した一つの形で實現したのが、彼の不斷のオナニー說敎である。このやうな推定はあまりに尙早であると人々は考へるかも知れない。併しながら、私が分析眼を以つて觀察したところに依ると、後進の少年にオナニーの快樂を說いて敎へる靑年等は、多くはこれ自らオナニーの病魔にとりつかれて身動き出來なくなつてゐる者等で、彼等は隣人を自分と同病に引入れることに依つて自分の苦惱と劣等感とを輕減しようとの無意識的トリックをなしつゝある者であることが明かであるからである。思春期以後に少年がオナニーを知るやうになる動機は、これを自發的に知ると云ふ場合は比較的僅少で、多くは身邊の年長少年又は、靑年（殊に雇人、小僧、書生の如き）に敎へられる場合が殆んど全部を占めてゐるやうである。私は統計的に調べて見たわけではないが、大體に於いてさう云ふ結論を下して見て差支へないやうに思はれる。

二、自己處置弊害の外的原因

さて、オナニーの心理的弊害の性質に就いてゞあるが、これは私の研究に依ると、第一はナルチスス的退行が生じてそのために對象獲得への積極的勇氣を缺くやうになること、第二は罪障感、第三は劣等感である。更にも一つ第二次的な弊害を數へるならば、罪障感への補償として超自我の病理的に高められることである。併しながら、私自身の研究は未だ材料が不十分であるから、豐富な材料に基いてなされた米國の分析學者ブリル氏の研究を次に紹介しつゝ、その間多少管見を加へて行くこと

にして見たい。

神經症患者の性生活史を調べて見てゐて、殆んど間違ひなく出會す性的特徴の一つは自慰の問題である。さう云ふ問題は憚るところなく告白してくれと云ふと、彼等は直ちに自分を「瀆」した經驗のあること、或はまた現にそれをなしつゝあることを承認するのである。それから彼は躊躇ひがちな言葉と苦しさうな樣子とを以つて、如何に彼がこの惡德と鬪つて來たかを、またいろ〳〵な本を讀んだり話を聞いたりして、これの惡結果に就いて十分に知つてゐるので屢々その鬪ひに勝つては來たがまたしても意志の薄弱なためにその惡德に陷つてしまつたが、やがてこの分では氣違ひにでもなつてしまふであらうと云ふことを述懷するのである。彼等の樣子は如何にも氣の毒な感じであつて、意氣悄沈し、後悔し、さうして屢々如何にも苦惱に堪えないものであるとの印象を與へる。でないと、どんな恐ろしい結果になるか分らないと云はれるにきまつてゐるのである。さう云ふ患者が普通の醫者や同情してくれる普通人に會つてその事を相談すると、それは直ちにやめなければならない。

實際、自己處置と云ふことは性問題の暗礁であつたのだ。性に關する種々な現象の內で、この現象ほどいろ〳〵に論じられ異論百出してゐるものは他にないと云つていゝのである。萬卷の書がこれに就いて書かれてゐる。幾世紀の間、自慰問題は醫師や神學者の間の好個の論題で、それは殆んど總ての文明人の頭上に宛もダモクレースの劍のやうに、不斷に懸つてゐたのである。とは云へ、今日とてその劍はダモクレースの頭上から取下されてゐるわけではない。その原因及び結果に就いて常に新意見が開陳せられつゝある。併し今日の最も優秀な性學者たちがさうでないと云つても、大抵の普通人や醫師たちは、種々の心身の病氣が自慰に由來することを主張してやまないのである。それが特に顯著に見られるのは、神經症患者や精神病者の場合に就いてゞある。大抵は自慰のせいにせられてゐる。患者はさうと思つてゐなくても、近親の者や醫師たちがそれを見付け出して、病氣はそのせいだと云ふことにして了ふのである。西洋に於いてもやはり今日なほ大體この調子であるらしく、ハヴロック・エリス (H. Ellis)、ブロッホ (Bloch)、ローレーダー (Rohleder)、モル (Moll) 等の優秀な性學者の所說や卓越した精神病學者、心理學者の意見があるに拘らず、一般の人々や醫者たちはなほ中世紀的な考へ方に囚はれてゐると云ふ有樣であるらしい。

何人の性生活史を調べて見ても、彼が過去に於いて自己性感のはけ口を自慰の形に求めた時間が全然なかつたと云ふものは殆んどないと云つていゝのである。あらゆる學者の一致してゐる點は、少年男兒の絕對大多數がその生涯の或る時期に於いて

は、手を以つてする性の自己亢奮であるとしてゐるが、廣義に於いては性的目的のために個人が己れの上に何らかの磨擦を加へる一切の場合を包括せしめてゐる。この現象が如何に普遍的であるかと云ふことに關しては、「廣義に於ける自慰はあらゆる國土に於ける一切の人間及び動物に於いて殆んど普遍的に見られる現象である。これ程廣く行亙つてゐる以上、これを以つて異常變態と見なすことは出來ないほどである」と彼等は云ふのである。かう云ふのが大抵の性學者の意見を代表するものである。彼等は多く統計を與へてゐるが、その內或人に依ると男兒の大部分は自慰せるとし、その率は百パーセントであるとしてゐるが、別の學者はも少し低率を示してゐる。ブリルの調査では百パーセントであつたと云つてゐる。彼は男兒は殆んど自慰しないものはないが、女兒はそれほどでもないと云つてゐる。モル及び二三の學者に依ると、性的に健康な人で嘗つて自慰したことがないと主張するものが時々あると云ふことである。併し他の學者に依ると、さう云ふ風に自慰を絕對にせぬ人々は性的素質に於いて抑々弱いのだとせられてゐる。ブリルも幾百人を調査して見て、嘗つて自慰したことのないらしく思はれる男は極めて少數であると云つてゐる。而も彼等は總て性的素質が薄弱であることが明だと。現にその內の一人三十八歲の男子は嘗つてオナニーしたことはないが、その代り性感の壓迫を覺えたことも稀だと云つてゐる。分析處置の間に發見したところに依ると、彼は實際上その本能感情に於いて沒性慾的であることが解つたと云ふ。彼は多くの醫師に結婚の可否に就いて尋ねるのであつたが、それは彼が抑々性の壓迫を現實に感じたことがないからである。その他の人々もみな同じ型である。それのみならず、たゞ相手の云ふところだけを眞正直に受けてオナニーの有無を結論すべきものでもあるまい。多くの人々は羞恥や恐怖のためにその經驗を否認する。併し他人には彼の云ふこととの眞僞は知れるものではない。殊にその事は婦人の場合に就いて云へることであつて、彼女等のそれは大股部の磨擦やエロティッシュな空想に依つて行はれるものであるからである。患者を分析してゐて幾月もの間、オナニーを否認し續けてゐるが、數ケ月後になつて甫めてそれを承認すると云ふやうなことはあまり珍しくないことである。

多くの研究家の主張するところに依ると、女兒は男兒よりもこれをなすこと稀である。併し女兒に於いても相當に行はれ、寧ろ女兒の方が盛んであると主張する向きもある。ガットシイト（Guttceit）は三十年間の調査の結果、女兒が十八歲乃至二十歲に達してなほ結婚の機會なき時は、殆んど總ての者がこれを行ふと論じてゐる。またローレーダーは、思春期以後は女兒

のそれは男兒の場合よりも頻繁であると斷じてゐる。彼は百人の女兒に就いてその內九十五名までがその癖を有してゐたことを發見したと云ふ。

その原因に關しては、總ての硏究家は、性器の外的刺戟（例へば、蟯蟲、窮屈な衣服など）のためにその方に誘發せられるのだと云ふ點に一致してゐる。雇人が幼兒の世話してゐて局部に觸れたりするのが、その極早期の誘惑である場合が屢々である。その幾分かゞ大抵の場合年長の男兒に依つてこれを敎へられる。併しブリルの調査では、五十パーセント以上は柱を攀登つたり滑べり下りたり、椅子に憑れかゝつたり、局部を洗滌したりしてゐる內に、この癖を自得するに至つたものであると云ふ。また或る男女兒は讀書中にそれを始めたりする。それ等は必ずしもエロティッシュな性質の讀物たるを要しないのである。多くの男兒は例へば『アンクル・トムズ・ケビン』の中に描寫せられてゐる如き野蠻な行爲を讀んだだけで十分にその方への刺戟を得るのである。それ故にエロティッシュな物語の中には屢々殘虐な場面の描寫が發見せられる。例へば谷崎潤一郎の『刺靑』の如き……。女兒はまた被虐性的な、又は加虐的な場面の物語を讀んだ後にオナニーを行ふことが屢々である。彼等の告白を聞いてその肉體的及び精神的の原因から判斷すると、それを防ぐに道はないやうに思はれる。

靑年期のオナニーに對立して、幼兒的なオナニーがある。これは或る人は殆ど普遍的だと云ひ、また他の人々はたゞ普通に見られるに過ぎないと云ふ。

オナニーが如何に屢々行はれ、また如何なる種類や形式で行はれ、またその原因は何かと云ふやうな問題に就いては、今まで種々の著者等に依つて詳述せられて來たことであるから、こゝには繰返し紹介するには及ばないであらう。それ故に私はこゝではその危險が如何に大きいかを直ちに論じて見たい。殆んど總ての普通人、並びに殆んど總ての醫者たちは、オナニーが心身に大害あるものと信じてゐる。さう云ふ考へ方は籔醫者たちに依つて保持せられ傳播せられ、彼等の惡用するところとなつて、自己の懷を肥やすためにあらゆる種類の恐ろしい懲罰が自慰者の頭上に加へられる。一切のことがオナニーで說明せられる。動悸すること、消化不良、種々の痛み、婦人の白帶下などはそのせいにせられる。パンフレットは散布せられ、講演會は催され、西洋の多くの都市には「男子にのみ入場許可」せられてある敎育館があつて、そこではオナニーが文字や蠟細工で生々と描寫せられてある。醫師たちも遺憾ながら同じ考へを抱いてゐて、神經症や精神病は多くの場合、その患者の掛りつけの醫者たちに依つてオナニーのせいにせられてしまふのである。併し實はかう云ふオナニー觀は幾百年來のものであつて十九世

紀の中頃、この考へ方のまだ甚だ盛んであつた最中に、敢然これに抗爭を試みたものはグリージンガー（Gliesinger）であつた。オナニーの弊害はオナニーそのものにあるのではなく、それに伴ふ內的葛藤にあるのであると、彼は主張したのであつた。神經症化は羞恥、自己批難、自己侮蔑、氣持のくぢけなどのためであると論じた。彼以前にはまた、オナニーを行ふものはその眼の下に黑ずんだ輪の如きものが出來るので直ぐに觀破することが出來ると云ふやうな類の說が流布せられてあつたが、グリージンガーはこれをも拒否して了つた。さうして今日では總ての觀察者が、オナニーの弊害が非常に誇張せられてあつたことを悟るに至つたのである。例へばブロッホの如きは「今日ではオナニーの問題に關心を持てる一切の有能なる醫師たちは、健康な人間が適應にこれをなす時は必ずしも弊害はないと云ふことを認めてゐる」と云つてゐる。モルも大體同意見であつて「少くとも成人に關する限りに於いては、時々のオナニーが正常なる性交よりも有害であると云ふことが、果して云へるかどうかは頗る疑はしい」と云つてゐる。同樣な意見はキールナン（Kiernan）、エリス（Ellis）その他に依つて奉ぜられてゐる。併しながら彼等の大部分が一致するところでは、過度に行つたならば多少の弊害があると云ふことであるが、過度のオナニーとはどの程度か、未だ何人も判然と計上してゐるものはない。ステーケル（Stekel）その他の研究家は、自慰者に認められる神經症候はみなその起源を心理に發してゐるものであつて、その心理的原因とは罪障感と恐怖とであると論じてゐる。フロイドその他の精神分析者等はその意見を承認してはゐない。精神分析の考へ方では、オナニーは不自然な性的處理法であるが故に、實際神經症を誘發する條件の一つとなると云つてゐるのである。ブリルの研究結果に依ると、オナニーは決して頭腦や身體に惡影響を及ぼすものでないとのことである。彼が取扱つた患者の多くは猛烈な不安神經症型の症候を示してをり、その症候はオナニーに職由するものだと云ふことを患者自身がきめてしまつてゐる。併しこれをよく調査して見ると、それ等の症候は主として精神的葛藤に因るのであつて、殊に久しくそれを行つて來たものが急に禁斷したために生じた場合が屢々であるとのことである。彼はさう云ふ場合には君が久しく行つて來てもそれに葛藤を感じない限り弊害はなかつたのであるが、君が友人や書物や說敎などに依つてその有害なることを知つてこれに抗爭せんとするや、忽ち症候は現れたのだと云つて彼等を安心させてやることにしてゐる。殊に次のやうな興味ある患者の場合は、我々にも敎へるところ多大である。卽ち、それは二十一歲の青年で、彼は氣狂ひであると人々に云はれたのである。彼の掛りつけの醫者は本人の病歷を分析者に告げ、母はまた彼が十日程前までは健

康であつたが、その頃から急に神經質になり、憂鬱になり出したと云ふのである。彼は不斷に發狂を恐れ、落着きを失ひ、亢奮し、部屋中を歩き廻り、怒鳴り散らし、碌々睡眠せず、食事もあまりとらなくなつた。患者は亢奮してゐる憂鬱病患者と云ふ印象を與へ、その症候は誠に區々樣々であつて、始めには何と診斷を下してよいものか分析者にも見當がつき兼ねた。本人の告げる症狀や、また本人の態度や樣子などを見てゐると、分析者が理解してゐる如何なる精神症の症候にも適合しないで、むしろ籔醫者たちが記述してゐる自慰者の症候に符合するものがあることを知つた。そこで分析者は本人に向つて何歲頃からオナニーを始めたかと尋ねて見ると、それは十一歲の時で、その時以來每週平均四、五回はこれを行ひ、分析者に會ふ二週間前までこれを續けて來たが、その頃彼は一友人から書物を借覽し、それにはオナニーの弊害が仔細に認めてあり、そのために人々は發狂すると云ふ風に書いてある。それを讀んで間もなく彼は發狂を恐怖するやうになり、書物に書きたてゝある一切の症狀を自覺するやうになつた。この障害が起きるまでは、彼は明朗な學生で、學業の成績は級中でも上位の方にあり、且つ絕對的に健康者でさへあつた。二三の會話の後に、分析者はオナニーが人を發狂に驅るものでないことを證言し、且つ彼が示してゐる症候が如何にその籔醫者の書物に書いてある通りであるかを指摘してやつた。すると、患者は間もなく元通りの彼になつた。同樣な場合は、廿一歲になる或る娘に就いても見られた。彼女は突然落着きを失ひ、焦々し始めた。症候の主なものは不眠と、食慾減退と、ヒステリーとであつた。訊いて見ると、彼女は十四歲の頃からオナニーを覺え、以來一週に三回はこれを行つて來た。それはエロティッシュな空想によつて誘發せられるのが常であつた。そのやうになつたのは『處女に告ぐ』と題する書物を讀んでからで、それには若い女たちの間のオナニーの弊が尤もらしく書き立てゝあつた。さう云ふ事は實際にはないと云ふことを仔細に告げてやると、間もなく總ての激しい症狀は一掃されてしまつた。併しこのやうに簡單に症候が出現したり消滅したりすると云ふのは、彼があまりに暗示を受け易いと云ふ意味に於いて本人の精神狀態の既にあまり正常でないことを示すものゝやうである。

オナニーが肉體に影響のないと云ふことは、これを行ふ子供等を觀察すれば分る。ネーテル（E. Neter）が廿六名の六歲未滿のオナニー兒童（その內十八名は女兒、八名は男兒）に就いて調べたところに依ると、神經病的傾向や遺傳などはあまり本質的な役割を果してはゐなくて、彼等自身の生理狀態は頗る良好であつたと云ふことである。たゞ彼等の心理的態度は成人の自慰者のそれに似通ふものが見られた。同樣な見解はフリードユング（Friedjung）やタウンゼント（C. W. Townsend）に依つ

て發表せられ、後者は生後八ヶ月の幼兒のオナニーの場合を報告し、「その兒童は健康であつた」と斷じてゐる。モル（Moll）も幼兒期オナニーのために相談を受けた子供が、十年、十五年、二十年の後に會つて見ると「八、九、十歳頃から數年間オナニーした子供とは思へない、立派な青年に生長してゐるのを見て驚いた」と云つてゐる。ブリルも同樣な經驗を、女兒に就いて持つてゐる。兩親からその女兒等がオナニーをして困ると云つて報告せられた娘等を見ると、それを行つたがために生ずると云はれてゐるやうな肉體的障害は何一つ起つてゐないことを知つたのである。併し兩親又は召使等がその女兒等に、それは罪惡であると云つてきかせると、彼女等は忽ち成人のやうな反應を示すのであつた。モルのやうにブリルも、オナニーの故に相談を受けた少年少女に就いて、その後十年以上も樣子を絶えず聞いて來たが、彼等の總ては健康な人間となつてゐるのである。たゞ、その內の若干名はその後數年間オナニーを續け、而も別に葛藤なくこれを廢止してしまつたのである。

これ以上、種々な患者の場合や、先哲諸權威の研究結果を紹介することはやめておくが、オナニーは本來健康者の身體に對しては別に惡影響を及ぼすものではないとの說には我等も贊同せざるを得ない。或る學者の擧げてゐるオナニーの弊害——即ち惡習慣に墮し、過度に流れ易いとされてゐる弊害——は、本來精神病的な型の人物に於いてのみ認められるのである。普通一般の人々は自己性感段階を乘超えて對象愛へと移行する。いつまでもオナニーに固執してゐる如きは稀である。

とは云へ、オナニーは生理的弊害がないからとて、これを行ふことが全然無害無毒であると云はうとしてゐるのではない。我々はこれを不自然な惡德とは考へず、たゞ寧ろ衝動の自然なる顯現と見なすものであるが、フォン・フーグ・ヘルムート（Von Hug-Hellmuth）と同樣、これは何とか統制すべきもの、殊にもしそれが早熟的に發露し、過度に耽られてゐる場合には制禦を加へるべきであると信ずる。さうでないと、本人の情操生活や性格の上に汚點を殘すであらう。四歳乃至九歳の潜在期間中にオナニーを連りに行つた者は、殊に何か心的葛藤を覺えつゝ行つたものは、高尙な目的（例へば敎育の如き）のために昇華する能力が傷害せられる。さう云ふ葛藤は成人になつてからでも早晩現れて來て、その人の性格に決定的な影響を及ぼす。ザドガー（Sadger）に依ると、慢性的な自慰癖者は社會生活に於いて臆病であり、性向が不親切で、馬鹿正直で、妙に信心深過ぎる。また何でも秘密にしたがり、常に他人から觀察せられてゐるとか、追跡せられてゐるとか云ふ觀念を抱いてゐる。さう云ふ性格的特徵を示さない自慰者も多いには多いが、とにかく本人にとつて幸福なことではない。

フェーデルン（Federn）、ライトラー（Reitler）、ザクス（Sachs）その他の學者はオナニーは支配慾を削減し、その發達を禁

制すると主張してゐるが、或はそのためかと思はれるが、慢性の自慰者は種族保存のために必要なる能動的攻撃慾を喪失し、血液混和の意力を缺くやうになる。さう云ふ風な人物の二三を觀察して見ると、彼等は種々な方面に才能を有してゐるから戀愛の事にはとかく引込思案勝ちである。競爭場裡に馳驅することは苦手で、寧ろ獨身者の境遇に甘じてゐようとする。併しさう云ふ人々は元來が心理的に異常者であることを忘れてはならない。

オナニー癖者の心理的特質はなほ他に澤山にある。例へば、とかく神經症になり易い傾向を帶びてゐること、ヒステリー性の空想や夢幻狀態に陷り易いことなど。

三、自己處置弊害の內的原因

さてオナニーの弊害の外的原因が左の如くであるとすれば、幼兒がそれを行ひつゝあるのを見た時にはこれを如何に處理すべきかと云ふに、總て發達する物事の場合に於けると同樣、これを處理するにはこれを行はしめつゝ處理するに愼重の注意を拂ふことである。特に力說したいことは、舊來の教育家や父兄たちの行つて來たやうに兒童を威嚇したり、懲罰したりしても直るものではなく、それは却つて彼等をして別途の更に一層變態的なはけ口にそれしめるに過ぎないと云ふことである。さう云ふ扱ひを受けて來た少年を成人後に分析して見ると、彼等が少年期に受けた教育的弊害の如何に大きかつたかゞ判然と分る。彼等の告白を聽いて見ると父兄や教育者が如何に威嚇して見ても實際に癈止してゐる者は殆んどないのである。非常な不安と自己批難とを覺えつゝ依然として秘かに實行してゐるのである。さうしてそれが彼等の性格構成の上に重大な影響を及ぼしてゐるのである。そのやうな子供達の閱する苦鬪、沈鬱、自己苛責は到底筆舌の盡し得るところではない。これ等意識の苦惱以外に、彼等は後年に至つて多くの不思議な神經症的症候を示現するやうになり、そのために彼等の生涯の後半は破產狀態に陷つてしまふのである。これ等影響の如何に甚だしいかを證明するために、ブリルは一つの顯著な實例を擧げてゐる。それを次に紹介して見よう。

結婚後數週間にしてその妻に逃げられた男があつた。妻の兩親は娘を家に連れ戻り正式の離婚裁判を行はうとした。理由は新夫が婚姻の約束を履行することが出來ないと云ふにあつた。その夫を分析して見たところ、彼には根深い「去勢コムプレクス」があり、その原因は彼が幼年時代（三歲乃至五歲頃）に父親から威嚇せられたことにあつた。その當時彼の父は彼が性器

を持遊んでゐるのを見て、再びそれをするならば「切つてしまふ」と威嚇したことを彼は想起した。幼兒は父の威嚇に恐怖し幾時間も泣き續けた。その少し前に、彼は指を傷けてしたゝか流血したので、そのためにこの感情は强められたわけであつた。幾週間もの間、彼は父親がこの威嚇を實行に移すのではなからうかと戰慄し續けてゐた。段々成長するにつれて、彼はこの事を忘れたが、併し彼はこの部分に對して妙に過敏となつた。彼は何人かゞ自分を眺めてゐるやうな氣がして共同便所で用達することなど出來なかつた。彼の寢室や脫衣の場所へは何人も寄せつけなかつた。これ等はみな彼が自分の局部の「切つてしまはれる」ことを恐れたことに由來してゐる。彼が結婚した時に、彼はその新婦に對して正常な反應を示すことが出來なかつた。彼は性心理的にイムポテントであつた。兩親がこのやうなことをするのは醫師たちがそれを敎へるからで、彼等はオナニーせる兒童を戒めるにはアルミニウムのケースの中にその手を入れて縛つておけとか、畸型兒治療用の板に每晩幾月もの間縛付けておけとか、性器に水泡を生ぜしめよとか云ふ野蠻な方法を主張してゐる。彼等がこのやうに無知であるのは甚だ悲しむべきことである。

　去勢のコムプレクスを起源してそこから生ずべき症候は種々雜多である。子供の內には頭髮を切られるのを非常に恐怖し、嫌惡するものがあるが、その感情は性器接觸の快樂とそれへの禁斷との葛藤のためであると、フーゲ・ヘルムートは論じてゐる。ブリルはまたこのコムプレクスが不安症、ヒステリー、强迫觀念、妄想觀念などの假面を被つて出現することを發見した。精神分析が豐富な材料に就いて實驗して見た結果に依ると、恐怖と懲罰とは嘗つてこの惡癖を矯め得たためしはなく、寧ろ却つて常に有害であることが分つた。もし兒童に常習自慰癖があり、而も外的刺戟物を除去することが出來る場合には、その內的環境を調査して見なければならない。他の兒童と交友することも出來、晝間に兒童らしい遊戲に積極的な興味を持つことが出來、つまり健康な生活を送ることの出來る子供は殆んどオナニーをしてはゐないと云ふことが分つてゐる。分析者のところへ相談に來る兒童はその環境が正常でない階級に屬してゐるのが普通である。彼等の內の或るものは晝間は一人でほつて、おかれ、夜になると接吻されたり、抱しめられたり、添寢せられたりして、過度の刺戟を受けてゐる。その他の子供等は全然放任せられ頓着せられず、友達と遊ぶことに依つてはけ口を求めることも出來ない狀態にあつた。環境が違つて來ると、オナニーの方も自然に廢めるやうになるのが常である。それ故に子供等が惡癖を持つてゐることを發見しても兩親はあまり慌てないがよいのである。徐ろにその原因を探究してそれを除去するやうに努めねばならぬ。最も大切なことは、兒童等をしてその惡

癖を自意識させぬやうにすることである。これを避けるためには無智な醫師などに相談をかけないがよい。教へる者等自身こそ教へられねばならない人々である。兩親が十分の介意とデリカシイと親切とを以つて配慮して行くならば、大抵の場合、子供等の惡癖はやめさせることが出來るものである。全然やめさせられないまでも、少くともその度數を減ぜしめることに成功するものである。

四、惡癖は如何にして除去すべきか

オナニーは近代人の性發展の進化の表れだと云ふことを忘れてはならない。兒童に於いても成人に於いても、個人がその性の處置を大抵は、或は多少とも、自己性感的なやり方でなしつゝあることを意味するものに外ならない。兒童に於いては、惡癖とは云へ芽ぐみ來る性感の發現であるから、惡癖とも云へないかも知れない。で、さう云ふものとして取扱はねばならない。

自己性感時代には寧ろ當然のことかも知れない位であるから、この期を自然に通過して適當な對象愛へと進捗して行くやうに幇助してやらねばならない。自己性感は成人がこれに耽るときに、その形式の如何を問はず、碌なことはないのである。所謂惡癖はこの自己性感期の性的特徴の單なる一顯現に過ぎないのであるが、もし彼等がこの期に停滯してゐることが分つたならば、他の子供たちと交遊させるやうに仕向けねばならない。多くの早期惡癖は、幼稚園又は遊び場に於いて情緒生活の滿足を得るやうになれば直ぐに解消するやうになつてゐるのである。嘗つてブリルの許に相談に連れて來られた三歳になる惡癖の一女兒があつた。その兒に就いて分析者はかう報告してゐる。兩親は敎養ある人々であつたが、彼等の一家は仕事の關係上、自分等よりはずつと敎養の低い連中の間に生活しなければならなかつた。敎養が違うので、自然近邊の人々との交際も疎遠であつた。從つてその女兒にとつては唯一の情緒的關係の相手はその兩親並びに相當年配の世話女だけであつた。分析者の示唆に基いて、母親は近所の子供たちを集めて一種の幼稚園のやうなものを作り、その女兒のために多くの遊び相手を作つてやつたところ、それが美事功を奏して彼女の惡癖は消滅したばかりでなく、彼女の態度全體がずつと健康になつて行つた。また同じく惡癖を有すると認められてゐる四歳の一男兒があつた。彼は惡癖のみならず、甚だ臆病で、秘密癖があつた。この兒が他の兒童と接觸することを彼の神經質な母親が嫉妬的に妨げるのであつた。それ故に彼は心理的にも本能感情上にも早熟であつたが、併し他の子供等と交渉することは全然不可能であつた。このやうに彼が本能感情上のはけ口を有たなかつたと云ふこと

が、而もその上に精神分離症的の遺傳を有してゐたことが、彼の頻繁なる惡癖への原因であつた。それ故に分析者はこの少年を處置するに、全然その本能感情に對する工作に努力を向けた。兩親もまづ分析を受けて、その後この子供が彼等兩親に依つて正當に指導せられた。すると漸次彼は動物や子供等に慣れて行き、遂に十四歳の時には健康な少年となつたのであつた。

同樣に、惡癖に陷りながら、或は時々これを行ひながら、大した惡結果を生ずることなしに濟んで來た人々も相當多數に昇つてゐる。分析處置の目的は、患者をして昇華並びに正常なる對象愛へと導いてやることでなければならない。

十三歳乃至十六歳頃からオナニーを始めたと云ふ成人の場合とても、事情は殆んど同樣である。同じ經緯がこの場合にも辿られるのは必然であるが、併し成人の性感は幼兒性感とは異ることを忘れてはならない。大抵の場合に於いては、オナニーは精神神經症又は精神症の單なる一症候に過ぎないので、從つて我々はもつと根本の條件に注意を向けなければならない。

五、惡癖罪惡視の心理的起源

併しながら靑年の間には如何にも健康さうでゐながらオナニーの問題に惱んでゐる者も澤山にゐるし、また別にその全生涯に亙つて慢性的にオナニーを行つてゐる一群の人々もある。ところで彼等はオナニーしたるが故にさうなつたのではなく、元來精神病理的傾向の人であるが故にさうなつたので、云はゞ惡癖は彼等の場合に於いて結果であつて原因ではない。何となれば現に同じやうにオナニーを始めても結婚後また成人後、完全にそれを止揚して了つてゐる人々の多いことは、オナニー原因論の成立を不可能ならしめるからである。

更に我々はまたこの問題をかく考へ直して見ることも出來る。オナニーは何故に常に罪惡と考へられ、發狂に導くと考へられたのであらうかと。自然の要求に應じてなされたのでない事は何によらず、これを罪惡と考へ不正當と認めたのである。この感情は恐らく肉體的な事情や原因に依つて決定せられたものと思はれる。衝動は如何なる種類の衝動にもせよ、それに適したはけ口を與へて緊張をゆるめないと、何らかの量の緊張があとくされとして殘つて本人を苦める。このあと腐れの緊張の苦痛が惡として考へられるやうになるのであらう。それが或は衞生上の惡として考へられたり、宗教上の惡として考へられたりするその相違は、その人の所屬する時代や環境の支配精神の相違如何に職由するのであらう。以前にはこれを宗教上の罪惡として考へられ、現今と雖も宗教信徒の間ではさう云ふ風に考へられてゐる。現代では何人も天にまします我等の神がさう云ふ

罰を我等の上に加へるとは考へてゐないので、醫學が宗敎や神學の代りとなつてオナニーのために人々は心身の惱みを受けねばならないと云ふ考へが起きるやうになつたのであらう。

發狂と云ふことゝ結びつけて考へられるやうになつた契機は如何と云ふに、これは多分、肉體の方の病氣の原因に就いてはいろ〳〵澤山の事が分つてゐるが、精神の方の病氣の原因に就いてはまだ分らないことが澤山にあるためであらう。それ故にその本質や原因の未だ判明してゐない神經症や精神病がオナニーのせいにせられ勝ちになることは極めて自然であつて、神經衰弱やヒステリーの原因がオナニーに在ると云ふことに極めてお手輕に定められた。何となれば、神經衰弱やヒステリーの原因は何人にも未だ分らず、而もそれらの病氣に惱むでゐる人々は大抵は自慰癖があるからである。それのみならず、舊派精神病學者の或る人々に依つて記述せられた「オナニー精神病」は、實は大抵は早發性痴呆症であつたのだ。早發性痴呆症者等はその精神力の退行のためにオナニーすることに何分の羞恥を感ぜず、その衝動の起きる度に妄りにこれに耽るのである。早發性痴呆症患者の精神的異常を氣付かず、たゞ無恥なる惡癖にのみ氣がつき、やがて精神的異常に氣がついた時には、これは惡癖の結果であると考へるやうになるのであるが實はこれは原因と結果とを取違へたものであると云ふより外はないのである。

六、自慰無害說を恐怖する心理

オナニーが發狂やその他の恐ろしい病氣を惹起さないと云ふことが確かに諒解せられるや否や、彼等の態度は完全に正常なものになるのだと云ふことも出來ると思ふ。けれども、惡癖を行つても恐るべき結果がないと云ふことを知らしめても、そのために愈々その癖に耽るやうになると考へるには及ばない。何となれば、人々が性に對して肯定的な氣持でゐようと、否定的な氣持でゐようと、その結果は同じで、とにかく性に關すること大なればそれに正比例してその方への亢奮は大となつて來るからである。患者が事情の實相を正確に把握すれば、その實行は漸次に減退して來る。で、患者が惡癖の觀念に不斷にとりつかれてゐるに及ばなくなれば、その間の緊張も漸次に減退して行くのである。嘗つて山本宣治氏が自慰無害論を唱へた時、石川千代松博士はこれに猛烈に反對したと云ふことを私は最近の硏究會例會席上で聞いた。私は直接兩氏の文を讀んだわけではないから、その內容をこゝに批評することは出來ないが、山本氏があの當時（その死の直前であると云ふことであつた）にそれだけの大膽な論を發表したとすれば、世間から誤解せられたのは無理のないことであつたかも知れない。併し今日では世間の

思想が科學的に餘程進歩してゐると思はれるから私は安んじてこの論を公にするのである。とにかく自慰無害說に無條件に憤慨したり亢奮したりするとすれば、その人はまづその論旨を自分一人で、積極的な意味を勝手にくみ取り、それを自慰讃美論又は奬勵論と云ふ風に曲解するからであらう。ところが實はその正反對で、我等はその弊害の主觀的なる所以を明かにすることに依つて本人の無用なる性的亢奮を削減し、却つてその惡癖を矯正するの一助となると信ずるがために外ならないのである。ところで何故に彼等がこのやうに曲解するかと云ふことは自らまた別の興味ある研究主題でなければならない。誤解の心理の一般的形式をこの場合にあてはめて考へることが許されるならば、それは曲解者ら自身がオナニーへの恐怖を、自分自身の過去に於けるその經驗及びその經驗に基く罪障感を根深く無意識の内に藏してゐるからであらう。さうしてそのやうに自己の内に難ずべきものを、投出の心理機制に基いて、これを他人に難ぜんとするものであると云ふことが出來るであらう。

——(完)——

大槻憲二著

精神分析讀本

四六版挿圖豐富
普及版一圓　送料十錢　(第三版出來!)

(岡倉書房發行・本研究所取次)

生死解脫の問題への言及多く、佛敎傳統深く遠きわが國人に示唆するところ極めて多大。社會と傳統、戀愛、嫉妬、結婚、東西文藝分析評論、映畫、美術、漫畫鑑賞、修養法、人間智、など興味廣く問題多し。見よ健實なる增版振りを!

精神分析雜稿　「讀本」の姉妹篇・定價一圓五十錢・送料十錢——(重版)

オナニーと神經症

延島英一

オナニーと不能症

手淫と關聯して我々の注意をそゝるものに次の二つの問題があるが、それは結局に於て同一問題に歸着すると思はれる。

一、手淫は不能症の原因となるか？

二、手淫と神經症との間には、いかなる關係があるか？

手淫の弊害を說いた通俗醫書は枚擧の遑がないほど多い。それは不問に附するとしても、性科學で手淫の問題が激しい論爭の對象となつてゐるのは、それについて判然と對立する二つの見解があるからである。その代表的なものを擧げれば、レーウエンフェルトはかう述べてゐる。

「自分が觀察の機會を得た不能症のすべてを通觀すると、不能症の七十五パーセントが手淫を主たる原因とすることは間違ひない。正確な統計をとつたら、この比例は更に大きくなるだらうと思ふ。」

しかるにステーケルは、反對にかういつてゐる。

「不能症の原因は、決して手淫ではない。手淫者に不能症が多いのは、彼等が常態の性交に滿足を見出し得ぬことに原因がある。手淫はそれに伴ふ想像のために、性的行爲の代りをするのである。」

この對立する見解の是非を究めるには、人間の性本能の發達と、手淫の性質を觀察することからはじめるのが一番適切である。科學的に滿足な結論は、その方法によるほか得る道はない。

性本能の二重性

人間の性本能は、その人の精神的傾向と肉體的（生理的）傾向の二つから生れる。思春期の初期にはこの生理的な戀愛と精神的な戀愛とは並行的に存在してゐて、兩者の間に統一と連絡のないのが普通である。だから思春期初期の戀愛は、感傷的、「理想的」、プラトニックで、性域の局所的興奮から一般に分離してゐる。從つてこの時期に於ける手淫は、生理的發達の一段階をなすもので、精神的及生理的兩傾向の接近を促す一時的な、また不充分な一種な試みの性質が濃厚に見られるのである。

この兩傾向は、その後の常態的な性的成熟で合一し、生理的であると共に精神的な戀愛能力を生むのである。さうなると想像力の肉慾的活動は異性の個々人に向けられ、肉體が肉體をもとめ、その合一で圓滿な解決が得られるのである。

この生理的傾向と精神的傾向の合一が非常に遲れたもの、または合一が全く生ぜぬものを目して、我々はクレッチマーに從ひ變態といふのである。かういふ場合には、生理的興奮は生理的興奮で自分だけの道を辿り、自ら滿足を求めることゝなり、精神的方面は、夢想、想像、精神的ノスタルジーなどの孤立的な特徴をそのまゝ保存することゝなる。

だから思春期を遙かに經過した後の手淫は、いかなる意味でも類型的であり、常態であるとはいへないのである。臨床的な觀察によつても、統計によつて見ても、思春期經過後の手淫は、常態、類型とはいひ難い。それは思春期の生理的無力から生ずるものとは異り、非類型的で、後でも述べるやうに神經衰弱と關聯してゐるのである。戀愛上の生理的及精神的兩傾向の分裂は、想像力の過度な活動を促すことになるからである。

想像、幻想、精神的ノスタルジーなどは、幸福の主觀的觀念を決定する要素である。商賣だらうと戀愛だらうと、學者だらうと藝術家だらうと、想像の力強い衝動を伴ふ努力だけが幸福と感ぜられることには變りはない。從つて想像（幻想）は、幸福の原因であり、その缺くべからざる條件である。しかしそれだけが餘りに力を振ひ過ぎると、現實と幻想との間に乖離を惹起し、兩者の間に深淵を堀ることゝなり、その不調和が原因となつて實際生活に對する不適應が生じ、神經症や精神乖離症が發生するのである。

手淫と恐怖

臨床上の經驗を概觀すると、手淫には恐怖の結合してゐる場合が極めて多いのである。大體すべて神經症に於ては、少くと

もその發展のある段階に於ては、恐怖が時には露骨に、時には隱蔽されて、特定の形をとつて現はれるものである。だから精神病學者の多くが、恐怖を以つて神經症の問題と考へてゐるのは間違ひとはいへないのである。

手淫が恐怖を地盤として發展し、時には恐怖から直接に生ずることは、無數の觀察で證明されてゐる。多くの學生が勉强中に、殊に恐怖を伴ふ勉强中に手淫に耽ることの多い理由はそこにある。例へば數學の問題の解決に惱む場合などがそれで、その時解決はいはゞ手淫の中に見つけられるのである。かゝる時には、白晝の勃起も頻繁に起るのが普通である。精神病學者なら、誰でも本能的な手淫が不安欝憂症と關聯してゐること、それが過度の恐怖に引續くことを皆承知してゐる。人によつては、生活上の失敗に遭遇すると、必らず手淫を行はねばゐられない者がある。

手淫と恐怖のこの本能感情的な關聯は、科學の中にもそれ自身の表現を得、手淫に恐怖を纒はせる學説が發生したのは驚くに足りない。前世紀の學者は、ヒポクラテスの舊套を辿り、脊髓病、殊に脊髓勞の原因を手淫に歸したのである。ティソオ、ラルマン、ハウヴェン、コンスタツト等は、脊髓勞は梅毒を原因として起ることを知らず、すべて手淫に罪を着せたのである。手淫に對しては、また精神症の起因が歸せられた。これらは病氣の原因と症候をとり違へた觀察であるが、しかし手淫と恐怖の密接な關係が、學者をして手淫にやたらに恐ろしい衣裳をまとはせるのに奇怪な感を抱かせなかつたのである。

手淫と精神錯亂

今日でもこの誤解が學者の間に橫行してゐることは、前にあげたレーウェンフェルトの言で明かである。手淫は、性病理學の論爭の的となつてゐる問題である。著名な學者で、手淫を早老性痴呆症のごとき精神症の有力な原因と見てゐる人は中々數が多い。エリンガーは、三百八十八人の精神病患者の中に、八十三人の手淫者を發見したと報告してゐる。ハーゲンバッハは、三百人の狂人の中に五十九人、すなはち十九・五パーセントの手淫者を見つけたのである。この二人の學者が、手淫を精神障碍の原因の一つと主張してゐる人であることはいふまでもない。

ペレッチ及スケは、ある種の精神障碍は手淫から生ずると記載して居り、スピッカは手淫性精神錯亂なるものゝ存在を報告し、レーウェンフェルトは手淫錯亂を以つて、神經衰弱的狀態の昂進段階と見てゐる。かういふ觀察を眞向から否定する人といへば、ブラーハの性科學者イェネリックぐらゐなもので、彼は諸學者は原因と結果を見誤つてゐると指摘したのである。

手淫のいはゆる結果

だがとにかく以上の學者たちは、彼等流の科學の統計を持ち、彼等流の尊敬すべき信念を以つて主張してゐるのだか、世の中には性科學の知識を何一つ持たずに、やたらに誤解を流布する似而非學者がゐるのである。かゝる「學者」の體系的な虚構は、毒藥以上の害毒――不幸と、精神的な死と、絶望とを青年の間に振まいてゐる。次に彼等の「學說」の一つを引用して置くが、日本でも故新渡戸稻造氏などは、盛んにこれに類する說教を青年に與へたことを忘れてはならない。

「手淫者に於て、結核やある種の癌などの病氣が好個の地盤を見出すのは證明された事實である。更に不能症、痲痺症、脊髓勞が手淫に起因することは絶對に確實とされてゐる。」

かゝる種類の「啓發」が、青年にどんな精神的打擊を加へ、いかほど殘酷な影響を與へるかは多言を要しない。「啓發」者は害意を以つて說くのではなからうが、その流す害毒に至つては測定を許さぬ大きなものがある。いはゆる性神經衰弱患者の追憶を辿ると、彼等の大部分はこの種の「啓發」に接するまでは、完全な健康人であつたことが分つてゐるのである。

かういふ「啓發」は、青年に對してかう敎へるのに等しいのである。

「君は必らず不能症になる。痲痺症に罹る。脊髓勞を病ふ。結核や癌に犯される。精神錯亂に陷る。もうその初期に入つてゐるのかも知れない。だから君は自慰の惡習が止められぬなら、自殺した方が増しである。」

だから「啓發」された青年は、永年にわたり精神的不能症に罹り、欝憂症の發作に惱み「思想上の煩悶」で自殺の考へから離れられなくなるのである。

しからば眞實はどうなのであるか？　手淫は實際に惡德なのであらうか？　自分自身と自然の法則に反する罪惡で、恐ろしい刑罰を免れぬものであらうか？　自分自身の肉體的及精神的な缺點や劣弱は、手淫が原因で生じたるものであらうか？　それとも手淫は、一種の病理的變質に過ぎぬものであらうか？　更に生理的な一現象でしかないものだらうか？

手淫と目的論

先づ第一に手淫といふ言葉に定義を下し、その種々な形態を觀察して見よう。

手淫とは、普通の性交に伴ふ性的興奮狀態をその一切の精神的、神經的、生理的な結果と共に、肉體的刺戟または精神的表象の手段により人工的に作り出すことをいふ。

西洋で手淫をオナニーといふのは、舊約聖書の人物オナンが、性交を中絕して精液を地にもらし、エホバに罰せられたといふ傳說に起源がある。手淫のみでなく、性交中絕をも罰したこの聖書の物語に徵しても、手淫は人類の非常に古い時代から行はれて來たもので、高度文明の產物でないことが分るのみか、昔からそれは恐怖と密接に結びついてゐたことが理解されるのである。原始人も現代人も、同じ態度で手淫に耽り、同じ恐怖をそれに對していだいてゐたのである。

手淫は動物の間でも行はれてゐる（犬、猿等々）。繁殖期に相手を見つけ得ぬ雄蛙は、手當り次第の物にかぢりつく。

しかしながら現代の社會的環境、すなはち苛酷な生存競爭や結婚難、長期の勉學や職業敎育の必要などが、手淫の非常な流行を促がす原因となつてゐることは疑ひない。そしてその流行は、いはゆる神經衰弱症の增加とも呼應してゐるのである。もちろんこの流行の範圍や程度を統計で證明することは難かしい。醫者は病人しか見てゐない。しかし大學の敎授や牧師などの手で集められた多くの數字によると、大體に於て現代の靑年の九十乃至九十七パーセントが手淫の經驗を有してゐるのである。

ステーケルは、原始人は手淫によつてその性本能に自由な滿足を與へたといつてゐる。彼はまた一方で、手淫を以つて近代人の目的論的自然觀に對する蔑視の表現だといつてゐる。古代に於ても、近代に於ても、手淫に對する喧しい批難は、いつも醫學的な根據によらずに、むしろ目的論な道德にその立場を置いてゐるのである。人間のいだいた思想で、自然は目的を持つてゐるといふ考へほど根强いものはない。自然の中に目的を想定するといふことは、あらゆる時代を通じて人間がいろいろな形式で倦まず撓まず努めて來たことなのである。

ところが手淫は、いかなる意味でも目的論と合する點がない。自然は一定の目的を持つてゐると考へる人々（人間はいつの時代にも何んらかの形でこの思想に支配されてゐる）は、その彼等の想定した目的に反する行爲は、自然の復讐で嚴重な處刑を受ける筈だと始めから定めてゐるのである。だから彼等が手淫は不自然だと主張するのは、科學的な歸納的觀察から得た結論でなく、勝手に定めた目的論に第一の根據があるのである。手淫をあらゆる恐ろしい病氣と結びつける醫學上の「學說」は、この目的論によるほか證明の方法は一つもない。

手淫と遊戯

手淫が精神的及肉體的に重病の因となるといふ「學説」を、外見的に科學的根據があるらしく見せるのは、それがエネルギーの浪費を生むといふ事實である。だがこの根據は外見的なものに過ぎず、皮想的な觀察の範圍を決して出るものではない。エネルギーの浪費は、遊戯に於ても、運動に於ても、藝術に於ても同じく見られるのである。そしてこの一致は決して偶然なものではない。それは共通な起源から發生してゐるのである。たゞ目的論者が、遊戯や、運動や、藝術に自分で勝手な目的を捏ね上げて附し、强ひて區別をたててゐるに過ぎない。

遊戯は一つの代償的な活動であり、現實の埋め合せをするものであるが、手淫とてもその點では性質を異にするものではない。遊戯は想像を伴はねば行はれず、面白くも樂しくもない。そして人間各自の性的宿命を構成するのは、その人の性的な想像であることを忘れてはならない。

遊戯といふものは、大部分の想像上に成立つものだが、しかし遊戯の行爲そのものは現實的である。手淫に於ても最も重要なことは、接觸と抱擁の表象であることはいふまでもない。

想像の力が餘りに强いと、それがその人の人格を支配し、いろ〳〵な本能にすべて愛や支配の色彩を與へることがある。それが神經症、手淫症、ヒステリー、虚言症などの類型であるが、しかしそれはまた藝術家、學者、發明家などの類型でもあることを忘れてはならぬ。

手淫永續の諸因

手淫の習慣が人によつて永續したりしなかつたりするのは、その人の精神的素質に影響されることが大きい。また局所に疾患があつたり、刺戟が强かつたり、誘導があつたり、木のぼりを好むといふような癖があつたりすると、人によつては手淫の習慣が永續する。また人間は墮落したり、自己の劣等を感ずる境遇に落ちたりすると、手淫に耽る傾向がある。感化院、刑務所などで、手淫が驚くべき流行を見てゐるのは周知のことであるが、それは犯罪が特定の想像能力と支配本能の結合から生れるもので、犯罪者は想像に耽り易いといふことばかりに原因があるのではなく、境遇が重大な役割を演じてゐる。

普通の犯罪者は、いつもある種の幻想に驅られて行動するのだから、その幻想のロマンチックな魅力は、彼を驅つて幾度で

も罪を重ねさせる傾向がある。しかし同じ幻想の魅力は、ある人を犯罪者とし、他の人を神經症患者とし、更にまた藝術家をも生むのである。犯罪と神經症と藝術との間に密接な關係があることは、精神分析によつてはじめて明かにされた。だから犯罪者に手淫の素質のあることはいふまでもないが、しかし感化院や刑務所に於けるその流行は、境遇を考慮に入れなくては完全に說明されないのである。

手淫が過度に行はれ、また永續する原因としては、意志の薄弱といふことがよくあげられる。手淫者は大抵自分は意志が薄弱だと思ひ込み、それを非常に苦にして惱んでゐる。しかし私の觀察したところでは、手淫者の意志の薄弱といふことは類型的な現象ではない。私の觀察した手淫者の中には、意志の極めて鞏固な人が少くないのである。第一手淫者は意志が薄弱だとしたら、それに治療を加へ、その偏癖を匡正することは全く望みのないことになる。だから手淫は意志の薄弱から行はれると怒號してゐる人々は、結局に於て手淫は匡正できぬものであること、手淫者にとつては手淫に耽るのが最も自然な行爲であることを喚き散らしてゐるに等しいのである。

手淫と性慾

手淫が深い遊戲本能の惹起する自働的行爲に過ぎぬ初期的段階に於ては、それが全部的に性慾のみに基くものでないことを我々はよく理解せねばならぬ。かゝる形の手淫は、白痴に於てのみならず、嬰兒の間でも觀察されるのである。

精神分析學派では、嬰兒の手淫と何んでもしやぶりたがる行爲(一つの「手淫等價物」)をリビドオ的性質のものと見てゐる。嬰兒の手淫は、將來性域の主權が確立されるのが、既に極く幼い時から兆してゐるのを示す。また嬰兒がその行爲中に身振で表はす滿足の情は、將來の性本能がどこから發足するかを敎へる。しかしそれにはまた、遊戲本能の滿足と一般的な幸福感も含まれてゐると私は考へるものである。嬰兒に於ては、饑餓と遊戲の本能が他のすべての本能より强いからである。

ローレダーをはじめ性科學者の多くは、手淫は性本能だけを原因とするもので、ほかに原因はないと主張してゐる。だがこの考へに從ふと、しからばなぜその暴力的な覺醒は、直接に普通の性交に導かれぬのかといふ疑問が生ずるのである。彼等はこの疑問に答へて、道德と性的禁制が性交の障碍となつてゐるといふ。若い父母から生れる子供は健康でないから、青年は手淫によつてその性的養分と毒素に對し通風の道を講ぜねばならぬといふのである。

性的本能の發達史で、道德と性的禁制が重大な役割を演ずるのは否定できない。そしてこの文明と自然の障碍が、性交の生理的等價物として至るところで手淫を流行させてゐることも事實である。しかし、手淫は全然性慾的原因のみによつて生ずるものだとすれば、それは性的成熟の徵候だとせねばならなくなり、從つて通風の道を講ぜねばならぬといふ論據が崩壞するのを我々は忘れてはならぬ。

また道德と文明の障碍が手淫を生むといふ見方に對しては、我々は手淫は文明の產物ではないといふことを指摘したい。前にも述べた通り、原始人の間にも手淫はあり、往々それが過度に行はれたことは、傳說や神話に徵して明かである。動物が手淫を行ふ例も我々はいくつか知つてゐるが、動物の間には我々に分らぬ手淫の形式が多々存在してゐることは想像に難くないのである。更に人間が幼兒時代は愚かのこと、嬰兒時代に既に手淫を行ふ事實を見れば、それが道德と文明だけの產物でないことは明かとせねばならぬ。

要するに性科學者が、手淫を無理に性慾、性的成熟とだけ結びつける見方は、事實の證明を缺いてゐるのである。我々は手淫と遊戲の間にいろ〳〵な共通點のある嚴然たる事實に眼を塞してはならぬのである。

手淫の害に關する虛說

こゝで我々は最初の問題に歸り、手淫の結果、殊にそれと不能症との間にどういふ關係があるかに眼を轉じて見よう。ローレダーは、手淫は極端に害があるといふ。だが私の見るところでは、彼は非常な偏見に囚はれてゐると思ふ。彼の主張は科學的な觀察を基礎としたものではなく、世間の意見に從つたに過ぎない。それは彼の手淫に關する著作の次の意味のない文章で明かである。

「過度の性交もまた手淫と同じく害がある。これに對して反對を主張し得る者はあるまい。」

それは確かにその通りで、誰も反對しない。しかし問題は適度の性交と同じ程度の手淫は、性交よりも害があるかといふことである。ローレダーは大害があると答へ、次の理由をあげてゐる。

一、想像の働らき、從つて中樞神經系統に課される努力が、性交よりも手淫に於ては甚だしい。

二、手淫は性交よりも頻繁となるから、それだけ害が多くなる。

三、手淫のはじまるのは性交よりも早い。
四、手淫は性格を變質させる。
五、手淫の後には不滿足と悔恨が生ずる。
六、手淫の後の疲勞は、性交の後のそれよりも激しい。
以上六ヶ條の理由の中、第二と三は問題とする必要があるまい。その他についていへば、いづれも一部の眞理を含んでゐるが、しかしそれは一部に過ぎない。第一のことは昔からいはれてゐることである。想像の働らきが、中樞神經系統の過度の努力を惹き起すといふ。だが詩人や、思想家や、發明家など、その想像的活動がしば〳〵驚くべき程度に達する人々は、手淫者の一時的な努力を二六時中續けて撓まないのである。しからば彼等は必らず手淫者と同じ「結果」に陷り、不治の病に罹つて常に醫者の厄介にかゝらねばならぬわけではなからうか。想像の活潑な働らきそれ自體は、果してローレダーのいふように大害のあるものであらうか。
これについてオイレンブルグはかういつてゐる。
「性神經衰弱と、神經衰弱性不能症を生むのは、生理的手淫ではなく、病理的な方向をとる先天的な精神的介入と想像的活動である。」
この見方の方が、ローレダーのそれよりも遙かに眞實に近いのである。

手淫の害の眞實

手淫の害の問題に對する正確な解答は、次のごとくであらねばならぬ。
手淫が害があるのは、それが中樞神經系統に課する疲勞のためではない。その害は、手淫を原因として累增的に發展する特殊な精神的傾向から生れるのであり、それは極く普通の刺戟に特別の想像を以つて反應し、性的行爲を勝手に想像し暗示力を鼓張して、遂にはその刺戟に擬制的な生命を附與することに終るのである。この傾向は、手淫を行ふその人の全心を支配し、その能力、感情、決定力などに非常な影響を與へるのである。
それは先づ第一に性的な要素を、次に全く想像的な要素を異常に多樣化し、その肉慾的夢想で日常生活を埋め、その人間の

考へを絶へず性的方面に惑溺させるのである。次いでそれには道徳的及暗示的理由で生ずる不安と悔恨が加はることゝなる。さうなると人間は、自分の現實的な仕事（性的方面でいへば性交）と全く無關係になるから、眞劍な知的な仕事はすべて困難となつて來るのである。手淫に於ける純然たる精神的な勃起については、レーウェンフェルトに次の適切な言葉が見出される。「想像の力で勝手に射精が行はれることゝなれば、外部の偶然な刺戟の結果でもそれが起るようになるのは當然のことである。從つて白晝の勃起が頻繁に生じ、性交の場合には早漏が起ることゝなる。」

生理的な手淫は、それ自體は決して一般に信ぜられるような恐るべき害のあるものではない。しかし神經症の症候である病的な手淫は、夢想と現實との間の分離の結果であり、その分離を益々甚だしくするものである。かゝる分離によつて性的現實から隔離される結果は、勃起力に非常な不利な影響を免れぬことゝなる。いはゆる神經衰弱は、その恐怖の機構を手淫から借りてゐるのが普通である。

非類型的な手淫が害を釀すのは、次の理由によるのである。

一、想像的本能を刺戟し、それに絶へず新しい營養を與へて無限に發展させることゝなる。

二、夢想と現實との關係が失はれて分離するから、現實はたゞ無限の苦惱としか映じなくなる。精神的に健康な人は、想像を常に現實と結合させてゐるから、現實からはその露骨性と苦惱が姿をかくすのである。

三、戀愛は常に不滿足に終る。幻想が豐富ならば、それだけ行爲の後の失望は大きい。手淫の後の疲勞が性交の後のそれより甚だしいといふのは、不滿足の徵候に過ぎない。

以上にあげた三點は、人間を神經症に追ひやらずには置かないのである。しかもこれに悔恨と恐怖が常に加はるのである。

手淫の匡正

以上述べたように、思春期初期に誰にも起る手淫は、極めて自然な常態であつて、害といふほどのものは生理的にも精神的にも生じない。それはむしろ精神的及生理的の二つの戀愛傾向が合一し、性的成熟に達する一つの試驗的段階の性質さへ帶びてゐるのである。

思春期を經過した後にも手淫が永續し、妻帶してまでそれが止まぬのは、明かに變態であつて、それは性的成熟の完成が阻

まれてゐるのを示すのである。

この性的成熟の實現が遲れるのには、精神的な傾向、すなはちコムプレクスが大きな役割を演ずることは疑ひない。その傾向は手淫を永續させる原因となると共に、更に手淫を原因として累增的にそれ自身を發展させるのである。かゝる場合、意志の强弱にその偏癖永續の原因は求められない。けだしかういふ病的手淫者に於ては、遮二無二そのコムプレクスに從つて一定の方向を執拗に追及する傾向が强いから、却つて意志は極めて鞏固な外觀を呈することがあるのである。

病的手淫はコムプレクスの問題であり、從つてコムプレクスを解決するほかにそれを匡正する道はないのである。

以上は舊チェコスロワキアの性科學者リヒアルト・シャウアー（Richard Schauer）の『性、不安、幻想』の一節を布衍したもの。著者は嚴密な意味での精神分析學者ではないが、所論に傾聽すべき點が多いので、參考のために紹介したわけである。（延島生）

精神分析學診療所

醫學博士　古澤平作

市内大森區田園調布三丁目六〇八
（田園調布驛東口際）
電話田園調布（102）三〇三二

子供の惡癖とその威嚇的禁制法（フシュカ）

藤田由美譯

小序――次の論文はニウョークの分析者マーベル・フシュカ（Mabel Huschka）氏が米誌『精神分析季刊』一九三八年七月號に掲げた "The Incidence and Character of Masturbation Threats in a group of Problem Children" を譯出したものである。內容は分析的研究と云ふよりは實驗的觀察に終始するもので、それが分析的命題と符合するところの多いことを暗示してゐる。極めて有益な分獻であると我等は信ずる。（譯者記）

一、舊來の惡癖觀

オナニーの問題に就て汗牛充棟もたゞならぬほどに澤山の科學書が出版せられてゐるのは、性器興奮の特殊な方法に關する問題を解明すべく如何に人間が努力を繰り返して來たかと云ふことの證據である。

大抵の早期の著書は極めて外的な見地からこの問題を扱つてゐたが、然しフロイドが深刻に情緒問題を論じて、我々の蒙を開いて以來、この方面の文獻は全然力點の置きどころが違つて來た。學者たちは、例へばオナニーに對する本人の態度如何とか、その態度に對して社會的及心理的要素はどう云ふ影響を及ぼしてゐるかとか、オナニーに對する彼の感情と罪恐怖、不安の如き基本的に重要な情緒との關係如何などの如き方面の關係に次第に興味を持ち始めて來た。慧眼な學徒はまた、患者の不健康な情緒は何か抑壓に關して居りはせぬであらうかとか、また患者の後半生に於いて彼の性器と性器機能に關する本人の感情に何か影響がありはせぬであらうかとか云ふやうな諸問題を考へ始めた。

今日ではオナニーに就てくよくよ考へてゐるために、情緒（本能的感情）上の苦惱がいろいろと生じて來るのだと認められてゐる。子供が惡癖する時に、彼の兩親又は兩親の代理者は、その習慣を無くさせようとして、何らかの方法で威嚇す

る。それは大概の醫者の信念である。臨床の調査に依つての信念が出來たとしても驚くには當らない。何故なれば最近迄、大概の著者等はその問題に就ては劇藥を以て處置するやうに勸めてゐた有樣だからである。

多分、ティソー（S. A. L. Tissot）は他の誰よりも、この式の治療法を流行させるに力を致した。オナニーの恐るべき影響を確信して、一七六〇年にラウザンヌに於て、彼の有名な論文『オナニー自瀆に依る疾病の治療』を出版した。その論文は他國語に飜譯されて、手淫の危險に關し、後進の考に博く影響を及ぼした。

その論文の趣旨は、ティソーがブロッホから孫引して彼の著書のセントペテルスブルグ版のモットーとして用ひた處の、フォン・カニッツの次の詩句に依つて明かに示されてゐる。

卑しき淫慾もし君の思ひを充すならば
衰へて枯死せし人の骨ばかりなる姿を
げに恐るべきその有樣をまざまざと心に畫け
さすれば肉慾の刺戟は逃げ去るなるべし

ティソーと同樣に、悲觀的な考へを持つてゐる他の學者たちは、彼の見地に從つた。現にこれ等の舊式な信念の誇張や、警告的處置や、今猶主流をなしてゐる處の威嚇・懲罰等を頑固に固持してゐることが後年の學者に依つて指摘せられてゐる。例へばフェレー（Féré）は、性教育と衞生の章で、「局部の刺激に對してかような方法で應ずることは汚くて見苦しいと子供に教へるがよい」と言つてゐる。思春期に於けるオナニーを論じては「オナニーの傾向は、それが有害であり、危險であることを警告することに依つて、未然に防ぐべきである」と言つてゐる。

スタンリー・ホール（G. Stanley Hall）は、アメリカ醫學會での或る醫者の講演のパンフレットに言及してゐるが、そのパンフレットに於いて著者は匿名で、青春期の青少年達に向つて說く形式でかう彼は語つてゐる「若し何處かの少年が不用意の間に諸君にオナニーをするやう誘惑するならば、それは諸君を侮辱するものである。その時は直ぐに彼を毆つてやりなさい。諸君の力の續く限り打つてやりなさい」と、スタインハルト（Steinhardt）は、アメリカ少年團々長アーネスト・ツムプスン・シートンの序文のある『少年への性十訓』といふ著書の中で、十二歲或はそれより少し上の少年が、惡癖の不節制から癲狂院にゐるのを私は見たが、かう云ふ事情で發狂した者の精神上の治療は、殆んど絕望だと思ふ」と讀者に警告してゐる。同著者は、アメリカ婦人俱樂部聯盟の社會衞生委員會長の序文ある『少女への性十訓』に於て「若し過度の手淫に耽るならば神經系統の障害となり、遂には癲狂院へ行かなくてはならなくなり、また墓場に急ぐことになるであらう」と言つてゐる。惡癖を外科的に處置することは、

なかなか人氣がある。例へばフリーマンは、女兒の手淫に對して、それの永久的處罰は、處女膜破棄と割禮とであると言つて推奬してゐる。

ブロッホは惡癖の治療と處罰とを次のやうに論じてゐるが頗る興味が深い。卽ち「ウルツマン（Ultzmann）の暗示するところに依れば、幼い子供や乳兒の場合には、手は小さな袋に閉ぢ込めて置くか、或はベットの一端に結び附けて置くがいゝ、子供の前に、大きなナイフや鋏を以て現はれ、恐しい手術をするとか、或は性器をとるぞと嚇す老醫者の方法は、屢々有効であり、且つ根本的治療の効果がある。實際に一寸した手術を加へて見せることはまた往々役に立つ。敎訓や懲罰では一向利き目のない或る若い男を治したフュルブリンゲル（Fürbringer）は、ボロ〳〵の鋏で彼の苞皮の前部を切りとることに依つて効果を擧げた。友達との惡癖に情熱的衝動に驅られる若い婦人の場合、局部に度々お灸をすえて治療した。他の醫者は苞皮に穴を開けて輪を通した。豫防の爲に、性器を籠で被ひ、鍵は父親が持つてゐた。何等の隙間なく繃帶でペニスを包むことも試みられた。嚴重に處罰すると往々よき結果をもたらす。

米國に於ける標準性敎科書の一つは、一九三六年に於いてさへ、惡處置を論じてから述べてゐる。「幼時期には、器械的禁制で多大の効果が擧がるが、必要とされる禁制の種類は惡癖のやり方に依つて定まる。若し手でするやうならば、睡眠中縛つて置けばよい。さうすれば手が屆かないからよい。若し兩腿の摩擦でするやうならば、腿をそれぞれ寢臺の片側に縛つて摩擦出來ないやうにして置かねばならない。昔から大腿骨の挫折に使はれたやうに二つの當木を用ひるがいゝ」と。このやうな次第であるから惡癖の子供を親やその他の人々が苛酷に扱ふのは必ずしも彼等自身の考へだけではなく、抑々學者たちがさう云ふ風に敎へてゐるからだと云ふことが分るのである。

二、近來の惡癖觀

子供が惡癖の爲に如何に屢々威嚇されてゐるかに關する資料を求めるならば、我々が期待してゐるよりは遙に多い。實は性問題に就ての古典的な著作の多くは、この方面の問題に關しては何も言つてゐない。多くの、殊に最近の著書は、子供が痛く嚇されてゐると云つてゐるのは事實である。例へばフロイドは『幼兒性感論』の中で「主にペニスの興奮に支配され、何時も手でペニスを刺激して快感を感じてゐる子供は彼の兩親又は世話してゐる人達に發見され、ペニスを切りとると言つて嚇されてゐる」と言つてゐる。また「不安と本能生活」に就いての講義の中で「去勢恐怖」を論じて彼はかう書いてゐる。「去勢が實際されてゐるかどうかといふことは問

題ではない。重要な事は危險が外部からの嚇かしであり、少年がそれを信じ込んでゐることである。彼がさう信じることには、或る根據がある。何故なれば、切り取るといふ嚇しが男根期に、卽ち早期オナニー時代になされるのが屢々だからだ。そして、かやうな懲罰を加へるぞと云はれると、常に彼自身の方に種族的本能の不安がこれに呼應することは疑ふまでもない。」

ミーガー（Meagher）は、「兩親や乳母は惡癖を治す爲に、子供の手やペニスを切斷すると嚇すが、それは愚かしい善意だ」と書いてゐる。メンチース（Menzies）も同樣に言つてゐる。「若し子供が頑强に惡癖に耽つてゐるのを見附ければ、直接に手やペニスを切斷すると嚇すことは、兩親乳母その他の人々に實にありふれた習慣である」と。トム（Thom）は子供に於ける手淫の習慣を止めさせる爲に、恐しい威嚇や懲罰を以てする親たちに就て語つてゐる。また、チャドウィック（Chadwick）は、少年の場合にはペニスを、少女の場合には手を切り取るといふ舊來の威嚇は間違であると言つてゐる。

右に述べて來たやうな種々の見解の臨床的證據を求めるならば、これは精神分析を受けてゐる患者に就いて調査するのが唯一の道である。アブラハムは或る患者が六歲未滿の頃に早くも性の興奮を覺えてオナニーした。惡癖を彼の子守が見附けた時に嚴しく禁じた。そして云ふ事をきかぬと折檻した。彼はまた終生そのために彼女から苦しめられたと云ふ印象を强く受けた。」ヘレーネ・ドイチ女史は、或る女患者が四歲から六歲の間に惡戲し、それを止めさせるべく母親が娘の手足を縛り、脚木に結びつけて立ち乍ら「さあ出來るならやつてごらん」と云つたといふことを書いてゐる。フレンチ（French）が研究した或る患者に就いては次の如き報告の一節がある。「患者が十七歲の頃、或る日、父は馬乘りに彼を連れて行き、街上偶々精神錯亂せる白痴を見て、その方を指しそれはオナニーの結果だと言つた。」

フロイドは五歲の恐怖症の少年ハンスに就て述べてゐる。彼が三歲半の時、手でペニスをいぢつてゐるのを母が見、そんなことをするならば、おいたの道具を切つて貰ふやうに、先生の處へやりますよ、と言つて母は嚇かした。」シルダー（P. Schilder）は、患者の性の積極的願望のための懲罰の恐怖といふ論文に於て「患者の父は、屢々オナニーについて彼に警告を與へたので、彼は絕えず、性は危險なものであり、性的自瀆の結果自滅するだらうといふ感じを持つてゐた。」と語つてゐる。

三、惡癖効果の實際的調査

オナニーのために自滅するやうになるかどうかの證據を突きとめるために、一連の子供に就いて研究したものは未だ見

當らない。や丶そのやうな研究として認めるに近いものはガードナー（Gardner）の研究で、彼は二十二ヶ月から七歳半に至る十五人の患者の一群には、恐怖がなかつたといつてゐる。彼が扱つた大勢の子供の中の一人に就いて發見したところを細々と報告してゐるその中で、彼は面白いことを云つてゐる。「夜恐症の總ての場合の重要な病因として認められるものは、手淫の處罰として、身體の或る部分、大抵は手や胃や性器を切斷すると威嚇することである」と。

オナニーの問題に關係してゐるも一つの研究――それは子供についてではなしに成人に就いての發見ではあるが――一九三七年になされたプリアス（Pullias）の報告である。七五名の大學一年生がオナニーの結果をどう思ふかとの質問に對し、七二パーセントは、痛く身體を壞すと認め、六九パーセントは、心理的破綻の原因となるとし、五二パーセントは「精神病」の直接の原因であると報告し、僅に五パーセント丈が、甚だしい弊害はないやうだと報告した。

こゝに發表する研究は、精神病の相談の爲の一般小兒科診療所が三二〇名の問題の子供に就いての研究に基礎を置いてゐる。その調査は一九三五年から一九三八年の間になされた。患者の中二二八人、卽ち七一・三パーセントは少年で、九二人、二八・七パーセントは少女であつた。子供達の大半は普通の智能を具へ、知的に優れてゐる者も多かつた。どう云ふ病氣のために精神病醫の診察を仰ぐやうになつたかと云へば、それは遺尿症、强迫行爲、くよくよすること、心配、攻擊性、不從順、氣まぐれ、言語障碍、拇指しやぶり、爪嚙み、拒食癖、夜恐症、肉體的根據の見出されない身體的症候、精神發育不全、知力は普通なるに拘らず學業不良などの如き問題である。

これ等子供を取調べる前に、その精神病歴を父兄に尋ねてゐる間に、筆者は質問の順序として、子供が手淫を知つてゐるかどうか、若し知つてゐたとすれば何歳に始まつたか、またもしそれに對して何か對策を講じたのならばどんな方法をとつたかを訊いて見た。手で行ふか、腿を押しつけてするか或は着物を局部のところで前後に押したりひいたりしてするか、卽ちそのやうな一人でのオナニーか、或は相手のあるオナニーか、どちらであるかといふ風に尋ねた。

材料が集まつたので、それを用ゐて具體的研究をして見ようと云ふ考へが起きたのである。或る臨床的處置に關して考究してゐる間に疑問が起きて來たのだ。

「子供がオナニーする時は、威嚇されたり、その他の破壞的な扱ひ方をされるといふことだが、それは眞實であらうか」と。そこで、これ等三二〇名の子供の記錄を一覽して、この特殊の問題が如何に闡明せられるかを見ようと決心したのである。

との研究に含まれてゐる子供は、一歳から十四歳迄で、年齢の配分は次の通りである。

第一表——調査當時の患者の年齢

年齢	子供の數
一	二
二	八
三	二四
四	二三
五	三四
六	四二
七	三三
八	三五
九	三七
一〇	三六
一一	二七
一二	一五
一三	三
一四	一
合計	三二〇

×

三二〇名の子供に就て調査して見て、一四二名、卽ち四四・四パーセントはオナニーしたと報告されてゐる。報告者の言に依れば、殘りの一七八名、卽ち五六・六パーセントはそれをしなかつた。子供が始めて悪戯を覺えた年齢は次の如くである。

第二表——子供が始めて手淫を覺えた年齢

年齢	子供の數	
幼少正確な年齢不明の者	八	五四・三パーセント
一歳未滿	五	
一	二	
二	一六	
三	一六	
四	二〇	
五	九	
六	八	
七	四	
八	六	
九	三	
一〇	二	
一一	〇	
一二	〇	
一三	一	
年齢を明記せぬもの	三二	
合計	一四二	

一四二名の少年がオナニーしたと報告され、その內五四・三パーセントが五歳以前に始めてそれを行つたことが分つたことは興味がある。

×

偖て我等の研究の主なる目的は、子供の惡戯に破壞的に干與する度數に關する調査であるが、三二〇名の中一二八名、卽ち四〇パーセントはさう云ふ扱ひを受けてゐることがわかつた。この發見はこれだけでも著しく重要であるが、然も破壞的扱ひ方に種々の型があつて、それを分析して見ると更に啓發的である。例へば、一二八名の二〇・三パーセントは實際に懲罰され、八四・四パーセントは激しく威嚇された。一二八名の六七・二パーセントに於ては、威嚇は肉體的であつた。或る子供の場合には、肉體上の毀害は成人に依つて加へられた。また他の子供の場合には、惡癖はそれだけで身の破滅を來すと警告された。一二八名の三六パーセントは性器に損傷を加へられて嚇かされてゐる。この事は特別の興味がある。何となれば、これは去勢恐怖に關係があるからだ。

次表の數字は最小限であることを忘れてはならぬ。何故なれば、子供の時分に惡戯して懲らしめられたことは、報告者も忘れてをり、從つて報告しないことがあるからである。

×

第三表——子供の惡癖への懲罰

叱り方	子供の數	一二八對率
輕い叱責(「よくないよ」等)	二五	一九・六
きつい叱責(內容不明瞭)	六	四・七
懲罰	二六	二〇・三
打擲、鞭打	二三	一七・八
着衣剝奪	一	〇・八
監禁	一	〇・八
局部を刺戟すべく指先にて胡椒をつける	一	〇・八
機械的抑制	二	一・六
「身體の繋縛」	一	〇・八
兩足を分けて縛る	一	〇・八
侮辱	九	七・〇
威嚇	一〇八	八四・四
肉體上	八六	六七・二
鞭打、ふくろたゝき	四	三・二
連れ去られる	四	三・二
局部危害	四六	三六・〇
その他の身體的部分の危損	三二	二五・〇
心理上(心が害される)	一〇	七・八
道德上、信仰上	一〇	七・八
侮辱	二	一・六

右表の子供の總數一二八名。

×

子供等が威嚇されたのは何歳の時か、その確かなことは分らないけれども、多くの場合、五歳以前であるといふことは解つてゐる。何故なれば、威嚇は子供が始めてオナニーした時になされ、第二表に示されてゐる如く、悪戯者の五十パーセント以上は、學校前の年齢に最初にそれをするとされてゐるからである。

　これらの統計は重要な知識を供する。然し、研究のために資料を集めて見ると、兩親の叱る時の言葉が何れもなかなか參考になることが分るのである。それ等の言葉は患者の病惡を訊く時に兩親の云つたのを書きとめておいたのである。さう云ふ理由だから、この報告にそれらの言葉をも含めておくことは賢明であると思はれる。次の言葉のあとにつけてある數字は、その言葉で叱られた子供たちの人數を表はしてゐるのである。

×

第五表――叱責の言葉

――輕い叱責、懲罰、侮辱――

「それは宜しくない」（一四）

母が子供をがみ〳〵叱つた。（一）

母が子供の手を打つた。（五）

母が子供の手を打つた。何故ならば、悪癖者は氣のぬけたやうな人間になることを知つてゐると云ふことを、父が讀んだ書物から聞いてゐるから。

母は子供を打つた。

賄をしてゐた母は地下室に閉ぢ込めた。

母は子供の指に胡椒を着けておいた。さうすると、次に女兒が局部に觸つた時痛くて泣いた。

父は女兒に「恐しい折檻」をした。

母は兩脚を分けて（腿を押付けて行ふから）それを高椅子にしばつた。

兩親が子供を辱しめた。（六）

――威　嚇――

「お前の血に毒だよ。そして死ぬよ」

「醫者のところへ連れて行かせて、それ（ペニス）を切つて貰ひたいのかい？」

「自分（性器）を傷けるだらう」

「お前は自身を傷ける、それだから、それ（ペニス）を繃帶で捲きつけてやらねばならぬだらう」

母は彼の手を打つと嚇かした。

「猫にそんなところを見られたらチンチンを喰ひとられるよそしたら女の子になつてしまふよ。」

「それ（ペニス）に一ぱい黴菌がつくよ。」

性器に病毒をうつすことの危險を警告した。（四）

「醫者がボボ（ワギナ）を縫つてしまひますよ。」
「強くなれないよ。」
「ペニスに傷がついて手術をしなければならなくなるよ。そしたら女の子になつてしまふよ。」
「自分を傷つけ、おしつこ出來なくなり、そして病氣になるよ。」
「片輪になるよ」または「脱腸になるよ」
ペニスに「南京蟲が這入るよ。」
自分（ペニス）に傷をつけるよ。
「病氣になれ」（二）
看護婦は「病院へやつてチンチンをとつて貰ひませう。痛いですよ」と嚇した。
「病氣になつて醫者の處へ行かねばなりませんよ。」
「チンチンが痛くなるよ。」
「病院へ連れて行くよ」その結果病院を恐れるやうになつた
「吹出物がそこに出來て醫者に切つて貰はねばならない。隨分痛いよ」、「あまりいぢると落ちちやいますよ。そしたら女の子になつてしまふよ」と云ふこともある。また家族のかゝりつけの醫者がチンチンを切つてしまふといふこともある。
「あらまア大變だ。青い顏をして。してはいけない事をしてゐますね。若しそれをすると健康を害しますよ。」
お母さんは、チンチンが「落ちて困つたこと（小便の出來なくなる）にならぬやう病院へやりますよ。」
「立派な大人になれませんよ。」
「汚い手でひつかいて」そこを傷つけるでせう。
「惡い人が連れて行くよ。」
「このところは痛みやすいのだよ。」
黴菌の恐ろしさを訴へて脅かした。
祖母は危害（どんな危害だか判然とは云はない）が及ぶとて嚇かした。
「病氣になりますよ、恐ろしいわね。」
「そこは眼のやうなもので、とても怪我しやすいのだよ」それに觸はると病氣が傳染して「大きくなつた時健康に影響するよ。」と母が注意した。
「それはあなたの成長を妨げます。」
「破裂するでせう。そして後になつてから困りますよ。」
「病氣になつて病院へ行かねばならないでせう。其處で何をされたつて私は知らないよ。」
「それ（ペニス）を傷つけるかも知れない」彼は睾丸を傷つけると精虫は發育しないことを知つてゐる。
ペニスは「身體の微妙な部分だから」手についてゐる黴菌のために「そこが病氣になるさう云ふ病氣が本當にお前に起るよ。」
非常に神經質になり、注意力を集中することが出來なくなる

ペニスは「弄るもの」ではない。あまり弄ると「精神が腐り馬鹿になる。」

顔付が間ぬけて見える。また「私はおいたの爲に氣が變になつて死亡した二人の者を知つてゐます。」

「濁つてはいけません。でないと、學業がよく出來なくなるよ。心が變になつて貴方は精神病者のゐる處へやられます。そうすればもう決して私（母）に會ふことが出來ませんよ。」

「それは正しくない。」（二）

「汚らしいことだ、馬鹿げたことだ。」

「悪い事だ。」

子供は「悪い子だ」と云はれた。

——種々な叱りの方の混合——

「ペニスの周りが赤くなるでせう。そして永久に病院にやられて駄目になります。大きくなつても神經が衰へてよい子が持てませんよ。」母はまたマーキユロクロームをペニスに塗ると嚇かした。

「醫者が云ひつけたことを總てしました。」例へば數日毎に子供の性器にアルヂロルを附けた。或る醫者は「彼女の手に針を刺した」母は加へて言ふ「私は度々打つた。私はその爲に斬る慣はしになつてゐる。また鼻を血の出る程突くことにしてゐる。そして下からもやがてさうして血が出るやうになると言つてやる。」

「病氣になるだらう。痛んで來るだらう。」ペニスが赫々とするやうな藥を付けてやる。ペニスを切りとつてやる。

母は彼の手を打ち、そして彼をひつぱたいた。「みながお前の事を評判にするよ。」「病院へやられて醫者がペニスを切取つてしまつて小便も出來なくなるよ。」

病氣になつてペニスの手術をせねばならない。ペニスは「なくなる」でせう。

「それは宜しくない、病氣になるよと語つた。」

母はがみ〳〵叱つた。そしてお醫者に云ひつけると嚇かした。

「彼がそれをしてゐる時は何時でも打つた」そして「病氣になつて病院に行かねばならなくなり母をもう二度と見ることの出來ない。」と言つた。また「神樣に嫌はれる」と語つた。

「チンチンはたつた一つの事をするためのものです。おしつこするためのものです。おいたをしてゐると、お前の望んでゐるやうな大人になれませんよ。」

母は、病氣になつて醫者の處に行かねばならぬでせうと言つた。父は地下室へ押し込めると言つて嚇した。

「私はひどく嚇しました。また今後再びなすならば手を切り取るよと言ひました。」

母は手を打つた。それでもまだおいたを止めてゐないのを知つた時に、ペニスを切り取ると嚇かした。

母は彼を打つた。怒鳴りつけた。「病氣になりますよ」とか醫者に「切り取られますよ」とか云つた。父は「死んでしまふぢやないか」と嚇した。

全身にお出來（腫物）が出來て痛くて仕方がなくなる。

母はナプキンを被せて、それを「切りとる」と嚇かした。「それは罪ですよ」また、そんなことを考へるさへ「病氣になる」と注意した。

母は「彼の體をタオルで縛つて引きちぎる。」

新聞雜誌の漫畫欄も、大好きな食物（卵）も與らないことにした。そんなおいたはお前の心の獸物がするのだと、恥づかしめた。後には「お前の腦はぐにや〳〵になるよ」とか、お前はゲラルド（子供達が氣違ひと呼んでゐる白痴の子）のやうになつて行くよ。」と言つて嚇かした。猶その後で感化院で嚇かし、そして感化院の規則を適用した。

母は「彼を手ひどく懲した」「彼を打つてベツドに寢かせた」そして彼に告げた「イエスは彼を懲しめるだらう。そして彼は惡い人間となるだらう」と。

それは善くないことだ。巡査が牢獄に連れて行き、父は切り取つてお前はもうチンチンのない子になつてしまふと告げた。

「それはあなたの出來る最も惡いことだ。それは病氣の原因になる。それで藥を必要とするでせう。さうしないならば、それは腐り乾き上つて、そしてペニスなしで彷徨ふ少年になるでせう。」

手を打つて告げた。それは宜しくない、ペニスは惡くなるでせう。

「身體のどこでもそれを弄ぶことは危險だ。若し貴方が鼻を弄ぶと鼻血が出るでせう。それと同じだ。」

それは善く見えない、ペニスは段々眠れて來るでせう。

×

以上の發見は、我々をして眞劍に反省せしめずにはおかない。何となれば、現在に於てさへオナニー及その治療に關する一般の考方は數世紀前流行した觀念や態度に依つて非常に影響されてゐたことがまざまざと分つたからである。例へば以上の種々な威嚇と、前世紀に於けるガレンの警告との間には大變に似通つた處がある。ガレン曰く「この若者をよく見守れ。晝も夜も一人でおくな。少くとも彼の室の中で眠れ。この習慣が着くと云ふことは若者にとつて最も致命的であつて、彼はこの習慣を墓場まで持つて行き、彼の心身は常に無氣力になる。」

偶然的發見で興味のあるものもある。例へば、惡癖對策としての最良の方法に關してどう云ふ意見を敎へられたかと別に兩親達に尋ねて見たわけではなかつたが、三二〇名中唯一名の患者の兩親のみが、次の如く子供の醫者が敎へたことを

語つた。卽ちその醫者は今日では一般に建設的（舊來のもの〻やうに破壞的でなく）な取扱法として認められてゐるものを教へたのである。この子供の父親は、子供が約一歲になつて度々手淫した時に、家庭醫の忠告に從つてこれを放任しておいたが、その性癖は遂に消失したとの事であつた。

また第四表には、若し惡癖を止めないならば醫者に云つてペニスを取つて貰ふと云はれてゐる子供の多いことが示されてある。この事實は、小兒科診療所や個人の醫院に行き、其處で處置を受けねばならない子供等、が旣に恐怖を以て臨んでゐることを明かにするものであるが故に、實際問題として重大な意味があるわけである。

今一つの興味ある觀察は、この研究の材料となつた患者の大牛の場合は、惡癖の子供を威嚇するのは母又は母代理者だと云ふことである。これはフロイドがエディポス・コムプレクスの崩壞と題する論文の中で云つてゐるところと明に一致してゐる。卽ち、フロイドは威嚇をなすものは常に婦人であると云つてゐるのだ。この問題は、オナニーに依つて加へられる威嚇が如何なる型のものであるかと云ふ點で、それ自身興味があるが、これは將來に期せられる研究主題である。

四、結　論

この研究は範圍こそ限定されてゐるが、三二〇名の子供の中、一二八名、四〇パーセントがオナニーに關して破壞的に扱はれたことを示してゐる。最も多く用ゐられてゐる破壞的方法は直接的威嚇法である。その威嚇は猛烈な性質のものである。肉體的威嚇は、他の型のどれよりも屢々用ひられ、これ等の場合の牛以上は、性器危害で嚇かされる。この發見にはまだ控目なところがある。何故ならば、親が子供のオナニーを忘れてゐず、また如何に行はれたか覺えてをり、事實通りに話せる自信のある場合のみがこ〻に含められてあるのだからである。

子供達のオナニーを發見した時に何を爲し、何と云つたかに就いての兩親達の言葉通りの報告は、精神分析處置の過程に於いてゞなく、事務的な診察過程に於いて得たものであるとは言へ、猶精神分析學の根本命題に合致してゐるのは特に重要である。言葉を換へて言へば、この研究はフロイドの所謂去勢脅威を著しく確證した形になつてゐる點に特殊な興味がある。精神分析はまた屢々、極く少數の實例に就きそれを基礎として理論を立てると云ふ批難や、成人が幼年時代を回顧してそれで理論を立てると云ふやうな批難を被る。けれどもこ〻に三二〇名の子供に就いて、吾々は精神分析的主張（子供達がオナニーをすると去勢を以て嚇かされるといふ）が實質的支持を得たことを吾々は發見するのである。この事實は重要である。何故なれば去勢脅威は去勢不安から生ずる

ことが明だからである。

全體としてこの發見は曾て充分に解明されなかつた處の多くの問題を問題たらしめる機緣となる。例へば、問題の子供でなかつた處の子供が、オナニーで威嚇されたその影響はどうか、この種の威嚇が常に婦人に發出してゐるといふのは眞實か、そして若しそれが眞實であるならば、子供に取つてこの事の意義は何であらうか。兩親の教養、信仰、經濟的事情などと子供のオナニーへの反應の型との間に何らかの關係が存在するか。オナニーの處置に使はれる慘酷な方法と子供に於ける恐怖又はその他の神經症的徴候の發生との間に何か相關關係はないであらうか。オナニーに關する人々の知識は屢々あまりに完全なものと認められ過ぎてゐた。然し乍ら、この研究に依つて見ても當面の問題に關する經驗的資料は不適當であり、その問題に就て今後なほ多くの研究のなさるべきことを示してゐる。

最後に、精神衞生の見地からしても、右の發見は從來の見地への一つの挑戰である。多くの精神病理學者が信ずるやうに、子供のオナニーに對して成人が爲す嚴しい威嚇が、若し不安を生み神經症を助長するならば、そこには子供の將來の福利のために於てなさるべき大きな分野がある。深く根ざしてゐる兩親の誤れる態度を教育は一向に更へようともしてゐないことは明瞭である。然し乍ら、意識的にまた無意識的に子供の建設的取扱に興味を持ちながら、未だ自瀆の危險に關して古い教育の影響の下にあるこれらの兩親達は、彼等子供の手淫を治療することに於て取るべき賢明な行程に關して、健全な意見をきいて利するであらう。かやうな意見を與へる論理的な人は、子供の幼年期中の健康を預つてゐる小兒科醫や家庭醫である。何故なれば、彼らは子供の健康法に關する科學的訓練を持つてゐる者として、子供の一生の初めての苦しい時代に、子供と接觸を持つ最初の家族外の者だからである。

（完）

延島英一譯・定價一圓五十錢・送料十錢
ナポレオンの精神分析
少年時代の異常行爲、父親との同一化、戀愛生活、性的動機の昇華など、興味ある個所多し。

宮田戊子
大槻憲二 共著
四六版三五〇 箱入美本 定價二・五〇 送料一二錢
一茶の精神分析
一茶は俳家としても極めて興味ある人物です。奇人で凡人で、偉人で小人で、病的で健康な、矛盾した性格です。俳句も分析して見ると面白味が一層深く鑑賞せられます。本書は從來の類書には到底見られぬ新しい研究です。

芭蕉と性愛

——その罪障感と自然思慕の分析——

宮田戊子

序說

芭蕉と性愛といふテーマは相當の興味を人々に與へるらしい。だから芭蕉死後、彼の亡命の理由を女性に結びつけ、蟬吟夫人と關係があつたとか、兄半左衞門の婦としか〱の噂があつたとか、主人の侍女と艶聞があつたからだとか等々の說があるのである。芭蕉のやうに聖人視されてゐる人のかゝる關係をさぐることは、いはゆる聖人を凡人へ引下ろしの意味において、又自分たちの遊蕩行爲を辯護する意味において誰人も興味を覺えるらしいことは、曾て壽貞が芭蕉の若い頃の妾だといふことがわかつた時、故沼波瓊音氏が「芭蕉樣、よくぞ妾をお持ち下さいました」と狂喜したことの中に窺へる。然し今私のこの研究もそれと同じ動機に見るならばそれは誤りであつて、私達は芭蕉を一個の人間として觀察するといふ點では引おろし的研究者と歩を一にするものではあるが、單なる興味で研究するのではなく、實に科學の照明による人間そのものゝ探究のその一環にほかならないのである。

とはいへ、芭蕉の此の方面の研究は中々實證的にやつて行くことは出來ない。素より困難は覺悟の前であると云つても元來資料が乏しいのであるから如何とも仕樣がないのである。しかし仕樣がないといつて拱手してゐたのでは、いつまで經つても分る筈がないので、分るべく努力する、分る方へ一ミリでも一センチでも進んで行くといふ方法をとるより外ないのである。斯くて多くの人がそのための捨石となるならば、やがて次第にその全貌がはつきりする日も來るだらうと思ふ。私のこの小稿も、その捨石の意味にほかならないのである。

芭蕉とその母

芭蕉にとつて最初に見えた女性はいふまでもなくその母である。これは精神分析學による研究にはもう既定のことである。ところが芭蕉といふ人は、どういふ譯か郷里のこと、肉親のことを語るのを回避してゐるかのやうに、何もそれを記してゐないのである。それでこれまでの諸研究もこの事に至ると極めて茫漠とした記述しかなし得なかつた。いふまでもなく芭蕉の郷里關係、肉親關係の諸事實は、彼の生涯に投射することの少くない重要なことなのである。これは敢て分析的研究によるものばかりではないであらうが、殊にその父母の研究は分析的研究にとつて重要にして缺くべからざるものである。こゝで郷土史家の史實の掘起しを期待せざるをえなくなる。

芭蕉の生涯の行動を通觀すると、その特徴的なのは罪障感をもつが如き言動と、自然に憧れて漂泊の生活をしたことゝである。この二つの特徴は元來一の原因に發してゐると思はれるが、このうちその罪障感に就ては後に述べるつもりであるからこゝでは云はないが、自然を思慕してやまぬ行動をこれまでは先天的のものと考へて來た。もし芭蕉に早くから一貫して自然への思慕が明らかにされたなら私もこの說に贊成するかも知れない。しかし困つたことには芭蕉は、初期にはさういふ自然讃美とは反對に、人事を多く取扱ひ、それには西鶴などゝ同じやうに本能解放へ向ふ意圖さへも見られるのであつて、自然讃美と密接な關係のある行脚も、江戸へ出てから延寶四年に一度歸郷したほかは、貞享元年再度の歸郷まで一ぺんもしてゐないのである。それが此の年以後は貞享四年の『笈の小文』四年の『鹿島紀行』元祿元年と推定されてゐる『更科紀行』同二年の『奥の細道』七年の歸郷等、頻繁に行脚をしてゐるのであるから、誰でもこの貞享元年ごろに彼をしてさうさせる何かゞあつたと考へるのは極めて當然のことである。

芭蕉の郷里伊賀の上野町では、郷土史家が盛んに芭蕉の史實探究に努めてゐる。そのうち菊山當年男氏は昭和六年に、『芭蕉亡命の一考察』なるパンフレットを發行し、又十三年一月から雜誌『鶏頭陣』に「芭蕉と伊賀の俳壇」なる題下に、郷里と芭蕉との關係を明らかにし、又村地圓治郎氏も、昭和六年『芭蕉と伊賀』なるパンフレットを出版された。私の以下の研究もこれ等郷土史家に負ふところ多いのであるが、なかんづく菊山氏が前記パンフレットで芭蕉の舊主蟬吟のことを明らかにし、又「芭蕉と伊賀の俳壇」では、芭蕉の父母の歿年月をその菩提寺の過去帳によつて調査して發表せられたことは、私の研究に重大な手がゝりを與へたのである。

菊山氏の調査によると、芭蕉の父は芭蕉が十三歳の明暦二

年二月十八日に死んでをり、*母は天和三年の六月二十日に死んでゐる。この母の死んだ前年の天和二年には、芭蕉は冬、その深川の庵が火災に罹つて甲斐に避難したが、郷里からの母の訃はこのため翌年の秋以後再建した芭蕉庵で聞いたらしい。彼の大轉機と目されてゐる貞享元年は、この天和四年が改元した年であつて、こゝに私は彼の漂泊生活への契機があつたと考へざるを得ないものである。彼はこれ以後前に記した通り漂泊癖をもつやうになつた。彼の『奥の細道』の劈頭に、その旅に誘はるゝ心を「そゞろ神の物に憑きて心を狂はせ、道祖神のまねぎにあひて、取る者も手につかず」と云つてゐるが、彼によつて「神」「道祖神」と意識されたものこそ無意識における母への思慕にほかならなかつたと考へるものである。この考へは分析者でない菊山氏もほゞ認めてゐるらしく、「母の死に依つて異常な壓迫を感じたに相違はない」といひ、それが母の愛に刺戟されたものであると云はれてゐる。

*芭蕉の家の菩提寺愛染院の過去帳は、今から三十年ばかり前に亀井曉氏が調査して疑問とした由、勝峯晋風氏の『明治俳諧史話』に見えてゐる。然し我々としては他によるべき資料の出ぬ限り、これによるほかはないと思はれる。

ところで芭蕉は、この母の訃とそれへの思慕をどのやうに表現したらうか。天和四年（貞享元年）正月の作と傳へられる

元日や思へば淋し秋の暮

は、明らかにさうした傷心の裡にあつた彼を見るべき句であるが、それにしても、前置も何もつけずにこのまゝ表出して恰も母の死によつての傷心を人に憚るが如き態度を示してゐるのはどういふわけであらうか。又明らかに母の死によつての歸省と思はるゝこの年の『野ざらし紀行』にも、母に關することは

長月の初め故郷に歸りて、北堂の萱草も霜枯れ果てゝ跡だになし。（北堂は主婦の住むところ、こゝの萱草も霜枯れて云々は母の死んだことを象徴的に書いたものである）何事も昔に變りて、兄弟の鬢白く眉皺よりて、唯だ命ありてとのみ云ひて言の葉もなきに、兄の守袋を解きて、母の白髪拜めよ、浦島が子の玉手箱、汝が眉もやゝ老いたりと暫く泣きて

手に取らば消えん涙ぞ暑き秋の霜

の如く、いつ死んだとも何とも書いてをらず、貞享四年の『笈の小文』にも

古さとや臍の緒に泣く年のくれ

とのみしか記してゐない。のみならず、彼は貞享元年の歸省も、それが母の死によつてゞあることを他の門人にも朋友にも秘してゐたらしく、彼の友素堂は

我が友ばせを老人、故郷の故きをたづねむつゐでに、行

脚の心つきて某の秋、江上の庵を出で、またの年のさ月待つ頃歸りぬ云々

と云つてゐるやうに、母の死で歸省したことを知らず、「故きをたづね――行脚の心つき」てゞあつたと思つてゐたのである。どうして芭蕉はこのやうに故郷に關することを秘してゐたのであらうか？

まづ常識的には彼が亡命したからであると考へられるかも知れない。然し彼の亡命はさう世を憚るものではなく、藤堂家の藩制も、離藩者に對して嚴重ではなかつた。年代はやゝ下るが、佐倉藩の儒者澁井太室の書いたものにこの事の記錄がある。

藤堂家は暇願候へば料理を賜候上、手自腰の物を遣し、思ふ程の祿遣かね候間尤の事に候。もし他所にて片付なく候はゞ立歸候樣にと被申候よし、今はいかにや不承候(『甲子夜話』)

これは藤堂本家で、芭蕉の主君たる新七郎家ではないかも知れないが、然しもと〳〵一家であるから藩制はほゞ同じやうなものであつたと考へられる。菊山當年男氏もその鄕土史家たる立場からして、新七郎家でとつた離藩者に對する例を幾つか擧げて說示されてゐる。(『鷄頭陣』十三年四月號參照)またよしんば鄕里では憚られることでも、何も江戸の友人にまで秘してゐる理由はない筈である。そこで私はこれを殊更の行動と見做し、芭蕉は逆に母への定着の强かつた人であると觀るのである。

菊山氏の作成した松尾家系譜によると、芭蕉には半左衞門又右衞門の二人の兄と姉一人があり、芭蕉は三男であつて、父は芭蕉が十三の時死んでゐるので、斯ういふ親子にあり勝ちの例に洩れず、母から相當寵愛をうけてゐたらしく考へられる。この母は宇和島の人桃地氏の女であつて、藤堂高虎が宇和島から伊勢へ國替へになつた時、もとの緣故で松尾氏に嫁し來つたもので、芭蕉の初めの號桃靑はこの母方の姓をとつたものであるといふ說もある。※この母はどのやうな人であつたか少しも知られてゐないが、芭蕉が美男であつたこと、並に後述するやうに彼が連句の付合で「我顏の母に似たるもゆかしくて」と詠んでゐることによつて、美しい女性だつたと考へられる。このことはなほ號を重ねて後に詳述するであらうが、芭蕉が女性一般を梅や月によつて象徵してゐるらしいとによつてもそれが略々證せられるのではないかと思ふ。即ち、芭蕉によつて梅や月に象徵された女性一般は、この母の俤なのであつて、それに他の美しい女性がコンプレクスされてゐるのであると觀なければならない。

※芭蕉の最初の號たる桃靑は李白の裏がへしだといふ說もあるが卑少感をもつてゐた初期の芭蕉が、支那の大詩人の名をもぢつて自巳の號とするといふやうなことは疑はしい。桃地の桃は母

方の姓に因むばかりでなく、桃が多くの場合母胎の無意識的象徴となることは、桃から生れた桃太郎の傳說があるのによつて知られる。桃が股に似てゐるので、その名を得たのであらうとは大槻憲二氏の說であるが、(同氏『精神分析雜稿』)芭蕉が桃青と號したのは延寶三年の『十吟百韻』に見えるのが最初であるが、同八年の『常盤屋之句合』には華桃園なる號を用ゐてをり、のちその甥に桃印、桃隣などの號を與へ、また加賀の山中では久米之助といふ少年に桃妖といふ號を與へてゐるところを見ても「桃」といふ字に彼が執着することがわかり、たま〱桃地氏なるが故に、桃が母の象徴となつたといふことの分析的解釋が成立する。志田義秀氏はこれを詩經桃夭篇に基づいてゐると解されてゐるが、これは芭蕉が夭々軒とも號したことから判定されたものらしい。私の考へは夭々軒から桃青を思ひついたのではなく、逆に桃青の因みによつて夭々軒の別號を案出したものと思ふ。だが詩經による號であるとなす志田博士が、桃隣にだけは、桃隣が芭蕉母方の出であるので、松尾氏に隣る桃地氏の意味だらうと云はれてゐるのは前言を離れて我々の主張に近くなつてゐる。なほ芭蕉に親しくしてゐた俳人で、下野黒羽には桃翠と號する者があり、桃々坊(舍羅)桃鏡などの俳人もゐた。これらが芭蕉から貰つた名かどうかは不明だが、すでに芭蕉の號が桃青である以上故なくして桃の字を使ふ譯はないと思ふので、桃青の一字を貰つて號としたものと見て大した間違はあるまい。もしさうとすると、かくまで桃の字に執着する芭蕉の心理が常識では不可解なものにならざるを得ない。

芭蕉の母コムプレクス

斯く母に寵愛され、又自分も母に定着を强烈にもつてゐた芭蕉も、九歲の時、藩の掟で兄の主人藤堂新七郞良精の子良忠に仕へるため、その膝下を離れなければならなくなり、且つやゝ長じて儒敎的に敎育されて來て、男女の別が嚴かにされると次第に抑壓が生じて來、他に母への代償を求めるやうになる。芭蕉の晩年に姿をあらはす壽貞は、芭蕉の若い頃の妾であると云はれ、近來史家にもこれが認められてゐるやうであるが、若い頃といふのはいつ頃に當るのか、主家を亡命してから六年間京都の季吟の許に居たがその時か、乃至はそれ以前良忠生前、殿中に仕へてゐた時の事かとも考へられるが、私はこれを藤堂仕官中の事と考へるのである。これは私ばかりが考へる想像ではなく、菊山氏もその『芭蕉亡命の一考察』で左のやうに述べてゐる。

少し臆測に過ぎるといはれるかも知れぬが、武門が男系後繼者のないことによつてお家斷絶といふ大事をひたすら恐れてゐた爲の御內妾を、當然の行ひとして咎めず憚らず同棲の多角關係を結んでゐた時代風習の當時に於て、特に非常な早婚の因襲ある御一門五千石の士大將の御殿勤めをしてゐた芭蕉が、果して最後まで童貞を保つてゐたかどう

か？＊

＊この菊山氏の說は私が前號に指摘した後年の「紅梅や見ぬ戀つくる玉すだれ」の句に關する考へとも一致するものがあることを思ひ出していたゞきたい。卽ちこの句に示された幻想は、母又は其他の女性が、殿中に奉仕した俤と中世とがコンプレクスされてをり、定家の歌に庶幾した妖艷と、芭蕉の句のあだなる傾向とも一致するところがある。芭蕉が李白や西行と共に定家を數へてゐるのもそれによるものであらう。

私はこゝに芭蕉の遊蕩生活は彼が母への定着が強く、それに對してアンビヴレンツ的な心理を生じて初まつたものと考へるのである。彼の母への思慕は、母方の姓たる桃地をとつて桃靑と號したことにも、母の死んだ翌年から漂泊生活を初めたことにも、また或は左のやうな連句の付合によつてもそれが實證されるのである。

小袖袴をおくる戒の師
我が顏の母に似たるもゆかしくて　芭蕉

卽ち、こゝでは母の俤と自分の顏とが一つのものとして表現され、我が顏につけて母の俤がゆかしく感じられてゐるのであるが、この付合はむろん創作であるにちがひない。精神分析に反對するものは特にこれを強調し、我々がこの句を無意識より出たものなることの指摘を信じようとしないかも知れないが、しかしこれほど分析學の公式に誂へ向の表出を單なる創作として見のがすことは到底出來ないのである。意識の面の記述に於て、先に述べたやうに母に關することを回避した芭蕉も、無意識に於ては母への思慕が強く、それがたま〳〵検閱を潛つて斯かる表現を見たものと解さねばならない。又

憂しと髮きる葛のいつはり
母の愛にあまえて月を背けをり　芭蕉

の付合についても同じことがいへる。これが前者と異るところは、この句は母の愛に甘へてゐた少年時代の回顧で、この付合によつても芭蕉がいかに母への定着が強かつたかゞ推測出來るのである。

芭蕉の御殿勤めは母への美しき幻影を破壞したと同時に、新たな母の俤を與へたにちがひなく、故に私は彼の亡命はこの新たな母の俤、卽ち女性に絡まるものであつたと考へざるをえないのである。芭蕉が身體の弱かつたのは遊蕩生活の結果だといふことを近來史家も認めるに至つてゐる。（志田義秀氏『問題を主としたる芭蕉の傳記の研究』參照）この遊蕩生活が母への愛着か叛逆かは、精神分析を學ぶものにとつて說明を要せぬところであらうが、かゝる母への愛着とそれの愛憎相反としての叛逆は、彼が成人するに從つて、卽ちその自我が超自我として作用するに從つて罪惡視され、ことさらに母の許に就てよそ〳〵しさを表白したものであらう。勿論こ

れは今の處想像にとゞまるが、然し他に母に對して何故斯くよそ〳〵しくするかの理由が明らかにされぬ限り、この考へは根據あるものとなつて承認されるであらうと信ずる。

後年の芭蕉が女性に對して、七歳にして席を同じうせず的な區別をしてゐたことは、彼の『奥の細道』の市振驛で遊女と同宿した時の文によつても窺へるのである。それには左のやうに記されてゐる。

――我々に向ひて、行方知らぬ旅路の憂さ餘り覺束なう悲しく侍れば、見え隱れにも御跡を慕ひ侍らん。衣のうへの御情に大慈の惠みを垂れて結縁せさせ給へと涙を落す。不便の事には侍れども、我々は處々にて留まる方多し。唯だ人の行くに任せて行くべし。神明の加護必ず恙なかるべしと云ひ捨てゝ出でつゝ、哀れさ暫く止まざりけらし――

事實芭蕉はこの時なほ長途の行脚を控へてをり、伊勢まで同じ道をゆくとはいひながら、風雅人としての芭蕉の行動を掣肘するであらうこの二人の女性を伴うて行くに堪へなかつたことは明らかである。そこでこの行動が女性に對する警戒でなく、實際的な必要から斷つたものとも見られるが、もしさうとすると「哀れさ暫く止まざりけらし」といふ文は、初めに斷つた彼に似氣ない弱さを現はしてゐる。『奥の細道』の文は、當時書いたまゝが殘つてゐるのではなくして、芭蕉は再三再四推敲を加へてゐるらしいことは既に一般に認められてゐるが、それにも拘らず、このもの欲しげな句が殘されてゐることに、人は一抹の人情味を感ぜずにはゐられないであらう。前にも記したやうに『奥の細道』以前に芭蕉は自己の内に自己の意に從はぬものゝあることを認めてこれを夷狄、禽獸と名づけ、意識を月花に轉じ、造化にしたがふことによつて、これを克服しうると考へてゐた。それは『笈の小文』劈頭の文によつて明瞭にされるが（本稿後出）またその元祿五年の『閉關の說』なる文に左のやうに記してゐることによつて、彼の女性に對する警戒心ははつきりするのである。卽ち、

色は君子の憎む所にして、佛も五戒の初めに置くと云へども、さすがに捨て難き情の生憎に、哀れなる方々も多かるべし。人知れぬ暗部の山の梅の下臥しに、思ひの外の匂ひに染みて、忍の岡の人目の關も守る人なくば、如何なる過ちをか爲出でん――※

卽ちこの文と『笈の小文』劈頭の文と、彼の市振の遊女に對する行動とを通觀する時、女性に對する芭蕉の異常な警戒ぶりが明らかにされる。『笈の小文』の貞享四年には彼は四十四歳、『奥の細道』の元祿二年には四十六歳、『閉關の說』の五年は四十九歳であつた。この年になるまで芭蕉が女性に對して斯くまで嚴重な心の堤を築いてゐたことは、老年になるにしたがつて彼が若い頃の遊蕩を回顧する心が生じてゐたので

もあらうが、(それは後に掲ぐる「閉關の說」前半の文によくあらはれてゐる）この異常な警戒心の中に私は、彼が女性に對する誘惑に堪へうる自信のなかつたことを認めざるを得ないものである。卽ち「閉關の說」のこゝに擧げた文は、彼の自我がエスに對して說いてゐるものと見なければならないのである。卽ち芭蕉は、自分の過去がさうした誘惑に堪へられなかつたので、人もさうであるとして說いてゐるものと見られ、老境に入つた彼は、自ら女性に對して警戒すると共に、過去を顧みてその體驗から人々の注意を喚起してゐるものと考へざるを得ないのである。この女性に對する意識的な警戒心が、無意識において抑壓となつてゐるであらうことは殆んど疑ふの餘地がないが、かゝる抑壓が母の死に對して前に述べたやうな態度を執らしめたのであらう。そしてそのもとは母への定着の強さにあつたと思はれる。

＊「閉關の說」が自己の遊蕩の辯護であらうといふことは後述するが、この文は愛慾（エロス）に對して、芭蕉が肯定と否定の線を彷徨してゐるところに興味がある。もとは俳文的に自己の孤高の生活への思慕を表現せんとして、誤まつて肯定否定の線をさまよふたものとも見られるのである。

蕉芭の作品に現はれた女性及戀愛

母への強い定着が女性崇拜者となり、或は同性愛となることと精神分析ではすでに定說となつてゐる。芭蕉はその抑壓が強かつたにもかゝはらず、その作品に女性がしば／＼出て來るのは彼の女性崇拜を表現したもので、彼のリビドーが昇華せられたものであると見られる。

もみぢぬと來て見よがしの枝の露

よく云ひ協へられ侍れどももみぢぬ櫨を好まるゝは異風なる物好きにて、色に耽らぬ人なるべし。（『貝おほひ』）

第十一番　左持

女とや茄子葉隱れに打傾ける姿

右

山賤の垣ほの角豆とも詠めるや

己が葉隱に打傾ける茄子の君、紫式部が娘にや、若紫のゆかりにや、如何なる者の妻となり何れの人の娶とやならん。なつかし。右の句も又、山賤の垣ほに匍へる靑さゝげ、人は來れども言傳もなしと詠めるは古今集寵どのゝ下女の詠みたる歌なるべし。何れかをかしく何れか哀れ深からん。（『常盤屋之句合』）

第十九番　左

賤が契りは干瓢の結びも止めず

右　勝

かれ〳〵なるや野邊に冬瓜の獨り寢る

瓢が下の賤の情、干瓢の結びも止めぬ仇なる契こそはかなけれ。されども干瓢むくといふ時は六月の季に出でたるを、秋の句に合せんこと如何が。右は又うら枯れわたる秋の野に、冬瓜ばかり取殘されて獨寢に打倒けてあぢきなきさましたる見立新しく感多し。（同上）

第二十二番　左勝

はづかしや根深の老の黛も白勝に

右

あけぼのや霜に蕪菜のあはれなる

淺葱の綠美はしく韮の若葉の嫋やかなるも、いつしか根深の白根がちなる、白髮の老女に見立てたるも新し。又霜下に萎む蕪菜の姿氣色なきにはあらざれども、根深の前の古へこそ猶艶めかしけれ。（同上）

もと〳〵合せた句がすでに擬人的に女性を詠んだものが多いから、その判詞もしたがつてさういふ傾向を迦らざるを得ないといふ見方もあらうが、それはこの判詞のみを獨立して見ようとするからで、以下に擧げる彼の女性を詠んだ句、女性に與へた句、女性に因む句と併せ讀んだならば、芭蕉の作品の一傾向が新らしく認識されなければなるまい。

西行谷の麓に流れあり。女どもの芋洗ふを見るに

芋洗ふ女西行ならば歌詠まん（『野ざらし紀行』）

その日の歸るさ、或る茶店に立寄りけるに、蝶と云ひける女、吾が名に發句せよと云ひて、白き絹出しけるに書きつけ傳る。

蘭の香や蝶のつばさに薫す（同上）

晝の休らひとて旅店に腰をかけて

つゝじ生けてそのかげに干鱈さく女（同上）

伊勢の國又玄が宅にとゞめられ侍るころ、その妻の男にひとしく物毎まめやかに見えければ、旅の心を安くし侍りぬ。かの日向守の妻、髮を切て席をもうけられし顏ばせ、今更申出て

月さびよ明智が妻の噺せん

おのが音の誰人となん、世にさたせられて老の後、志賀の里に隱れ侍しとなり。今大津松本あたり智月といふ老尼の許に尋ねて、斯る事など語り出けるついでおもしろければ

少將の尼のはなしや志賀の雪

或は

ちまき結ふ片手にはさむ額髪

上　野　奥

花に醉へり羽織着て刀さす女

きさがたや雨に西施がねむの花

行く末は誰が肌ふれん紅の花

遊女の畫讃

枝ぶりの日に〳〵かはる芙蓉かな

園　女　亭

暖簾の奥ものゆかし北の梅

白菊の目に立てゝ見る塵もなし

砧打つて我に聞せよや坊が妻

小町の畫讃

たふとさや雪ふらぬ日もみのと笠

ひとつ家に遊女も寝たり萩と月

尼壽貞が身まかりけると聞て

數ならぬ身とな思ひそ玉祭り

山督塚にて

うきふしや竿となる人の果

また凡兆の書いた「柴賣の説」なる俳文の中には、凡兆が大原女のことを書いたあとで、芭蕉が大原女を見て「身のいやしきを思へば、官女もかたらひがたし。心の鈍きを思へば傾域もなほまじはりがたし。もし妹脊をなさむに、此をなごをなむ」と云つたことが記されてゐる。この言葉は、一場の戯言らしく言表してゐるにかゝはらず、最高級の女性はその身分の低いために眞實が得られず、さりとて遊女の如きも自分の田舍武士上りの浮浪者として、眞實を以て交るとは考へられず、とすれば、自分と妹脊の語らひをなすものは、まづこの大原女などであらうといふ意味で、この言葉の中にも、芭蕉の遊蕩の末らしい口吻が窺はれるが、以上を見て芭蕉が如何に女性に關心をもつ人であるかを知ることは困難ではあるまい。しかもこれが穩健を旨とする發句に於てゞさへ斯うであつて、奔放にして世話に砕けた事象を取扱ふことの多い連句の附合に於ては、たゞに女性の讃美ばかりではなく、芭蕉の戀愛の體驗が如何に多樣性を帶びてゐるかをまで示してゐるのである。

旅枕油臭さや嫌ふらん　　芭蕉
鰯で假のちぎり燒かるゝ

上置の干菜きざむも上の空　　芭蕉
馬に出ぬ日は内で戀する

うちかづく前だれの香をなつかしく　　芭蕉
たはれて君と酒買ひにゆく

これは最も下層の男女の戀を表現したものゝ一斑である。

藝者をとむる明月の關　芭蕉
おもしろの遊女の秋の夜すがらや
床更けて語ればいとこなる男
緣さまたげの恨のこりし　芭蕉
遊女四五人田舍わたらひ
落書に戀しき君が名もありて　芭蕉

これらは遊女などの戀を表現したもの。

秋草ゑがく帷子は誰ぞ
もの云へば扇に顏をかくされて　芭蕉

これは深窓に育つた女の戀。

宮にめされしうき名はづかし
手枕にほそき肱をさし入れて　芭蕉

身分のちがふ宮に召された戀。女が男への手枕にほそい肱をさし入れるといふところに官能的描寫がある。

目の張に先づ千石はしてやりて
消ゆるばかりに鐙おさゆる　芭蕉

前句千石はまづしてやる程の目の張りを持つた女を描いたに對して、後句は馬に乘つて出で立たうとする男に、その鐙を押へて消ゆるばかりの嬌態を示す女を附けたのである。

肌のきぬ女のかをり留まりけり
文ぬすまれて我うつゝなき　芭蕉

前句は源氏物語の空蟬の卷に見る如き女の移り香の描寫に對し、芭蕉はその女に對しての文を盜まれて呆然自失してゐる男を描いてゐる等々。

さて以上は連句における芭蕉の戀句が多樣性をもつことの一斑であつて、實はこれはその九牛の一毛にすぎず、これらは芭蕉一生の作品には枚擧に遑ないほどあるのである。もちろん、これらの悉くが彼の體驗から出てゐるとは考へられないが、然し「手枕にほそき肱をさし入れ」といふやうな立入つた描寫は、斯うした經驗のないものには出來得ないことである。卽ちこれらの句は、芭蕉の前半生の遊蕩生活を何ほどかあらはしてゐるものと考へるほかはないのである。

壽貞を通して觀たる芭蕉の遊蕩

こゝに芭蕉の遊蕩を如實に知りうる唯一人の女性である壽貞といふ尼のことが再び問題にされなければならなくなつて來る。壽貞が芭蕉の若い頃の妾であつて、壽貞と芭蕉との間には子供まで出來た。それが次郎兵衛であつて、芭蕉庵に出入りしてゐたとは風律の『小ばなし』に出て以來、今日では一般にその說の確實性が認められてゐる。こゝで妾といふ言葉はどういふ意味をもつか、勿論今日いふやうに正妻あつてその次ぎの第二號といふやうな意味ではなく、正妻でないか

りそめの契りを結んだ女か、或はほかに正妻に準ずる定まつた女がある場合、それ以外の特別な關係をもつ女性を指すかとも考へられるが、それにしても既に子までもうけたといふことは並々ならぬ仲であつたに相違ないのである。で、この壽貞と芭蕉の關係がいつ結ばれたか、それは壽貞か次郎兵衛かの年齢でもわかれば凡その見當もつくと思ふが、それらが一切不明なので全く雲を掴むやうなものになつてしまふ。やむをえず壽貞のことに觸れてゐる芭蕉の書いたものによつてその輪廓を描いて見るよりほかに仕方がないのである。そこで壽貞關係の文献を少し擧げて見ると、元祿七年上方への行脚の途中、五月十一日（閏付で）江戸の杉風宛に出した書翰に左の通りあるのが最初である。

一、猪兵衛病氣、桃隣無二油斷一被二仰付一可レ被レ下候。折々深川へ御なぐさみに御出あれかしと存候。され共壽貞病人之事に候へば、しか〳〵茶をまいるほどの事も得致まじくと存候、これらが事共などは、必御事しげき中、萬御苦勞に被レ成被レ下まじく候。猪兵衛、桃隣指圖に而ともかくも留守相守り、火の用心能仕候樣に被二仰付一可レ被レ下候。此度所々狀數有レ之候間、重而具に可二申進一候　以上

これによると、この旅行中壽貞は深川の庵で病床に在つたことがわかるが、しかし「しか〳〵茶をまいるほどの事を得致まじく」といふのだから、大した病氣ではなく、寢たり起たりする位だつたらしい。しかし後に見るやうに一月ばかりして世を去つてゐるので、病氣が小康を得てゐた時かも知れないといふのは志田氏の見解である。なほこの書簡について志田氏は、病氣故茶をまいることも出來まいと云ふ位だから平素は人のもてなし事に巧みな、いはゆる玄人筋の女性だつたのではなからうかと云はれてゐる。更に壽貞關係の書簡を見て行くと、同年六月三日附松村猪兵衛（伊兵衛とも書く、芭蕉の甥だと云はれてゐる）宛のものゝ中に、

一、理兵へ（衛）細工無レ之時分せめて煩不レ申候樣に御氣を可レ被レ付候。右之通壽貞も御申きかせ可レ被レ下候。おふう夏かけて無事に候哉。樣子具に御申越可レ被レ成候。――

とあるものがあり、それから六日經つた八日付猪兵衛宛

壽貞無二仕合一もの、まさ、おふう同じく不仕合、とかく難二申盡一候。好齋老へ別紙可二申上一候へ共、急便に候間此書狀一所に御覽被レ下候樣に賴存候。萬事御肝煎御精出しの段々、先書にも申來、扨々辱、誠のふしぎの緣にて此人賴置候も、ケ樣に可レ有端と被レ存候。何事も〳〵夢まぼろしの世界、一言理くつは無レ之候。ともかくも能樣に御はからひ可レ被レ成候。理兵へもうろたへ可レ申候間、とくと氣をしづめさせ、取亂し不レ申樣に御しめし可レ被レ成候。以上

とある。卽ちこれによつて、この手紙に壽貞の生前死後のことを述べ、哀悼の意を示してゐるから、芭蕉が旅立つ五月八

日には小康を得てゐたらしい壽貞が、閏五月下旬に歿したことが推知し得られるのである。

それから芭蕉の遺言狀に

伊兵衞に申候。當年は壽貞に付、還〳〵御骨折、面談に御禮と存候所、無二是非一事に候。殘り候二人之者共、十方を失ひうろたへ可レ申候。好齋老など御相談被レ成、可レ然了簡可レ有候

とある。この文中の「殘り候二人の者」とは、まさ、おふうであらうことはいふまでもないが、この二人の女性は、壽貞の娘で、理兵衞といふのもその子であつて、まさ、おふうは壽貞と共に芭蕉庵に寄食してゐたらしいが、この三人は壽貞の子ではあるが芭蕉の子ではなく他の人の子であつたらしい。斯ういふ點から考へると前述の志田氏が壽貞を玄人の女性となすのが肯定されるやうであるが、しかし芭蕉は「壽貞無レ仕合もの、まさ、おふう同じく不仕合云々」と云つてゐるのでこの言葉によつてみると壽貞は、もとは相當の生活をした女性ではなかつたかと考へられ、殊に尼になつて壽貞などゝ號することからして、町人にしても相當の身分あるものであらうが、然しさういふ女性と郷里時代から京都遊學時代の芭蕉とは、あまり緣が遠いので、たとへそれが輕い身分のものにしても、武家などの娘ではなかつたかと考へられるのである。さうして見ると壽貞は、芭蕉が藤堂良忠に仕へてゐた時にその關係が出來たものではないかと考へざるを得なくなる。郷土史家の研究によれば、芭蕉のことを藤堂新七郎家では不忠者と稱してゐたさうであり、舊主良忠の子良長（俳號を探丸子と稱す）の書簡にも

――舊臣甚七郎（芭蕉の名）の認物爲致吟味候處漸屋敷中に壹枚有之候へども出來宜からず折角のお賴に候間御送申上候御落掌被下度候尙殿中御無用可被下候

とあるさうである。（菊山氏『芭蕉亡命の一考察』）不忠者といひ、その筆蹟すら殿中で云々することを憚つたのは、たゞ脫走者、亡命者たるが故ばかりではなく、何かもつと深い原因がそこになければならないと考へられる。

前に述べたやうに藤堂家では、表面離藩者に對して嚴重な處罰を以て臨んだやうであるが、內實は必ずしもさうではなく、菊山氏の調査によると、離藩者で歸參したものもあつたといふことであるから、こゝに不忠者といふ意味が亡命によるばかりでないと思はざるを得なくなり、壽貞は同じく殿中に仕へてゐたもので、直接それとの關係のために亡命したのではなくても、何かにそれが關係があり、又、それが芭蕉の罪障感の因となつてゐるのではなからうかと考へられるのである。

この事はなほ他の事實によつても明らかにされる。芭蕉の江戸での生活の樂でなかつたことは、上方行脚の時去來に金

二歩貸してくれと無心状を出してゐるのを志田氏は僞書らしいと云つてをられるが、芭蕉が金に豐かでなかつたことは、元祿元年膳所の曲水に金一兩二分の無心をしてゐる書簡があることによつて想像されるが、その樂でない生活の中で、三人もの女性を養つてゐたことは並々ならぬ骨折であつたに違ひない。壽貞はともかくとして、まさ、おふうは明らかに芭蕉の子でないとしたら尙更のことでなければならぬ。壽貞としても芭蕉に對して、他人の子を養つて貰つて恬然として居られる筈はないと思ふ。よつてこれは壽貞に對する罪障感からして、芭蕉の方から求めてこれを養つたのではないかと思ふ。これはもちろん、確かな資料が出ない限り想像にとゞまるが、想像にしても、芭蕉の生涯にあらはれた贖罪的言動、及び前掲書簡で壽貞は不仕合ものとて何かそれが自己の責任であるかの言をなし、又まさ、おふうに對しても憐憫の情を示し、遺言狀にも彼らが途方に暮れるだらうと書き送つてゐることから考へて、壽貞に對する罪障感を假定することは强ち無理とはいへないと思ふ。

芭蕉の壽貞への追悼句が『有磯海』に出てゐるが、それには、

尼壽貞が身まかりけるときゝて
　數ならぬ身とな思ひそ玉祭り

とあつて、志田氏によればこの句の「數ならぬ身とな思ひそ」といふのは、壽貞が數ならぬ身と思ふやうな身分の女性だつたのによるさうであるが、これは失禮ながら壽貞の過去と生前の現在とを混同した觀方ではあるまいかと思ふ。生前の現在では成程壽貞は芭蕉庵の食客にすぎなかつたが、過去に於ては相當の身分ある女性であつたのではなからうか。「壽貞仕合無きもの」といふ芭蕉の言葉は、初めから不仕合に生れついてゐる者を指すよりも、仕合な境遇の者が不幸に陷つた場合をいふと解するのが諸種の資料からして妥當のやうであり、そして芭蕉が、自分の生活としては可なりな負擔である三人の女性を養つてゐたことゝを併せ考へると、壽貞が藤堂家の相當身分ある家に生れ、芭蕉との關係によつてうらぶれた生活に墮したものではあるまいかと考へざるを得なくなる。

なほ志田博士は竹人がその『芭蕉翁全傳』で、門人や門人以外の人々に就てやゝ細かに說明してゐるに拘らず「伊兵衞壽貞なほ尋ぬべし。」とて全然說明を與へてゐないのは、該書が竹人が土芳から聞いて書いたものとして、伊賀の人々は誰知らぬ者もない芭蕉と壽貞との關係をことさらに回避したのではあるまいかと云はれてゐるのは同感である。そしてこの事は却つて壽貞が何か藤堂家を傷ける虞れでもあると見られたのではないかとも考へられて來るのである。もし壽貞が京都あたりで芭蕉と關係を生じ、藤堂家に何もかゝはりのない

ものとしたら、たとへ芭蕉の偶像化を幾分傷けるとしても、何も骨を折つてこれを抹殺する必要はなさそうに考へられるし又芭蕉が郷里關係のことを回避して書いてゐることによつても、壽貞が何か舊主家と關係があるらしいと考へるのは極めて普通であらう。郷里に關係なき壽貞はしば／＼書簡等にあらはれてゐるのだから、郷里と壽貞とに何らか關係あるものと觀ざるを得なくなるのである。壽貞を芭蕉の妾だと云つた風律の『小ばなし』には壽貞は芭蕉が主家を去つてから京都へ移つたのだと記してあるのを信じていゝと思ふ。

これについて思ひ出されるのは『去來抄』に左のやうな記述のあることである。

去來曰、伊賀の連衆にあだなる風あり。是れ則ち先師の一體なり。――

春風にこかすな雛の駕籠の衆　荻子

先師此句を評して曰。伊賀の作者、あだなる處を作して尤もなつかしとなり。丈草曰、伊賀のあだなるを先師は知らず顔なれども、そのあだなるは先師のあだならずや――

「あだ」とは『言海』によれば「色めきたること」であり、『廣辭林』には「なまめきたる風情」とあるが、この場合についていへば、この言葉は芭蕉が色めきたる句なまめきたる風情の句をしば／＼作るのを指摘したものである。然し「伊賀のあだを先師は知らず顔なれど、そのあだなるは――先師のあだならずや」といふ連續した言葉には、當時芭蕉と壽貞との關係を知悉してゐた門下が、或る皮肉な意味を含まして云つたものともとれるのである。いふまでもなく彼ら門下は壽貞を通じてのみ師翁の前半生の遊蕩を知つてゐて、それ以外での遊蕩を知つてゐるわけではないので、伊賀のあだは先師のあだであらうと云つてゐるのは、私の觀察する如く壽貞關係の意味をもつものとすれば、壽貞は伊賀に關係があるものと見なければならなくなつて來る。

なほ以上のことは芭蕉の年齢によつてもほゞ證據立てるのではないかと思はれる。芭蕉の亡命は二十三歳の時であるし二十九歳の時には江戸に出てゐるので、その間の六年が京都に居たことになつてゐる。果して京都にゐたのかどうか、季吟に敎へをうけたことは事實として疑ふの餘地はないが、彼の遊蕩を亡命後となす根據は何もないのであるから、二十三歳後に急に遊蕩を初めたと見るより、それ以前からさういふ方面へ足を踏み込んでゐたと見る方が自然であらう。さうして見ると壽貞が何ものであつたかもほゞ見當がつき、伊賀の人の句の色めいてゐるのは先師の範を示すところだといふ門下のいふところも、やゝはつきりして來、郷土史家菊山氏の先に擧げた想像も、想像といへぬ程の力强さをもつて來る。芭蕉が故らに郷里に就ての言葉を回避してゐること、並に前

記竹人が壽貞についての記述を憚つてゐるなどをも併せ考へて、相當な確實性をもつといつてよいと思ふ。

斯くて芭蕉は遊蕩に身を持ち崩したが、しかし江戸へ出た後、母の訃報をうけとると自らの行動を悔い、その惱みに堪へ兼ねて漂泊の生活をなすのであるが、その生活と母との關係は、母が死んだ翌年の貞享元年からその兆候が見えることによつて證明され、彼が「神の物に憑き、道祖神の招きに會ふ」と意識したものが、母への代償を求める無意識が彼を驅つてさうさせたもので、言葉を換へていへば、母への定着が、女性崇拜者たらしめ、更に遊蕩耽溺の生活に墮したが、かゝる行爲が後に彼に罪障感を起させる基となつたと考へられ、藤堂家で彼を不忠者と稱し、殿中でその名を唱へることすら憚つたのは、時恰も蟬吟の死に會し、その兩牌を高野山に納めながらそのまゝ亡命したのによるものであらう。此の時代殉死は一般に禁じられてゐたとはいひながら、主人と特別な間柄にある場合は殉死するのが士道として通例のやうに思はれてゐた。德川幕府が殉死を制禁したのは寛文三年のことであるが、これは蟬吟の死の六年からわづか三年前のことであり、永らくの因襲は中々一片の法令で禁制は出來なかつたらしい。元來殉死そのものゝ性質が忠誠への象徴であり、忠誠といふことは封建制度の觀念的支柱であつて、これを敢へてなさぬものは一般から不忠と見られるやうな狀態だからなほ更である。寛文三年に禁制の令が出たとはいへ、現にそれから六十一年も經つた享保九年、芭蕉が世を去つてから三十年も後に湯島麟祥院で本多喜十郎の家來鹽谷安右衞門といふ人が殉死した例さへある。(『享保世話』卷之二)しかも芭蕉は後に見るやうに主人の「愛寵」が他に超えてゐたにも拘らずそれをしなかつた。そしてそれが婦人の問題に絡つてゐたとしたら、これは不忠者として擯斥されるのは當然である。藤堂新七郎家で不忠者と云つたといふことが亡命にのみよるものでないことは確かであり、それに壽貞との關係から見て、私は斯く推斷せざるを得ないのである。

なほ考へれば、芭蕉の母への定着からして、母に定着をもつものが多く年上の女性か、もしくは自分を支配するやうな強い女性に戀着するのが通例だから、壽貞は芭蕉と同年位かもしくはそれより二つ三つ年上か乃至は身分が芭蕉より上の女性ではなかつたかとも考へられる。湘柳の質の芭蕉より少々ではあるが早く死んでゐることから見ても、年齡をさう假定するのはさう無理ではないと思はれ「壽貞病人の事に候へばしか〳〵茶をまいる程の事も得致まじく」と云ふ文面によれば、何か世故に長けた女性で、人のもてなしなどにソツがなく、芭蕉がそれらを任して安心してゐられると云つたやうな人が想像せられるのである。(續く)

教育者の爲の精神分析概論（アナ・フロイド）

宮田齊譯

これは或る優秀な女教師の例ですが、此の人は十八歳の時不幸な家庭の事情のために兩親の許を離れて、三人の男兒の家庭教師として教育者生活を始めたのです。此の三人のうちで中の子供が如何にも教育し難い問題の子供でした。勉强は出來ず、臆病で、引込思案で、陰氣で、家庭に於ては、才能も優れた、可愛らしい兄弟達の下積にされてゐました。そこで、家庭教師は、彼女の熱と關心とを擧げて此の兒童に注ぎ比較的短い期間に見事に成功したのであります。此の子はいつしか先生が好きになり、未だ嘗つてない程打ち込んで彼女を愛し、態度も卒直に、親しみ易くなると同時に、勉强に對する興味も增して來て、先生の努力の結果二年分の教材を一ケ年の間に教へ込む事が出來たので、學業の後れたのも無事に取戻せたのでした。兩親も斯うなると今迄は餘り可愛がらなかつた此の兒童に就いて誇りを感ずるやうになり、前よりも多く面倒を見てやるやうになつて來たので、此の兒と兩親との間柄も、また兄弟仲も從つてずつと良くなり、遂には此の兒が家中でも一番大切な人物になつたのであります。處がこゝに豫期しない難關が現はれたといふのは、斯樣な大成功を獨力で獲た家庭教師の先生自身が、どうしたものか此の子とソリが合はなくなり、いろ〳〵悶着を起して、子供に對する愛情を全然失つて了ひ、揚句の果には全く子供と離れて了つて、最初あれ程迄に魅力を感じたその子故に、切角その勞を感謝してゐる一家の者と手を切つて了つたのでした。

此の女教師は、その時から十五年も經過した後に、教育上の必要から精神分析的處置を受けたのですが、この治療によつてはじめて此の事件の眞相が明かになつたのであります。彼女は幼い頃、自分が家庭内では、ちやうどあの三人のうちの中の子のやうな愛されない子供だと空想してゐたのでした。（これは故無きことでもありませんでしたが）そこで彼女は中の子が下積みされてゐるところから、此の子のうちに

自分自身を見、自分と彼とを同一化したのであります。從つて、彼女が此の子に注いだ愛情と配慮とは、とりもなほさず「私を物にしたいなら、こんな風に取扱つてくれなければならないのだ」といふ彼女自身の叫びに外ならないのでした。處が、此の教育が首尾よく成功したとき、彼女との同一化は消失して了つて、最早彼女の生活と何の交渉も無い獨立の人格を具へた教へ子が出來上つたわけです。斯樣にして、自分ではどうしても獲ることのできなかつた成功を此の兒童が收めたことは許し難いといふ嫉妬心から、其の後の敵對的な激情が起つたのでした。

皆樣方は、その先生が當時分析を受けてゐなかつたことは仕合せだつた。さもないと、教育の効果があらはれなかつたかも知れないと仰るかも知れませんが、その所謂教育の効果は餘りに高價な代償を必要とするのではないでせうか。これでは、教師が幼い頃に體驗した惱みと同じ性質の惱みの徵候を示し、それを通じて教師の共感を得ることが出來ない不幸な子供達は救はれないではありませんか。教師や教育者は、教育の仕事を始める前に、先づ以つて自己の內心の葛藤を認識し、これを制禦する術を知らなければならない、斯う要求することは正しいと私は思ふのであります。若し豫め此の事が出來てゐなければ、教へ子は教師自身の意識されない未解決の惱みを發散（abreagieren）する上に都合のよい材料となるに過ぎないのであります。

また、兒童を認識判斷する場合にも、その態度行動を表面的に觀察するだけでは大方の場合不充分と申さねばなりません。次に御紹介するのは、或る男の子が、大きな著作の第一章として纏めたものですが、事實は、よく子供達がやるやうにこれだけの斷片で了つてゐる手記であります。

第一章　大人はどんな惡いことをするか。『ほんとの事が知りたい大人達は聞いて呉れ。大人には出來ることでも、子供には出來ないなどと生意氣の事を考へてはいけない。子供だつてお前達の出來る事なら大概は出來るんだぞ。だが、「おい着物を着換へるんだ、早くそら」なんどと威張つても、子供は言ふ事を聞きやしない。當にしても駄目だぞ。けれど、優しく言つてくれりや、直ぐにやるさ。お前達は、何でも自分の仕たいほうだいに出來ると思つてゐるけれど、それは噓だ。「かうしなければいけない、あゝしなければいけない」なんて餘り言ふなよ。どんな人間でもしなければいけない事なんか無いんだ。だから子供だつてしなくてもいゝんだ。お前達は體を洗はなければいけないと思つてゐるけど、そんな事はない。「人が見たら、オヤ、汚い子だつて云ふから洗はなければいけないんだよ」なんといふけれど、洗はなければいけないんぢやない、唯洗ふだけなんだ。

子供達には、どういふことをすればいかゝそれさへ話して

呉れゝばもう澤山だ。かういふ風にしろあゝいふ風にしろ、とあんまり指圖して貰つちや困る。子供だつて大人のやうに正しいと思つたことをするんだから。それに「これを買つちやいけない」などと言ふのもよくない。自分でお金を出せば何を買つたつていゝぢやないか。子供達に「お前にはそんな事は出來ないよ」なんて云ふな。子供だつてお前達よりやよつぽど上手に出來る事だつてあるんだ。それをちつとも本氣にしてくれない、で後から吃驚りしてるぢやないか。何しろあんまり喋らないでたまには子供にも口をきかせて呉れよ。」

× × × ×

皆樣、若し此の文章がどこかの學校で發見されて、校長の手許に屆けられたとしたらどうでせう。恐らく校長は「これは危險な少年だ、注意しなけりやならん」と考へることでせう。が、一層注意して見ると、これを書いた兒童に就てはもつと重大なことがあるのです。此の兒は神に對して冒瀆的な言葉を吐き、口にするさへ汚らしい言葉で牧師を罵り、また仲間の子供達を煽動して凡ゆる干渉に反抗させるといつた風な事を常習的にやる上に、動物園に押し入つて不法に檻禁されてゐる動物を、檻から解放してやらうと企てたことさへあることなどが、明かになつて來たのです。此の場合、舊型の保守的な教師であれば、「この兒の反抗心は凡ゆる手段を講じて抑へつけて了はなければならない。手後れになると社會組織に對する危險な强敵になる惧れが。」あると言ふでせうし、近代的な教育者であれば、これとは反對に、此の兒童の將來に絕對なる希望を懸け、彼こそはやがて大衆の指導者となり解放者ともなるべき人物だと考へることでありませう。

然し、舊型の教師も近代的教育家も、兩方とも間違つてゐるのであります。そして、彼等が此の事件の外觀的認識の基礎の上に計畫して行く教育活動は凡て危險な誤つたものなのであります。此の八歲になる男の兒は、單なる無害な臆病者に過ぎません。犬が吠へれば慄へあがり、夜は恐くて暗い廊下が步けず、それこそ蠅一匹さへ傷けることのできないやうな意氣地無しに過ぎません。その意氣地無しがどうしてこんな反抗的な文章を書くか、その次第は斯うです。此の兒童の幼兒期の激しい感情關係――自分の性器を熱心に玩弄する行爲と結び付いた――は教育の結果、また非常な衝擊を彼に與へた醫療の結果破壞されては了ひましたが、その後に殘つたものは、新たな誘惑への防禦線としての激しい恐怖、卽ち、自分の體の罪深き部分(ペニス)に罰を加へられるのではないかといふ恐怖、精神分析の術語で「去勢恐怖」いふものであつたのであります。此の恐怖感が彼をして凡ゆる權威を否定せしめることになつたのであつて、「强力な者は自分を處罰することが出來るのだ。それだから、天上たると地上たるとを問はず、凡そ支配者の存在を許してはならない。」斯う彼は

考へるのです。誘惑に對する恐怖が强ければ强い程、彼は此等の權威に向つて無害な攻擊を加へてその恐怖感を屈服させようとします。しかし此の樣な騷々しい方法が彼の防禦策の唯一のものではありません。彼は無神論者のやうに裝つてゐますが、夜になればちやんと跪いて恐怖におのゝきながら祈禱を捧げるのです。「神樣なんかありやしない。しかし、ヒヨットするとあるかも知れないぞ。とにかく神樣には行儀よくしておいた方がいゝ。」と彼は考へるのです。

つまり、此の子は社會の仇敵になりもしなければ、さりとて大衆の解放者になれる柄でもありません。彼にとつて必要なものは、その勢ひのよさを讚美することでもなく、また彈壓を加へる事でもなくて、何等かの方法を用ゐて、內心の恐怖を鎭めてやり、彼を神經症的な生活の仕方から解放して、悅びと勞作の力とを與へてやることにあるのであります。

そのやうな結果を招來することのできる精神分析的處置方法こそ、精神分析が敎育に對して貢献すべき第三の仕事であるわけです。が、その方法、卽ち兒童分析の方法を詳述することは今回の講演の範圍の外にあると考へるのであります。

（完）

前號正誤表

頁	行	誤	正
表紙一	……	具榮氏	具榮氏
口繪	……	Freu d	Freud
本文七三上	一	宮川	宮澤
八五上	八	auftossen	Aufstossen
九〇上	七	整然たる。	整然たる、
同上	一五	諸成と	諸成分
同上	一九	對と	對象
同下	三	對象愛	對象
九一上	一三	幼時	幼兒
同上	一四	健忘分	健忘と
九四上	三	北山氏	北山氏
九四下	一二	今後	會後
同	一三	土產分	土產と
九六上	九	氏	氏

畫聖セガンチーニの分析研究（カール・アブラハム）

岩倉具榮譯

四、母への愛憎並存（續）

或る思想のコムプレクスに拘泥してゐて現實から離れてゐることは、常に本人をして益々焦燥的ならしめる結果となる。このことは常態の人々、併し特に神經症者に於て、吾々が毎日見る所である。セガンチイニにとつて、彼の焦燥は記憶すべき事件の原因となつた。

彼は『奢侈逸樂の徒の地獄』を一八九一年にベルリンで展覽した。その主題に對して全く當然ながら擧げられた反對にも拘らず、その繪はすぐれて美術的價値のあるものであつたことは疑ひがなかつた。審査員は最高の名譽を與へはしなかつたが、セガンチイニは次賞に價すると判斷した。彼が之を不當と見做したのは正しい。他のどんな時でも彼は微笑しつゝ双肩をそびやかして多分それを輕く見るのが常であつた。この作品は併し乍ら、彼にとつて特別の意味があつた。それを攻撃する者は誰でもセガンチイニの一番急所に觸れた。彼がその審査委員等に答へた時、彼の本性の凡ゆる衝動は爆發した。彼はヴィットーレ・グルービチーへの手紙の中で自らそれについて語つてゐる。それは極めて特徴のあるものだから次に掲げておいた。

×

サヴオーニン、一八九一年八月五日

ヴィットーレ様

お葉書拜見厚くお禮申します。私は次賞を受けるのを辭退するのに一秒もためらはなかつた。廿九日にその報告を受取つたが、私はそれを受けるや否や、次の電報をベルリンに打つた。

「ベルリン展覽會審査委員へ、私の生涯の始めから今に至る迄展覽會を開いた世界の何處の展覽會でもこのベルリンの審査員以外に、私を侮辱するのを必要とした委員はかつ

てなかつた。私は只一つお願ひする、受賞者の名簿から公に私の名を消して頂きたい。

サヴォーニンにて、一八九一年八月五日

ヂォヴァンニ・セガンチイニ」

追伸　私はこの電報を返信料を拂つて打つたが、併し委員たちは返電するに價しないと思つたらしい。これでは、誰だつて氣が狂ひ出します。匆々

×

既に述べて來たやうに、セガンチイニは一八九三年に涅槃的畫因に依る諸作中の最後の作を完成した。その後間もなくブリアンツア期の終りに突然初期變化のあつたのと同じ變化が現れた。一八九三年十二月廿一日附のヴィットーレ・グルービチーへの手紙は、心の沈欝狀態から生活と仕事との喜びへの變化を判然と示してゐる。この美術家は以前に出した手紙のことに言及しつゝかう云つてゐる。「君が憂欝だと云ふ私の手紙は、何か鋭い角に向脛を打ちつけて大聲で泣き出す時のやうな氣持で書いたものだ。私はいつも自分の感じる事だけを書く習はしなので、私は魂の大きな泣き叫びを以つて書いたのだ。」と。それから、彼は作品の計畫に付いて一言してから、かう續ける、「さうだ、本當に人生は始めから終り迄夢だ。非常に遠く離れた理想へ段々と近付く夢だ。併しその夢の作られてゐる材料が消える程高い理想でもあるのだ。」と。

この美術家の心的素質の最も著しい特徴は疑ひもなく、その並々ならぬ昇華能力であつた。彼は抑壓した慾望を支配するに七年前に成功したが、それをもう一度するために、再びこの方面に出發した。併し彼にとつてさへ此の能力には限界――無事にすまされない限界があつた。それ故彼は之等の衝動を永久に消すことには成功しなかつた。『奢侈逸樂の徒の地獄』を制作した一八九一年から、それ等の衝動は再び現れてそれから彼の早逝に至る迄內部的苦鬪に滿され、そのため彼の氣分には屢々變化があつた。人生の盛りに又創造力の頂點で彼の精神は神經症的動搖に打ち任せられてゐた。さうしてその動搖の特質は人生の否定といふことであつた。彼は固よりそれ等に何度も何度も打勝ちはしたが、併しその勝利は心的精力の莫大な犧牲によつて獲られたのであつた。そしていや昂じ行く憂欝を暴力の噴出によつてやつと補償することが出來ることさへ屢々であつた。

セガンチイニは、前にもまして想像の世界に隱れ家を求めるやうになつた。夢の世界の生命を追ふことが自分にとつて一番價値ある生活と思はれると彼は告白した。彼の『惡母』に就いては既に評論したが、さう云ふ形の表現以外に、彼は一八九一年から九四年の間に繪畫の領域の外に、他の多くの空想的創造を作つた。彼が樂劇の梗概を書き上げたのはこの

期に屬し、それについて、セガンチイニはその友ヴィットーレに手紙の中で語つてゐる。この梗概には涅槃の繪に表現されてゐる殘酷への傾向と同じ傾向を示す一行があるのは特に面白い。それは火事の描寫である。美術家は非常に力強い感動を以つてこの火事を描いてゐるので、最深の無意識の聲がこゝに發せられてゐるのを吾々は直ぐに感じることが出來る程である。その行は次の樣である。「一人の女がまつしぐらに火事場から逃げ出して來る。半裸體で、その髮は肩の所にほつれ、二人の子供を連れてゐるがその內一人はしたゝか火傷をし母の頸にすがつてゐる。女は子供の火傷してゐるのを見ると、恐怖の叫びを擧げ、路傍の社殿の前でひざまづき、そこで彼女は悲しみ嘆き祈り、二人の子供を聖像の前に捧げる。その後で彼女は再び子供達を下して橫へる。火傷した子供は死んでゐる。彼女は呆然としてそれを打眺め、悲しみの叫びを二聲上げ、俄波と起上り、威かすやうに拳を天空に向けて振上げ、仰向きに地上に打倒れる。」

セガンチイニが自分の幼兒期の思ひ出に基いてこの場面を作り出してゐることは少しの疑ひもない。兩親の彼よりも前に生れた一子が火事で死んだのであつた。ヂオヴンニがこの事件を見たかどうか私は知らない。併し、死んだ子供の事を母が悲しんでゐるのを彼は確かに見た。幼年の頃のこの印象は少年の中に殘酷な感情を呼び起し、それが彼のサディズムを滿足させたと想像するのは誤りではない。セガンチイニの素描の最初の試みは子供の死とその母親の悲しみとに關したものであつたことを讀者は思出されるであらう。この事件が彼にとつて何故こんなに力強い影響となつたかは、今こそ完全に諒解される。それは、彼が秘かに滿足を覺えた或る事情の幼兒期の抑壓せられた思ひ出を浮び上らせるべく彼の記憶の糸を搔きならしたのだ。かくして今や、成人としての藝術作品は同じ樣な抑壓された幼兒期の願望に支配せられてゐるのだ。それ等影響の下に彼は惡い母達の繪と樂劇の梗概とを創造したのだ。

この時期に於ける彼の想像から生れた別の諸作品は、容易に禁壓出來なかつた殘酷衝動への過度補償となつてゐる。それ等の中にはユトーピア的な空想の繪『勞働者の夢』がある。最初、象徵的に階級一般に行亙つてゐる福祉を現す幻覺が夢みる勞働者に現れる。それから彼はその觀察地點からとび下りるが、地には觸れないで、空中にたゞよひ、やがて辷りつゝ地上に來る。と、地上の住民は最も幸福な社會狀態を樂しんでゐる。このユトーピアに於いて詩人はその社會理想の實現を經驗してゐる。その實現せられたる社會理想と云ふのは、本來は殘酷な利己的な性質のものであつたのが正反對のものへと變へられてゐるのだ。この夢の樣な空想に於て、空を辷ることとの感情は注意すべきである。この場合ではそれ

は全然愉快な經驗であるのだ。

更に記すべきは美術家の理想社會を彼が空想して描寫してゐることである。この様な諸作は如何にセガンチイニが遠く高い理想の幻に耽る傾きの强かつたかを示してゐる。彼は凡ゆる空想の中で、上記のユトーピアの夢に於ける様にはその空想の背景に已れを現したためしはなかつた。それどころか私が既に云つた様に、この想像は攻撃慾又は力慾への抑壓された衝動から生じて居るのである。その力慾は彼自身をその周りの生きとし生ける者の上に遙か高く、世界の出來事の中心に迄も据えるものであるのだ。全生涯の間、セガンチイニはこの様な偉大の空想を胸に懷いてゐた。今やそれ等の空想は以前にも增して表現を求め喘いでゐた。

彼の獨創の若々しい空想に於いて彼は自ら父王となり、かくて自らを高めた。今や彼は母を神聖な理想の姿として崇めた。『愛の果實』や『キリスト教の神』の様な繪を、私は彼の母コムプレクスに關係あるものとして、昇華せる性愛と過度補償のサディスティックな傾向の表現として説明したのであるが、それは初期幼兒時代に母に向けられたものであつた。併し乍ら、母の崇視は亦息子をも高めるものであるといふことを見逃してはならない。之等の繪の中の幼兒は美術家自身と同一人であつたといふ事實に、私は注意を向けたのである。併しセガンチーニは自らを幼兒キリストとして描くだけではなかつた。『キリスト教の神』を描いてから後間もなく、彼は自畫像を描いたが、それは間違ひなくキリストの繪に似てゐる。夢みる眼は惱みと悲しみを語つてゐる。その凝視は遠い理想の力に向つて憧れるものゝ如く向けられてゐる。（譯者曰本誌第六卷第十號三六頁參照。）

宗教的ドグマに全然反對し、人格神の存在を否定したセガンチイニが、自らをキリストとして描くのは決して矛盾ではなかつた。彼の倫理、母性愛の神化及びその惱みは自らをキリストと同一視する原因となつた。他の多くの場合に於ける如く、最深の憂鬱、殆んど人生を否定するばかりの憂鬱から生ずる偉大感を、吾々はこゝに見るのである。

併し乍ら、セガンチイニは怠惰な幻想家とはならなかつた。それどころか、幻想は彼を仕事に驅り立て、その助けによつて彼は、以前にもした様に、抑壓された衝動の大部分を昇華した。彼が過度に仕事に献身する時が來た。彼は一八九四年にサヴォニンを去つて上部エンガーディンのマロヤに移つた後、生涯の最後の時期に入つた。その間、彼は――セルヴェスが述べてゐる如く――仕事に熱狂したのであつた。

五、晩年の諸作品

セガンチイテが、サヴォーニンに登つてから八年は過ぎた。その時彼は探求者としてこゝに來たのであつた。自然との不

斷の直接に依つて、彼は巨匠と成つた。彼がブリアンツァ期の憂鬱を振り捨てた時と丁度同じ様に、今や再び彼は高山に引きつけられる樣に感じた。彼が上部エンガーディンに移つた時は、卅六歳であつた。彼は高山の中心へと探り入つた。自分の才能をいさゝか意識して、今や最高の問題に當ることが出來た。彼はこの谷間に對して熱烈な愛を感じた。そこで生涯の最後の五年間を送ることになつた。彼はこの國の山々を宗教的に崇拜した。彼はかつて一人の友達に宛てゝかう書き送つた。『時々朝の中、私が繪筆をとる前に數分間、之等の山々を觀照しつゝ、私はまるで天界のためにしつらへられた祭壇の前に出たやうに、これ等の山々の前に身を投出し度く感じるのだ。』と。

セガンチイニはすぐこゝに根を下し、そしてそれ以後彼の生活はその國、その山々、その住民と一つになつたといふことは必然的であつた。雪をいたゞく山嶺や、氷河の壯麗な輝き、戰々たる青空、太陽の光明——凡てはエンガーディンの特徴である——を彼は樂しみ、豐富な花の眺めがやがて短い夏の間に素晴らしい單色に賦彩せられるのを喜んで見た。彼の眼はこのエンガーディンの凡ゆる偉大さに憧憬した。併し彼の心と性質とても他の如何なる國よりもこの國と調和してゐた。その谷間は古い、獨立した文化を持つてゐる。その住民は、數百年も續いた隔離の中に、特別な言葉、自身の風習獨特の建築樣式を保存してゐた。激しい勞働とたゆまぬ努力とは、この山の谷間を人の住む所に變へるために必要であつた。セガンチイニは自ら之等の人々、この國と性格的に近いものゝあることを感じた。

マロヤで彼は何よりも先に一つの繪を製作した。その繪の上には彼の悲しげな、仄暗い心の狀態が尙重々しくおほひかゝつてゐるが、而もそこには神祕的な幻想的な性質が缺けてゐる。この美術家は動きつゝある眞實さを以つて日常生活の或る出來事を描き表はしたのである。彼は過去の憂鬱を、云はゞ挽歌として、去り行かせ消滅させてゐる。或る家族のものが彼等の息子の身體を鄕土に持歸つてゐる。無限の悲しみがその繪におほひかぶさつてゐる。その繪の中には頭を垂れて馬のたづなを引いてゐる父、棺の上に坐つてゐる二人の女、重荷を曳いて高地を超ゆるに疲れてゐる馬、人々の後ろに悲しげに從ふ犬等が描かれてゐる。それが『故鄕に歸る』で、この作家の最も感動すべき作品の一つである。こゝにも再び吾々は、彼の凡ゆる死の繪に於ける如く、夕陽の輝きを見る。併しセガンチイニは一つの相違を描き込むことに成功したのである。柔い雲の浮ぶ夕方の空は驚くべき壯麗さである。それはこの一群の間に行亙つてゐる悲しみの雰圍氣を和らげる慰安となつてゐる。

之を手始めに偉大な傑作が續々と生れ、その表現する思想

の深さと仕上げの完全さとの二點に於いて、何れもみな等しく際立つたものである。それ等のあるものは作者の氣分が變りつゝあることを、更に明かに示すためにこゝに記すのである。『生命の源に於ける愛』に於いては若い夫婦が人生の源の方へと近付いて來る。その源泉を天使が見守つてゐる。彼の初期のこの種の象徴的繪畫とは違ひ、そこには恐怖と苦惱の影がない。それは明朗さと煌々たる色彩に照り映えてゐる。『アルプスの春』（一八九七年）には彼の心持が澄み渡り、愉快であることが見えてゐる。セガンチイニはこの作品は最上のものと見做した。それは全く最も明るい又最も輝かしい色調で描かれてゐる。『草乾』はも少し眞劍な氣持で描いてある。ミレーの落穗拾ひを思はせる女達が、一生懸命に牧場で働いてゐるところが描いてある。暗い雷雲は空をおほひ始め幽靈の樣に雲は雲を追ふてゐる。『信仰の慰安』ではもう一度死の題材へ戻つてゐる。母と父とが、雪で深くおほはれた小さい墓地で我が兒の墓前に佇んでゐる。如何に彼等がその信仰の中に慰めを見出したかをセガンチイニは二人の態度の中に極めてはつきりと示してゐる。現實的でありながら、而も構圖はまた幻想的でもある。「墓の十字架の上にヴェロニカの幻が現れてゐる。ギザ〳〵の峰を越えて高い〳〵すき通つた蒼空へと瞳を上げると、天上に慰めの幻を見る。（この目的のために特別の弧形の繪が作られたのである。） 大きな翼のある二人の天使が如何にも可愛げに子供の小さい裸の身體を永遠の喜びの世界へと運んでゐる。」神祕的、超自然的への彼の傾向は、またもや優勢となつて來た。この傾向に就いてはも少し論及せられるであらう。

　マロヤ期の偉大な作品の連續は、自然、生命、死の三幅對を以つて結了する。この偉大な創作は彼の中に爭ふ相反の衝動を平均させ、調停させ、生と死とを一つの調和へ結合せんとの藝術家の希望を示してゐる。美術作品の言葉によつて彼は凡ゆるものゝ一致を宣言し、かくして彼の最後の未完成の作品は信仰の一元論的告白となつてゐる。（續く）

岩倉具榮譯著 二書

理想の家族（マンスフィールド珠玉短篇集）

金屬的反響きを傳へる美しい短篇十數篇・女性心理研究の好資料。（定價送料とも 一圓八十錢）

太陽（D・H・ロレンス傑作集）

プロシア士官、太陽、微笑、山間の十字架、男女相要論等の諸作（定價送料共 一圓十錢）

時評

戀愛文學教科書問題

大槻憲二

一、河上、本多兩氏の批評

從來、男女關係を取扱つた外國文學が學生の教科書の中に採用してあつたのを今度文部省で禁止することになり、それに就いて諸方面に種々な意見が現れたやうであるが、私の目に觸れたのは都新聞紙上（三月廿四日以降三日連載）の河上徹太郎氏の意見と、東京朝日「鎗騎兵」欄（三月廿八日）に於ける本多顯彰氏説とであつた。兩氏は共に文藝評論家であるから、文學擁護のために兩氏が筆を揃へて文部省の處置に抗議を申立てゝゐることは、兩氏の文を讀んで見るまでもなく、大抵は想像のつくことであらう。で、私が兩氏の意見の出たことを紹介した以上、讀者諸君はさぞ私が兩氏の説を敷衍したり批評したりして、文部省説に批難を加へるのであらうと期待せられるかも知れないと思ふが、實はさうでないのだ。私は文部省の處置に批評を加へるのではなく、寧ろ河上、本多兩氏説に批評を加へるものだと云ふ方が妥當であるやうな物の云ひ方をする。それでは文部省のために都合のいゝ説を述べるのかと云ふとさうでもない。私の結論がどう云ふことになるか、まづ最後まで根氣よく讀んで頂きたいと思ふ。

河上、本多兩氏の説は兩氏の立場からの意見としては至極御尤な、否むしろ、

ABHUB

アブフウブ

他の學問がアフウブ（屑）として棄てたもの ゝ中から、分析は眞理の黄金を探し出す。

一人相撲の力士

不老泉院主

次頁上欄に揭げてある挿圖は京都前衞畫壇の新進松崎政雄君の昨年中の作『力士』である。私はこれを一覽して、直ちにオナニーの恐怖と苦惱とを表現したものであると判斷した。何となれば、畫中、右の脚は一方の力士の右脚であり、左脚は別の力士の左脚であつて、別人の左右脚が合して一人の双脚の如き外觀を呈し、つまり二人でなすべき力技を一人でなしてゐるのだと云ふことが分るからである。本來二人でなすべきことを一人でなす

御尤過ぎて云はずと知れたやうな意見である。それほど當然な意見であるから、意見そのものには何ら批評を加へる餘地はないが、それが今日の文部省の立場への理解を缺いてゐると云ふ點が、批評の餘地のある點で、もしこれが只今のやうな國家情勢でなければ、私も亦兩氏の尻馬に乘つて文部省攻撃軍に參加したかも知れないが、只今は事情が違つて來てゐるのだ。違つて來てゐるからこそ文部省としても從前は默許してゐた教科書に干渉を加へるやうになつて來たのだ。そこの事情を察せずしてあだかも、平常時に文部省がそれをしたかの如き態度で物云ひかけると云ふことが、文藝批評家の眼界の如何に狹隘であるかを判然と曝露するものであると云ふことが出來る。

河上、本多兩氏の説を比較して見るならば、私は躊躇なく河上氏の方に軍配を上げる。私は河上氏の論文は從前一向讀んだことはなかつたが、今度始めてしみ〴〵と讀んで見て、同氏がなか〳〵頭腦緻密で智性鋭敏な批評家であることを發

のはオナニーに外ならず、而も頭部の異形は何となく龜頭の如き印象を與へ、その突出した口顎は動物的な形態をとり、その失神したる如き憂鬱な眼差は一種の惱みと恍惚とを表現してゐるやうに感ぜしめるではないか。作者はこの畫に就いて次のやうな暗示的な言葉を筆者に寄せた。「本能の抑壓(褌)に締め上げられながら、なほ全身に漲る血潮にも似たる淡紅色の『力士』。やるべきか押し止むべきかいたましき力技にあせるうち天女はうすみどりの大空へ消え行かんとする。」云々と。これで見ると作者は必ずオナニーのみではなく、對象獲得難の焦燥感をも並せ表現せんとしたかと思はれるが、それのみではこの作の解説としては何か逃げたものがあると思ふ。何となれば、それのみではこのグロテスクな力士の形態が生じた必然性が明でないからである。天女は異性對象を意味する筈であるが、この畫に見えた天女はどうも女性の如くには見えない。打纏へるヒレをひらめかしてはゐるが、その四肢の形體は何と云つても男性的である。私はむしろこの飛行の姿體がオナニーのオルガスムを象徴するものであると解せ

見して秘かに敬意を拂つた。本多氏は上品で正直で官學的秀才らしい批評家であるが、あまりに單純でお坊ちやん的な印象を與へる批評家である。併しジャーナリズムでは本多氏の方がポピュラリチーがあるやうだが、あまり智性の鋭く深い人に通俗性（ポピュラリチー）のないのは當然だ。河上說を要約して見ると次の三點に歸する。

（一）「學生はもし彼が不良であつたならば、此の取締によつてカフェーから締出しを食つたやうには困りはしないだらう。實際、學校で敎はつた語學の敎科書から隱秘な惡い癖を覺える不良學生なんてある筈はない。だから此のことによつて生じる結果としては、當局がまづく自分を限定して見せたといふことだけである」換言すれば何等實際的意義がないといふことなのである。

（二）「或る種の文學書を學生の眼から隱すとなると、それは彼等の心に猜疑心と放縦さの種を蒔き、青年の樂天性の中に一應全人格を築かうといふ、自律的な責任感を失はせる所以である。」精神分析的に換言するならば、學生の超自我を承認しないことを意味し、從つて彼等の人格を侮辱したことになると云ふ意味である。

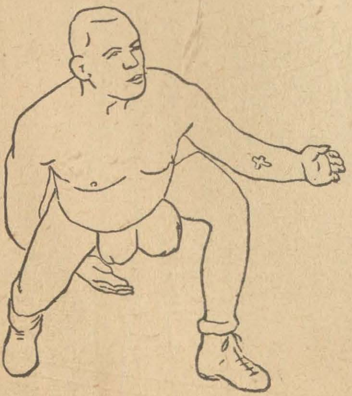
（三）「正しい戀愛文學は間違つた戀愛病の同質療法である筈だ」のにその正しい戀愛文學を學生の眼から封ずることは、却つて彼等を墮落させる結果になるかも知れぬと云ふわけである。

本多氏の意見は、氏自身が云つてゐるやうに「文學的常識の一片を述べ」たに過ぎないもので「文學作品は全體として鑑賞さるべきものであるといふのがその一つ。次に、文學は戀愛を描くことが多いが、それは戀愛や性愛そのものを描くことを目的とするのではなく、それを通じて人生を描くことを目指してゐるとい

らるべき一面を有することを主張しないわけに行かない。何となれば、この繪の構圖が完成するまでには、現に見よ、二つの豫備過程を經て來てをり、それ等の過程は明かにオナニー的なものを一層判然と表現してゐる。

レスラーの切拔

まづ第一に左圖の如きものがレスラー（西洋力士）の寫眞の切拔のモンターヂュ的な再製として出來上つたものだ。こゝに掲げたもの



は凸版であるが、本來西洋の雜誌に出てゐた力士（レスラー）の寫眞を切りぬいて、それ

ふことが他の一つ。文學が人生を描く以上、作品の中に男と女とが登場することが多いのは當然であるが、その男女關係のうち、特にラヴシーンにばかり氣を取られたり、胸を躍らせたりする心理は病的で、街の痴漢と何ら選ぶ所はない。そのやうな心理の持主に讀ませたら、危險でない文學作品などといふものは一つもあるまい。」云々と論じてゐる。

二、兩氏說への私の批評

以上は文藝評論家の意見としては（既に云つたやうに）至極尤な說であるが、併しこれは平常時に文藝批評家同志の間で取交さるべき意見であつて、今日のやうな國家情勢の際に責任ある位置に居る官吏に向つて云ふべき言葉ではないといふのが、私の意見の中心である。

もし假りに河上氏や本多氏が文部省の官吏となり、敎科書の內容に就いて責任を負はねばならぬ位置に立つたと假定せよ。兩氏共に今日の情勢下に於いてその職責を果し得べく落第であると云ふことが出來るのである。俺たちは文藝批評家として云ふべき事を云つたまでで、官吏としての自分を假想して意見を述べる與味はないと云ふかも知れないが、それなら聞く方の官吏だとて、實際問題に迂遠な文藝評論家の寢言だ位にしか受取らなくても、文句の云ひやうはないわけになつて來る。

本多氏は「ラヴシーンにばかり氣をとられたり、胸を躍らせたりする心理は病的で、街の痴漢と何ら選ぶ所はない。」と云ふが、本多氏は街の痴漢と學生とは本質的に人種が違つてゐると思つてゐるのであらうか。「ラヴシーンにばかり氣をとられたりする」學生は絕對に一人だにないと、本多氏は信じてゐるのであらうか。或はまた他の總ての點では、街の痴漢と截然區別せられてゐても、「ラヴシーの形態を自由にかへて貼り込んで見たのだ。作者はその切抜き畫を這つてよこしたが、筆者が都合上これを凸版に作りかへさせた。

讀者は直ちにこの畫に於いて二つの異樣な特徵に氣付かれるであらう。その特徵の一つは力士の右手が右脚の背後から怪しく下方に差出されてゐることであり、今一つは、兩脚の中央に巨大な睾丸樣のものゝ垂下してゐることである。この巨大な肉塊樣のものは睾丸でもなく、ワギナでもなく、恐らくはその混合の如きものかと察せられるが、その混合とすれば、即ちこの力士は男性にして同時に女性としての役割を果しつゝ自慰の者であると云ふことを察知せしめるに足るのである。

中間作畫過程

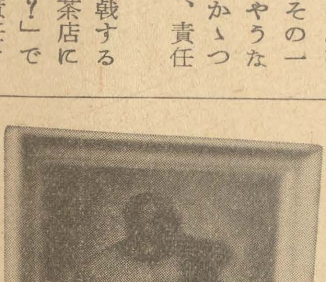
作者の空想は右の切抜き畫から發展して、次に左圖の如き構成を作り得た。この畫に於いては力士の右手はなほ怪しく右脚の背後から身體の下手に差出されてゐるが、二個の肉塊樣のものは喪失して完全に去勢せられたやうな體裁となつてをり、そのくせ左手は一人の對象をかき抱いてゐる。その對象は異性か

ンに胸を躍らせる病的心理」に於いてのみ街の痴漢と共通する者が學生の間に一人もないと氏は公言し得るのであらうか。すると氏は恐らくかう答へるだらう。それは勿論、一人や二人はあるかも知れないが、一人や二人のために他の絶對多數が巻きぞへを食はねばならないと云ふことは馬鹿げたことではないか、と。左様、馬鹿げたことではある。併しながら、その一人や二人が出ても責任を負はねばならないものだと云ふのが、官吏と云ふものゝ職業的性質なのだと云ふことをよく理解しておかなければならない。時勢が現今のやうな風でなければ、その一人や二人が出ても世人の注意を率かず、從つて官吏はその責任を問はれるやうなことにもならないが、現今のやうだと忽ちその責任は當局者の頭上にふりかゝつて來る。その見えざる勢を自ら感ずれば、官吏たるものは自衞のためにも、責任のためにも、かう云ふ處置を講ぜねばならなくなるのである。

併しそんなことをしたつて、河上氏の云ふやうに「彼等を戀愛にまで刺戟するものは、一たび教科書を閉ぢて校門を出ると、忽ち街頭に、映畫館に、喫茶店にさては家庭にさへある。それを措いて、何だとて野暮な教科書に返らうか?」であるが、併し街頭や、映畫館や、喫茶店は文部省の役人の責任外である。責任を負ふとすれば、それは寧ろ警察官であらう。それ故に河上氏の折角の鋭い反撃も文部省の役人に對しては全然的を外れてゐる。

卽ち根本の問題は、現今の國家情勢が青年をしてそのリビドーを生のまゝで生かさしめては困る事情にあると云ふことにあるのである。青年はそのリビドーを生のまゝに戀愛性慾として消費することもまかりならず、さりとてあまりに高尙にすぎた國際精神にまで昇華させてもならず、丁度その中間の、對家庭、對郷土對國家への纏綿として、適度に昇華させることが最も切實に要求せられてゐる状

同性か定かではないが、力士自身よりは遙に弱小らしく見えてゐる。とにかくこの小さな對象の出現によつて、怪しき肉塊の喪失した(不必要となつた)らしいことは注目に價する何となれば、この小さな對象はさきの肉塊の等價物であることが察知出來るからである。



この畫に現れてゐる想像が發展して次に(最後に)七二頁の畫の段階に達したことは、我々にも頗る興味があり且つ甚だ理解を助ける所以である。作者はこれに就いてかう云つてゐる。「二人の人物は一人であると考へたので、一つの人物に變へて(不老泉院主曰、即ち元の構圖に還つて)構成上描き加へられました。(不老泉院主曰、即ちこの天女は中間圖

勢にあるのだ。併し、學生をして戀愛文學に親しむ機會を少くすることが、直ちに彼等をして對國家感情にまでそのリビドーを適宜昇華せしめる結果になると云ふ論理は如何に可能であるかなどと私につめ寄つて來られても、私はそれに就いて責任を持つことは出來ない。少くとも文部省の役人としては、學生に戀愛文學教科書を讀ませておくと云ふ事は、彼等のリビドーを生のまゝに戀愛として生かすことを奬勵してゐると云ふ精神に解釋せられる危險を感ずるのである。それは役人としては尤も千萬な心配である。現に議會での質問などを見ると、實に屢々さう云ふ揚足取的な質問が發せられてゐるのを我々は見聞してゐるからである。それ故に、河上氏の云ふやうに「このことによつて生ずる結果としては、當局がまづく自分を限定して見せたいといふことだけである」のだが、その限定が抑々文部省の目的であつて、これを「まづい」と感ずるのは河上氏が文藝批評家としての立場から見るからさう見えるだけであつて、文部省としては實に巧に限定したことになるのである。

實際的効果としては、學生たちは恐らく、それ等の封ぜられる戀愛文學に對して却つて好奇心を起し、ひそかにあさつて讀むやうになるかも知れない。さうなれば、彼等は語學の勉强に勵むやうな結果になり、文部省は責任を免れて而も學生を勉强に驅り立てると云ふ一石二鳥の僥倖を得るかも知れないが、それはあまりにおあつらへ向きに出來過ぎたことになるかも知れない。これを書いて見て文藝評論家と云ふものが概してまだ觀念論の立場に執してゐることを判然と感じたが、それは文藝評論家と云ふものが一種の詩人である限り已むを得ないことであらうが、併し彼等は單なる詩人でなく、科學者でもなければならない筈でなからうか。も少し心理學の研究位はして見られては如何でせう？（完）

の對象の等價物であることが分る故、前に天使に就いて云つたことは、そのまゝこの對象に就いても云へることである。）一番最後に描き込まれた天女、こいつ仲々のクセモノと思ひます」云々と。

風景

次に掲げたものは同じ作者が本年度の獨立

映畫演劇寸評

▼**望郷**―― フランスの植民地アルゼリーの首都へ遁走してそこに生活してゐた前科數十犯の盗賊ペペ・ル・モコが偶然パリから來てゐたガビーと云ふ女に戀し、彼女が郷里へ船出して行くのを追つて警察の手中に陷り、去り行く船を見送りながら自殺すると云ふ筋である。これを望郷とはよくぞ改名したものである。女への思慕は、實は郷里への思慕であり、自殺は失戀者の代償的得戀法であると云ふ分析命題を知つて、この映畫を見ると素晴らしく意味深長である。

▼**魔城脱出記**―― 「ジイキルとハイド」の作者スチヴンスンの原作である。スコットランドを英國から獨立させようと努力してゐる革命家ブレックを主人公とし、彼がその部下ジェームズの婚約者ジーンを伴つてジェームズのところへ連れて行かうとして、途中種々の困難と戰つて行くところが物語の内容となつてゐるが、主題の中心はブレックが、その部下の婚約者ジーンとの間に相互に戀情を感じつゝそれを禁制し抑壓してゐるところに生ずる悲痛なリビドー亢奮にある。私はこれを見ながら、わが國の映畫『沓掛時次郎』を聯想した。實質上同じ主題を扱つてゐる。

▼**大ターザン**―― 例に依つて動物界の帝王ターザンが女に惚れられる筋のものである。ワイズミユラーの前作にもあつたが、これにも男女の水中競泳の象徴的なエロチシズムの場面があつて觀客を喜ばせてゐる。不能症的な文明男ネビンと、性能力の剛健らしい山男ターザンとの對比の中に文明女はその冷感症を山男に依つて救はれることを願望して、ネビンを振捨てると云ふ筋で、牧逸馬の小説『曉の獵人』と同じ型のものである。牧逸馬はターザンを日本風に繙案したものだと云へる。（大槻著『讀本』の中に「曉の獵人」の批評參照。）

美術協會展覽會に出品したものである。題して『風景』とあるが、風景とはうまくとぼけたものである。この風景只の風景に非ず、右の二三の畫に表現せられてゐる自己性感や對象關係の悩みと必然的な關係があることは申すまでもないであらう。

讀者諸君はこの畫の左半の藁小屋の如きものを見て何を聯想せられるであらうか。作者は蒙古か滿洲あたりの土人の草葺の小屋の寫眞を見て暗示を受けたのであると云つてゐた。併し全體の感じは何としても若い女の斷髪のうしろ姿である。作者の生活環境の限界にかう云ふ姿の少女がゐるかどうか私は聞き洩したし、聞いても恐らくなか〳〵一度や二度の面會では、當の告白はしてくれないであらうが、何れにせよ、これが若い女を象徴するものであることは疑ひの餘地がないやうに思はれる。然るにその若い女を象徴するらしい藁小屋の向側に、憂鬱さうな男の首がその女の顔面（小屋の入口）の方に思慕的な眼差を向けてゐる。この男の首はこの小屋の中へ這入りたがつてゐるやうであるが、肢體が土中に埋められてゐて身動きが出來ないので、

▼**子供の夢**—— 子供向の漫畫映畫で、近來これほど詩のある、上品な作を見たことがない。三人の子供が搖籠の小舟に帆を擧げて天の海を航行する。星の魚を釣上げようとして逆に自分が水（空中）に引落されたり、暗雲の怪巨人に吹きつけられてあちこち難船したりして、遂に下界に沈沒して自家の窓から眠れる本人の姿の中へ三人が一人一人還元して行く（三人は夢の本人の三つの分身であつた）ところで終つてゐる。その冒險の間に屢々おむつのボタンが外れてお尻の露出するところが愛嬌になつてゐるが、夢中の分身が本人の姿の中に還元して了つてからでもおむつのボタンは又もや外れる。ボタンを外して魚を釣上げて、數々の冒險をして雲界の兩親に叱られて沒落すると云ふところが主題になつてゐるところを見れば、これにもやはりエディポス的なものを豫想しなくてはこの畫の面白味は分らないわけにならう。

▼**惡太郎**—— 三月中國際劇場にて、猿之助の得意の出しもの。原作は岡本柿紅氏だが、元々狂言に依つたものである。のんだくれの惡太郎が、薙刀を振廻して善太郎と云ふべき知蓮坊を困らせてゐるが、やがて叔父安木松之丞の取扱ひで、その泥睡中に頭髮と髯とをすり落され、薙刀を奪はれて了ふので、已むなく坊主姿になつて、再び來合せた智蓮坊の踊りにつれて踊り出すと云ふ他愛もない筋だが、分析者にはいろ／＼意味深長な象徴的表現があつて頗る面白かつた。惡太郎の惡たる所以は、太い長い髯と豐かな頭髮と長い薙刀と泥醉とにあるらしい。智蓮坊の善人たる所以はその、女性的な弱々しい不能症的な様子にあるらしい。これをターザンと比較して見たら面白い相反が見られる。髮や髯や刀や酒はみな生のリビドー、ペニス等の象徴である。それ等が總て去勢せられて、始めて人間は善太郎になれるらしい。おゝ呪はれたる善太郎かな。

▼**鶴八鶴次郎**—— ロッパの演じたのを見た。彼は新内かたり鶴八鶴次郎を漫才師にかへてゐたのは悧巧だ。併し二人の間のエディポス的、ナルチスムス的心理葛藤の分析的深味など期待するだけ野暮であらう。（R）

何とも致方がない。筆者はさきに『力士』の畫に於いて、作者が「對象獲得難の焦燥感」を表現せんとしてゐると斷じたが、その焦燥感がこの『風景』に於いて一層判然と、併しやゝ諦觀的な落着きを以て、再現せられてをり、それがこの畫の創作の動機であると分析判斷することが許されるであらうと思ふ。

たゞ七二頁の『力士』の畫に於いて右手が——豫備過程の前二作に於いてはあれほど判然と描かれてゐる怪しい態度の右手が——不得要領にぼやけてゐるのは、作者の一人相撲の度數が漸次に減少して來たことを意味するのであらうか、それともこの不自然な相撲に對する禁制の感情が漸次に強まりつゝあることを意味するのであらうか。その邊の事情は筆者にもまた分析判斷の可能の限界を超えてゐる。

溝の清め

私が分析處置した或る青年は、そのオナニーの最も甚だしかつた十二歳の頃、嘗て一大雷雨に襲はれたことがあつた。その時、彼は恐怖のあまり、今にして思へば、實に判然た

る一つの象徴行爲を行つたことを想起した。

それは自分の家の前の溝をキレイに掃除しておけば、決して雷に襲はれる恐れはないと云ふ奇妙な、併し絶對的な信念の下に、隣家の前の溝との間に柵を作つて、自家の前の溝だけをすつかり淸めてしまつて、安心してゐたと云ふ話である。

その青年は非常にオナニーに惱みつゝ自責を感じつゝ、それを制することが出來なかつた。それは自分自身を瀆す——自瀆——ことであると考へてゐた。それ故に自分の前（ペニス）を瀆さず（キレイに掃除して）おけば雷（自分の超自我、父）に落ちられる（叱られる）心配はないとの無意識信念に到達したものと分つた。

佛像のよごれ

坊さんが夢に美しい天女と交り、眼覺めてその天女によく似てゐる本堂の佛像の前に行つて見たら、裳裾のあたりにべつとりと穢れがついてゐたと云ふ類の話が、大話の内に屢々見出されるが、これは性禁制に惱んだ僧侶たちの惡戯を夢の神祕に作りかへて、文學的に表現した話であらうと察せられる。佛像は實にさう云ふ惡戯の對象として屢々利用せられたことであらう。淨瑠璃寺の吉祥天女像などは、僧侶や民衆のさう云ふ類の願望を實に屢々受容れられたものであらうと想像せられる。かの吉祥天女像は右手を「施願印」の形に垂れてゐられる。施願印とは文字通り願望を容れて施してやるとの意で、それこそ最大の慈悲であらう。その願望の最大のものを、人間最大の惱みを受容れてやつてくれることであらう。

坪内博士の昇天

右は、昭和十年十二月號『日曜報知』誌上に掲げてあつた漫畫である。その年の主要な出來事を漫畫で回顧した處に見出されたのだ。畫家は誰であつたか、私は只今それを明かに記憶してゐないが、サインを見ると『哲畫』となつてゐる。同年二月廿八日坪内博士は七十七歳で逝去せられた。本年は四年目になるが、こゝに博士のこの漫畫を掲げたのは今月が博士の誕生月だからだ。併しただそれだけで、この漫畫を掲げるわけは本誌にはない。本誌は坪内博士とは別に緣故はない。筆者はこの漫畫に分析的興味を持つたからだ。どう云ふ點に興味を持つたかと云ふと漫畫家が輪後光と天使の翼とを以て死を象徴せしめてゐると云ふ點である。して見るとつまり天使の如く神聖で尊いと云ふことは生きながら死ぬことゝ同じなのだ。漫畫は人類の無意識論理を端的に表現するので、我等には面白く有難い。

北山隆著
夏目漱石の精神分析
昭和十三年度フロイド賞受賞論文。
定價二圓・送料十錢

精神分析學の入門講話（七）

ジグムント・フロイド（K・O・生譯）

さて、以上我々は行り損ひの謎を比較的僅少の骨折りを以つて解決して了つたやうである！　行り損ひは偶然行爲に非ず、眞劍な心理行爲である。そこには意味がある。それには二つの相異る意圖の協同効果（と云ふよりは、相反効果と呼ぶ方が多分一層適切であらうが）が含まれてゐる。併しながら私は今や理解することが出來る。諸君が私に向つて幾多の質問や疑義を提出せられるであらうと云ふことを――。で、我々は自分の研究結果に有頂天になる以前に、それ等の質問に答へ疑義を晴らしておかなくてはならない。私は別に諸君を尙早の結論に驅り立てるわけではないのだ。一つ〳〵冷靜に、總てを追つて批評し盡さうではないか。

恐らく諸君は次のやうに私に質問しようと思ふであらう。――先生はこれ等の說明が云ひ損ひのあらゆる場合に、或は大部分の場合にあてはまると考へてをられるのですか。同じ解釋を他の多くの種類のやり損ひに、例へば讀み損ひ、書き損ひ、忘却、思ひ違ひ、置き忘れなどにも押しひろげて行くことが出來ると云ふわけですか。疲勞、亢奮、放心、注意の逸脫などが行り損ひの心理的特質に關して何かの意味がありはせぬでせうか。更にまた行り損ひには同時に並行する二種の傾向があつて、その一方が常に表に現れ、他方は常に現れるとは限らないと云ふやうなことは成程實際にあるでせうが併しそれでは表に現れない方の傾向を嗅ぎ出すにはどうすればよいのですか。またそれを嗅ぎ出したと信じるならば、それが如何にして確にそれに違ひない正しいもので、單なる想像でないと云ふことの證明がつきますか、と。……諸君にはまだ他に質問したいことがありますか。もうないなら、私が自分で續けて行きます。元來我々は行り損ひそれ自身を重要視したわけではなく、たゞそれの研究からして精神分析にとつて價値ある何物かを學び來らうとしたに過ぎなかつたことは、諸君のなほ記憶してをられるところであらう。そこで、

私は次の問題を提示する。――別の意圖をそのやうにして攪き亂すことが出來るその意圖とか傾向とか云ふのは如何なるものであるか。また攪き亂すところの傾向と攪き亂されるところの傾向との間には如何なる關係が存在してゐるのであらうか、と。そこで我々の仕事はまづ新にこの問題の解決から始めなければならないわけになつて來た。

それでは、私の考へ方で行り損ひのあらゆる場合を説明することが出來るか？　私は出來ると信じる方に甚だ傾いてゐるが、それは、云ひ損ひの或る場合を調べて見ると、その度に同じやうな解決を見出すことが屢々だからである。併しそのやうな機制を持たない云ひ損ひが起り得ないと云ふことの證明もやはり立てられないのである。それはそれとしても、我々にはさう云ふことは理論上どちらでもよいことである。何となれば、精神分析入門のために我々が導入したいと思ふ結論は依然存續するからである。よしんば、云ひ損ひの最小限が我々の考へ方に依つて説明することが出來るに過ぎないにもせよ……。第二の問題は、他種の行り損ひに對しても云ひ損ひに對してと同じ説明を押し擴げることが出來るかと云ふことであるが、これに對しては私は豫め然りと答へたい。書き損ひや思ひ損ひなどの諸例を調べて見るならば、諸君は自分で同樣の確信に達せられるであらう。併しながら私は、技術上の理由からしてこの仕事を後廻しにしておくことを提議したい。その前に我々は云ひ損ひをも少し根本的に論じておきたいのだ。

諸學者が力説する如き血行障害、疲勞、亢奮、放心などの諸要素や注意障碍説などは、我々が右に記述して來た如き云ひ損ひの心理機制説の前に、如何なる意義を有し得るかと云ふ問題は、一層立入つた答辯のために役立つのである。我々とてもそれ等の諸要素を否認するものではない。その點はよく御諒承を願ひたい。他の立場から主張せられてあることで精神分析がそれを否認すると云ふことは滅多にないのである。精神分析は概してたゞ新たなことを附加するのみで、今まで看過せられてあつたことが偶々幸にして新たに問題にされ始めたと云ふのが正にその本質である。輕微の不快、血行障碍、疲勞などに依つて生ぜしめられる生理的狀態が云ひ損ひの生ずるに就いて影響するであらうことは直ちに認められる。日々の個人的體驗に徵しても諸君はそれを確信することが出來る。併しそれに依つて説明されるものゝ如何に少いことか！　云ひ損ひは完全な健康狀態に於いても、正常な氣分に於いても、同樣に可能なのである。右の肉體的契機はこのやうにたゞ、云ひ損ひの本來たゞ心理的な機制に對して、補助的な、副次的な價値を有するに過ぎない。私はこの關係を示すに、嘗つて或る譬喩を用ひたことがあるが、その譬喩をこゝでまた繰返して見たい。何となれば、これほど適切な譬

喩は他にないからである。暗い晩に或る寂しいところへ私が行つたと考へて下さい。私はそこで無頼漢に襲はれて時計と財布とを巻き上げられた。泥棒の顔を判然と見ることが出來なかつたので、私は最寄りの交番に出てかう云つて訴へた。寂寞と暗黒とが私の貴重品を盗みましたと。すると警官はかう答へる、君は極端に機械的な物の考へ方をするやうだが、それは間違つてゐるよ。我々ならば寧ろかう云ふ風な云ひ方をするね、暗黒にまぎれ寂しさを幸として、何處かの泥棒が私の大切な品を掏つて行きましたと。君の場合に於いて本質的な問題はその泥棒を捕へると云ふことにあるのだらう？よろしい、多分その品物を取戻してあげることが出來るだらうと。

亢奮、放心、注意散逸などの心理生理的諸契機は説明の目的のためにはあまり多くの役に立たないやうに思はれる。それはたゞ物の云ひ方に過ぎない。スペインの防壁に過ぎない。我々はその防壁の彼方を敢然覘はねばならないのだ。この場合寧ろ、何によつてそれ等の亢奮や、特殊な注意逸脱が生じたかと云ふことが問題になる。語音の影響、語の類似、言葉から生ずる習慣的な聯想などが、再び有意義なものとして認められることになる。それ等の諸條件が道を開いて云ひ損ひをして容易にその上をさ迷はしめる。併しながら自分の前に道が開けてをれば、その道を辿つて進み行くことは私にとつて自明のことなのであらうか？ そこには私をしてその道を選ばしめる動機がなくてはならないし、またその上その道を進んで行かせるだけの力がなくてはならない。これ等の語音關係や言語關係はこのやうに、肉體的諸性質と同じやうに、たゞ云ひ損ひを起るに好都合ならしめるだけであつて、その本來的の説明を與へることは出來ない。まア考へても御覽なさい。無數の場合に於いて私の用ひる言葉が音の類似のために他の言葉を想起させるからとか、それ等が相反の部分に於いて密接に結び付いてゐるからとか、或は習慣的に聯想させるものがあるからとか云ふ事情のために、私の話が混亂すると云ふやうなことはないのである。云ひ損ひは肉體の疲れの結果として聯想的傾向が別の話の意圖よりも强勢をとるやうになつた時に生ずるのだと云ふ哲人ヴントの説に今日でも賛成する人があるかも知れないが、或る多くの場合に於いては云ひ損ひの肉體的條件が缺け、他の場合に於いては聯想の條件が缺けてゐるとの證明が立つてゐるのに、そのやうな體驗と右の説とが矛盾するところなければ大いに傾聽すべきものであらう。

併し私にまで特に興味のあるのは諸君が出す次の質問である――相互に干渉する二つの傾向を人々は如何にして定めるのであるかと。この質問はなか〳〵面倒であると云ふことを諸君は思ひも寄らないであらう。兩者の内の一方、卽ち攪き

亂される方の傾向は常に疑ふ餘地なく分るのでなからうか。行り損ひをする當人が、それを知りそれを承認する。疑問や考慮はたゞ他方、卽ち攪き亂す方があるからこそ生じて來るのだ。ところが數々の場合に於いてこの別の傾向が同樣に判然としてゐると云ふことは、既に我々の聞知したところであるし、また讀者の忘れないところであらう。この傾向は云ひ損ひの效果に依つて判然と見えてゐる。たゞ我々としてはこの效果を效果として認める力を有してゐればよいのだ。議長が開會に於いて正反對の云ひ損ひをした。彼が開會の意志を有したことは明かであるが、併し同樣に彼がこれを閉會したいと思つたことも明かである。そこに解釋すべき何物も殘つてゐないと云ふことは明かである。併し攪き亂す傾向が本來の傾向をたゞ歪めるのみで、それ自身を表現しないやうな場合もあるが、さう云ふ場合に人々はその攪き亂す傾向をその歪みの中から如何にして察知するのであるか？

或る一連の場合では、非常に單純な、確實な方法で、つまり前に攪き亂される傾向を察知したのと同じ方法で察知出來るのである。これ等は實は話者から直接に知らせられるものである。云ひ損ひの後に話者は本來意圖した言葉の音を直ちに再び披瀝するものである。「それはかなづく……いやそれは多分まだ一月はつゞく」さてその歪められた傾向を同時に人々は彼に云はせて見るのである。かう云つて彼に訊くのだ。――それにしても貴方は何故始めに「かなづく」(draut)と云つたのですか。と彼は答へる、私はそれがかなしい(Traurig)話で、なほ一ケ月つゞく(dauert)と云ひたかつたのだと。また別の場合には、"Vorschwein"と云ふ言ひ損ひが出て來る。それは元來"Schweinerei"と云ふつもりであつたのが、それが寛和せられて別の形になつてしまつたのである。このやうに歪める傾向はこの場合に、歪められた傾向と同じやうに確實に成就してゐるのである。こゝに私が擧げた實例は何れもその報告や解釋が私自身又は私の學派の者等に依つてなされたのでないのを選んだのであるが、それは全然意圖のないことでもなかつたのだ。併しながらこれ等二例に於いて、その解決を進めるためには、多少の立入つた考察が必要であつた。人々は話者に向つて、何故に君はそんな云ひ損ひをしたのか。それに就いて何か云ふべき事を知つてゐるであらうと訊かざるを得ないであらう。でなければ、本人はそれを説明して見ようとも思はず、そのまゝ通り過ぎてしまふであらう。尋ねられゝば併しながら、彼は自分の念頭に浮ぶ最初の思ひ付きを以つて説明を與へるであらう。さうして今や御覽なさい、この一寸した穿鑿とその成功とは、既に一つの精神分析であり、あらゆる分析的取調べ(それに就いて我々はなほ續けて講述して行くであらうが)の典型であるのだ。

今や精神分析が諸君の前に彷彿して來たこの瞬間に於いてそれに對する抵抗も亦諸君の内に擡頭して來たであらうと私が想像したとしても、それはあまりに不信であらうか？　諸君は私に向つて、その行り損ひをした當の人物の云ふことなどはアテにはならないだらうと抗議したいとは思はないか。彼は勿論、その云ひ損ひを説明してくれとの要求に對してそれに應ずるの努力は拂ふであらうが、さうして自分に思ひつく最上のものを（もしそれがそのやうな説明に適切だと思はれたならば）告げるであらうが、云ひ損ひが實際にこのやうにして生じたのだとの證明は、右のやうにしては與へられはしないと思ふ。實際、證明はそのやうに與へることも出來るであらうが、また別の與へ方もあらう。同じやうに具合よく、多分もつと適當に思はれるやうな別のことが、やはり思ひ當られるであらうと諸君は抗議しないであらうか。

　諸君が肚の底で、精神的事實に敬意を拂つてゐないことは驚くべき次第だ。或る人が何かの物質の化學分析を試みてそれの或る成分から若干の重量を、何々瓩と得たと考へて御覽なさい。さうしてこの重量から一定の結論を引出して來る。それでも諸君はその結論はその化學者の單なる思ひつきで動機に缺けてをり、分離したその物質はまだ別の重量を持つてゐるかも知れないと信ずるであらうか。併しその物質は正にその重量を有してをり、それ以外の重量は持つてゐないと云ふ事實の前に、萬人は屈伏し、さうしてこの結論を信頼して更にその上にそれ以上の結論を建てようとする。たゞ被質問者に一定の思ひ當りが生ずると云ふ心理的事實の場合には、諸君はそれを信頼せずして、同様に別の思ひ當りだつて生ずることがあるものだと云ふ。諸君は心理が自由であり、何ら原因に依つて決定せられないものだと云ふ幻覺に囚はれてゐて、それを放棄しようとはしないのだ。遺憾ながら私はその點で諸君と全然正反對の立場にあるものだ。（續く）

精神分析學語彙（三八）

一、冷感症（Anästhesie）――性交に際して局部に不感なるを婦人の性的冷感症と呼ぶ。この神經症は性的亢奮の座がクリトリスに固着してゐるのがその條件となること屢々である。これに隨伴する心理現象としては、本人がその父親に對して強い感傷愛と無意識的な色情的愛着を有することである。その他種々の條件があるが大槻高水兩氏譯著「冷感症とその治療」を參照ありたし。

　半身が不感になることはヒステリーの症候として屢々現れる。それらの症候はやがて當面の肉體部分に於ける色慾的感覺を抑壓するに役立つのである。

一、アナゴーギシュ（Anagogisch）――とは上段的と云ふ意味で精神分析の本能的（卽ち下段的）なるに對せしめた語である。ヘルベルト・ジルベラーは、夢の意味内容を發見するには一般に行はれてゐる精神分析的解釋を必要とするのみならず、如何なる場合

にもまたアナゴーギッシュな解釋が必要でもあり可能でもあると主張してゐる。やがてこれに依つて倫理的な亢奮、社會的道德的に價値ある目的が夢の中に設定せられてあることを發見するやうになつた。そこで夢の解釋にはフロイド流の退行的方面（幼兒本能的內容の解釋を目的とするもの）とジルベラー流の上段的方面とに分れることゝなつた。この後者に依れば、老アダム殺害の夢を見たとすれば、それは理想への愛、精神的再生、理想追及、またはその類として夢の內容を認識すべきであると云ふことになるジルベラーはやはりこの主張を神話解釋の上にも押しひろめてゐる。（ジルベラー著「神祕とその象徵の問題」一九一四年、及「夢の心理の概論」一九一九年、參照。）

上段的內容は時々は前意識的な夢の思想に存することもあるが、それが如何なる場合にもと云ふわけには行かない。それだけで夢の構成作用の力があるとは決して云へない。構成力は無意識的な夢の願望にのみ存するのだ。

ユングはまた大きな幼兒的コムプレクスを上段的に解釋したのである。例へばエディポス・コムプレクスの如きは、その中の母は到達すべからざるものを意味し、人々は文化發展のためにこれを放棄しなければならないし、また殺される父と云ふのは「內面的」の父であつて、父を殺すとは本人の內面にある父的なものから自由になること、獨立することを意味すると解せられる。上段的解釋者たちが右のやうな解釋を下すやうになつたのには、精神分析學の內容に對する抵抗が多少與つてゐるかも知れないが、一考の價値はあると思はれる。

一、肛門的（anal）——と云ふ言葉は直腸及び肛門の性帶域のあたりのことを意味してゐる。その意味は肉體的の場合と精神的の場合とがある。肉體的の意味ではその場所に於ける性交、そのあたりへの懲罰などの場合に用ゐ、精神的の意味では肛門性格などの意に用ゐる。肛門性格の特徵は潔癖、整理好き、節約好き、主我心の强いこと、排擊的攻擊慾の强いことなどにある。（肛門性格に就いては、本誌第五卷第五號一〇四頁を參照。）

一、肛門性感（Analerotik）——精神分析學の主張に依れば、肛門帶域は性的亢奮の座であり、また幼兒の發達の或る段階に於いては性的な役割をこの個所に課することがある。それは必ずしも變態的な人物に於いてゞはなく、寧ろ正常の作用と見なされる。この帶域から發する一切の本能的亢奮を總稱して肛門性感と云ふ。肛門性感は性生活の構成上に大きな意義を有し、從つて性生活の前階程の一つをなすものは肛門性感である。更に性以外の別種の精神的活動に對してもこの帶域の本能亢奮が重要なエネルギーを供する。——二三歲の幼兒も糞便を保留し、その集積のためにそれが排泄せられるに際し、腸壁を摩擦するため緊張的快感を味ふことに依り、この帶域の粘膜の亢奮を利用することがある。また指頭に依つて直接刺戟を與へてゐる場合も少くない。幼兒の空想生活はこの時期には肛門的な觀念に終始してゐる。成人の性交は臀部又は肛門部に於いてなされ、從つて出產はこの邊に於いてなされると彼等は考へてゐる。肛門性感にはまた常に加虐的な傾向が强く纏つてゐて、從つて肛門性感の發達段階は肛門加虐的と云ふ名で呼ばれ得るのである。

肛門性感は性感全體の發達過程中に吸收せられてしまふ。換言すれば、性器的性感の中にその一部として止揚されてしまふのである。それ故に、婦人のワギナの感覺は腸粘膜の感覺からその一部分は讓渡せられたものであり、ペニスは糞便の代理として性心理的纏綿が寄せられるのである。糞便は幼兒期には自分自身の一部分としてそこに異常の價値が與へられるのである。肛門性感はまた轉じて黃金的興味、殊に所有の興味となることもある。なほ附言すべきことは、肛門性感が同性愛の一契機となる場合のあること、强迫神經症の症候の中には肛門性感が大きな役割を果してゐることなどである。

一、アナルゲジー（Analgesie）——苦痛への無感覺を云ふ。その條件は多くは肉體的であるが、時にヒステリー症候として現れることもある。その時には半面的で、その方面の身體に於いて嘗て受けた性感的な經驗が抑壓された場合に、さう云ふ現象を起すのである。

一、肛門加虐的（Analsadistisch）——リビドー發達の肛門期に於いては幼兒の加虐的衝動も激しくなり、毆打、破壞、支配などの諸々の形でそれが現れ、それに强い性的快感が伴ふ。それ故に、分析學ではこの期（二三歲）を肛門加虐期と呼ぶ。この期のあらゆる心理的構成（性及び出產に關する空想や觀念、並びにこの期に屬する症候）には常に必ず肛門的並びに加虐的特徵が混入してゐる。その場合の加虐的特徵は大量の破壞衝動に符合するものがある。この破壞衝動はこの期のリビドー的過程の中に混入してゐる。對象に對する態度は、從つて相反並存的である。

一、分析（Analyse）——さま〲の要素の混合して成つてゐる現象をその要素に還元し、或は各要素に區分することを云ふ。この語はまた精神分析學のことを文獻中、又は對話中に簡略に意味する場合に用ゐられる。（未完）

「精神分析」第七卷既刊目

第一號（一月號）　金錢心理（正誌）
第二號（二月號）　自尊心再建（冊子）
第三號（三月號）　心理經濟（正誌）
第四號（四月號）　精神衞生（冊子）
第五號（五月號）　性自己處置（正誌）

冊子（第七卷第四號）內容

異常兒童と精神衞生……杉田　直樹
國語運動と精神衞生……大槻　憲二
箱根分析絕行……不考泉院主
內外彙報、讀者通信、編輯後記……

内外彙報

ジョーンズ博士からの來翰

英國ロンドンの精神分析學研究　長アーネスト・ジョーンズ博士からさきに來翰のあつたことは　既に册子第七巻　二號本欄に於いて報告したが、それに對する返書を大槻氏から差出されたところ、直ちにジョーンズ博士から二月十三日付にて第二信があり、それが三月十七日に到着した。當方からの依頼に基き近影及署名も別便で到着したので、直ちに本號巻頭にそれを紹介しておいた。

手紙の内容には、某重要案件あつて、只今はまだ發表の時期でないが、差支へのない部分だけを次に披露して見よう。

「貴殿がフロイドの著作の日本譯のためになされた尨大な事業に對しては、甚だ同慶至極に存じます。小生自身も、フロイドの著作の幾多を英譯して見ましたので、それが如何に困難で長くかゝる課業であるかゞよく分つてをります。

貴殿がその内に一度歐洲へお出でになり、貴殿の御活動の有様、並びに日本に於ける精神分析の様子を御知らせ下さることが出來るならば、甚だ有難い次第であります。貴殿に直接お目にかゝる事は、如何にも興味あり、且つ嬉しい事と存じます。　敬具

ロンドンにて――アーネスト・ジョーンズ」

「精神分析季刊誌」　本年度第一册

一、「戀愛對象の死に依る憂鬱症者に於ける同一化の心理」マーチン・ペック（ボストン）――
一、「性格と症候形成」フランダーズ・ダムバー（ニウヨーク）――
一、「世界破滅空想に關する觀察」キリアム・スプリング――
一、「精神分析技法の問題」オットー・フェニヘル（ロスアンヂェルス）――
一、「ショーペンハウエルとフロイドとの比較研究」ビシュラー（ヂェネバ）――
一、「青年教育に對する精神分析學の寄與」カロリン・ザクリ（ニウヨーク）――
一、「精神分析と肉體的機能障碍」フランダーズ・ダムバー（ニウヨーク）――
一、新刊紹介――

「メニンガー診療所報」　本年度第一册

一、「末梢神經」フレデリク・メリシユ。
一、「病氣に於ける心理的要素」カール・メニンガー。
一、「精神療院に於ける治療法としての演劇」ノルマン・ライター。
一、「虐待せられたる兒童の空想の研究」ユーヂン・アイスナー。

「精神病學」本年度第一册

米國ワシントンのホワイト精神病學會から發行せられてゐる季刊誌「精神病學」（人間關係の生物學と病理學）と本誌とはこの度相互に交換することゝなつた。先方からは昨年度全四册と、本年度第一册とを送つて來たので、當方からも同樣に返禮しておいた。この學會の設立者は故ホワイト博士である。同博士の事は本誌昨年五月號本欄に出てゐるから參照ありたし。左に最近號内容を紹介す。

一、「軍隊に於ける精神病學の利用」ダラス・サットン。
一、「文化の壓迫と個人の歪曲」ロレンス・フランク。
一、「思想と言語」ビゴツキー。
一、「性格に關する口唇的特徴と同一化作用」エドワード・タウバー
一、「反國家主義」ムーシエン・ヒチエン・リン——筆者は支那人のやうである。

國內關係時事

▼「英語青年」一月十五日號に英國文藝評論家ハーバート・リードの新著『文藝評論集』（フェーバー社刊、十二志六片）の紹介（N・R・T氏）が出てゐる。その一節を左に引用して見る。「之等の批評論文を通じて彼が最もよく用ゐてゐるのはやはり精神分析的な方法である。彼はそれに就いても、自分は批評に於いては心理的な方法にどうしても心を惹かれる。特に精神分析的な方法が詩人の個性や詩の技巧や詩の鑑賞等に關する多くの問題を説明するに便利であるやうに思へる。自分は批評に於ける心理的方法が唯一のものであると云ふ積りはないが、それが多くの問題を説明するに適し、今迄説明のつかなかつたことを説明出來る場合が多いと考へると、述べてゐる。『神話と夢と詩』『詩的經驗』等の章で、彼は精神分析的な方法を説明してゐる。特に彼は個性と性格といふ問題に就いては絶えず言及してゐる。例へば、又彼は現代はそれが滿足させられない飢餓の表現である故に不安があるのである。我々は集合的な心の中にある色々樣々な欲望に焦點を與へることが必要である。心理學者が批評家と協力してこの問題の解決に乘り出さぬものかと述べてゐる』云々。

▼『精神分析閑話』丸井淸泰氏稿（「通俗醫學」四月號）。

▼大槻憲二氏近業一束報告——
一、戀愛道德の自己欺瞞（生きて行く道）
二、エディポス性格に就いて（人生創造）
三、蒐集癖の心理（科學知識）
四、女性戀愛心理の或る型（人生創造）
五、頼山陽の精神分析（同）

▼本誌前號（册子）及び前々號（正誌）の内容に關してはそれ〴〵の廣告面を參照ありたし。

本研究所研究會

三月例會は廿日夜、アメリカン・ベーカリに於いて催された。食前

大槻氏からジョーンズ博士の手紙の朗讀と詳しい説明があり、また新來會者山口滋氏の紹介があつた。今夕は研究主題はオナニーであつたが、大槻氏は本號巻頭に掲げてある論文の草稿を朗讀して出席者たちの批評を求められた。この問題に關しては、人々は多くの觀察を有してゐて、出席者の殆ど全部がこれについて何らかの報告をせられ、とり立てゝ固くるしい話はなかつたが、誠になごやかな會合であつた。出席者は右言及諸氏の他に、長尾忠、大槻岐美、藤田由美、宮崎正路、黒澤敬次、田中虎男、高橋鐵の諸氏であつた。なほ小山良修、大久保眞太郎、北垣照雄の諸氏から缺席挨拶があつた。

本研究所講習會

三月例會は五日夜、研究所に於いて催す。今夕は『宗教の未來』の第六、第七、兩章を精讀した。

第六章はドグマが願望に基くための强味と弱味とに就いて論じたが、第七章は「文化と宗教と科學との關係」に就いて論じてゐると云ふことが出來る。まづ、科學（この場合精神分析）が宗教への批評は有害無益ではあるまいかとの自己批判に答へようとしてゐる。フロイドはその自問自答の結果、寧ろ無害有益であるとの結論に達してゐる。何となれば、宗教は人間を幸福にするものではなく、却つて不幸にし、更に不道徳にさへするといふことが證明せられるからであると。が、そのやうに無宗教に依つて却つて救はれるのはインテリ的な人々であつて、一般大衆は確に宗教喪失によつてその道徳的足場を失ふ。然らば、その問題はどう處理するか。それが第八章に於いて說かれる。

人類が宗教的錯覺に陷らしたのは、單に願望にのみ依憑してゞはなかつた。そこには歴史性があつた。それは例へば、トーテム父殺害の罪障感に依つて父への忠誠が誓はれ、その忠誠感情が宗教感情の一要素をなしてゐる如きである。かくの如くにして、宗教は人類の神經症候として、その歴史的意義を有してゐるが、個人の神經症が宗教に依つて一時的には救はれても結局に於いては救はれず、精神分析に依つて科學的に救はれるやうに、人類の神經症たる宗教的症候も、事の眞相を告知せしめられることに依つて救はれるのである。それ故に著者は敢てこの書を公にするの決意を固めたのであると說く。

會後、大槻氏は今夕のフロイドの論文中に言及せられてあつた問題（宗教が墮落を必要とすると云ふ點に關聯ありとして）「女性戀愛の或る型」と題する最近執筆の論文を朗讀せられた。出席者はいつもの顔振七名であつた。

×

四月例會は三日夜同所に於いて催され、同じく『宗教の未來』の第九章第十章を精讀研究した。

第九章に於いて、フロイドは、彼自身の論に於いて一見含まれてゐると思はれさうな二つの矛盾點に就いて自問自答してゐる。その矛盾の一つは、信仰の喪失の發見は危險だと云ひながら、他方ではその信仰を奪ふことに依つて文明の戒律を確實にしようとしてゐること。今一つの矛盾は、人間が無意識（宗教的）に支配せられるものだと云ひながら、意識的（合理的科學的）法則に依つて支配させようとして

ゐることである。

第一の矛盾に就いてはかく答へる。絶對に信仰してゐるものは科學的發見には馬耳東風だから心配することはないし、他人が信仰するからこそ信仰してゐるものは他人が信仰してゐないと知れば、信仰をやめて危險でない。而も、信仰をやめてゐるのは私の著書を俟つて始めてゐるのではない。だから、本書が今更出たとて危險と云ふわけはない。

第二の矛盾に就いてはかう答へる。禁制が無意識(內面)的のものであることは、本人の精神發達を阻碍する率が大き過ぎるから危險であり有害であるが、禁制が意識的(內部的)であれば、精神發達が阻碍せられないから弊害が少いと云ふのである。

第十章は、「今後の文明に於ける科學に依る宗教の止揚」とも題すべき內容で、フロイドが假りに自分の主張をも一つの錯覺であると認め、假りに錯覺としても唯の錯覺に非ず、この錯覺には二つの强味があるとし、第一の强味は相手(宗教的立場)の弱味から、しつぺ返しにはりつけられた錯覺の名であるに過ぎない。第二の强味は、相手の錯覺は修正不可能の融通の利かない錯覺であるが、自分の錯覺は修正可能で、云はゞ發達の過程にあるものである。故に安心してゐられる。なほ積極的に、科學としての精神分析學的見解が如何に錯覺であり得ないかを證明すべく、フロイドは四つの證明を擧げてゐるが、一々紹介することは控へておく。

此の論文はキリスト教民族に非ざる我々日本人にはあまり切實に響いて來ないやうな氣もするが、併し將來の人類が生きる方向に就いて科學的示唆を與へるもの多大であることは疑ふ餘地がない。

會後、延島氏は「オナニーと神經症」(本號研究欄所載)を朗讀して會員の批評を乞はれた。その後例に依り賑かに種々の問題を討議して夜の更けるのを忘れた。出席者は延島、田中、宮田、倉橋、大場、藤田、黑澤、大槻、同岐美氏等の定連の他に、山口滋、鈴木正平の新顏も見え賑かであつた。

研究所だより

▼この一月以來、とかく病氣がちで特別誌友諸氏の間からも御懇篤なお見舞を下さつた方がありましたが、近頃ではすつかり元の健康體に復しましたにつき、御休神下さい。長崎文治氏夫妻が壓戟療法を以て加療して下さつたことも、よい効果を齎したやうであります。こゝに兩氏の御好意を深く感謝いたします。(岐美)

▼野村泰氏は小倉の步兵聯隊に入營せられ、衞生兵となられた。氏の分析學の教養が公務に役立つことを祈ります。

▼狩野儀三郎氏は南支派遣軍杉本部隊付きとなられ、先便張家口からエハガキを下され、會の皆樣によろしくと傳言がありました。

▼土屋秋實氏(在宇都宮市)から近信あり、「前々號の金錢心理は私達の無意識の痛いところをつくものと思ひます。確に金錢と乳汁や母性の愛情などはコムプレクスされてゐると感じました。富める狀態への胎內的あがきや貧しさへの神經症的豫感は誠にくるほしいものです。墮落願望でせうか。今後益々痛いところをついて頂くやうに願ひます。」云々。

質疑應答

國語運動の精神衛生に就いて

特別誌友 山本謙吾

拜啓、前號册子所載の大槻氏の國字問題國語運動についてのお說を拜見致し、少し所感を述べさせていたゞきます。本來私は山本有三氏を國語國字運動の理論家としてよりも啓蒙作家としての半面（といふよりもこれが本業ではありますが）を認めて居ります。小生の所感の中に有三氏に好感を持つ臭味があるとすれば、其處に原因があることをお含み置き下さい。

さて先づルビに就いてゞありますが、これは二重の概念を持つものであると思ひます。即ち、これは單に國語問題（或ひは運動）と呼ばれるよりも國語國字問題（或ひは運動）と呼ぶ方がよいかと思ひますが、如何がなものでせう。これはルビに於て特徴的でありますが、別にそれのみに限りません。常識が、或ひはお言葉によれば衆愚が、取り上げる時はこの概念の二重性を處理或ひは消化しないのが普通であります。

（**大槻答曰**——國語と云ふ語には二重の概念があつて、狹義の時には文字と對立させて音聲に依る思想感情の表現方法を云ふし、廣義の場合には文字をも含めて云ふ。常識はこの區別を立てないが、「衆愚」に非ざるものはこの區別を知つてゐると云ふわけで、小生がこの區別を立てなかつたのは、あまりに「常識」的で、「衆愚」とは結局汝自身の事に非ずやといふ反擊ですか。併し、これは少し感情にはやり過ぎてゐられますよ。小生が國語運動と云ふ語でルビ問題を意味したのは固より常識的（廣義的）見解に從つたものですが、常識は悉く誤りであり、「衆愚」的であると考へてゐられるのならば、いさゝか非常識の譏を免れませんぞ。小生は「衆愚」と云ふ語を用ゐましたが、私は分析せられざる人間（即ちエスに動かされて盲動する人間、精神衛生を心得ざる人間）を假りにさう名付けてゐるので、大學の教授でも有名な文士でも「衆愚」の定義に符合する者が澤山にあるわけです。その代り市井の一無名人でも「衆愚」でない人がまた澤山あります。私はルビ廢止運動を國語運動と呼んで、文法上誤謬であると云ふ理由を知りません。國字運動と呼ぶことの方が概念が細かくはなりますが、山本君を人間と呼ぶのは常識なり、日本人と呼ぶのが正しいなどゝ云ふことは云へますまい。たゞ概念內容の廣狹の別に過ぎません。）

先づ大槻氏の御說はルビ廢止そのものに就いては贊成して居られます。それで問題となつて居るのは有三氏の說明の仕方であります。林氏は極めて反動的に漢字を擁護される方の一人であります。（山本氏の問題が起つた當時の日々新聞上の林氏の論旨參照。）同氏得意の生理學的觀點から述べたところもありますが、そこに反動的なものがあるやうに思ひます。ですから、大槻氏が若し未だ有三氏の說いたものを見て居らないとすれば、國語運動に眼をむけられたにしては準備

不充分と云はねはなりません。有三氏の考へが一番よく見られるのは文學界（昭和十三年九月號？）の座談會に於ける同氏が、殆んど失笑を禁じ得ない無智な（言語と文字との混同等）、而もナルチスティシュな林房雄の質問に對してされた嚙んで含める様な執拗な應答振りであります。

（**大槻曰**——仰せの通り、小生は有三氏の「說明の仕方」又は「運動の仕方」だけを問題にしてゐるのであつて、國語運動そのものを問題にしてゐるのではありません。故に「準備不十分」などゝ云はれる筋はありません。前號拙論中にも林氏の引用だけに依つてゐるのであつて、「林氏の誤解が介在してゐないならば」と云ふ條件までつけて用心深く論じてゐるので、有三氏の論文を直接讀んでゐない小生としては直接有三氏に當るものでないことまで明かにしてあります。小生は飽迄心理經濟の立場から論をやつてゐるのであつて、國語論を試みたのではないのです。それ故に、この節も單に貴君の感情を露出させたに過ぎない結果になつて來ました。さて、その感情の正體は何でせうか。貴君自ら反省分析して御覽なさい。）

有三氏が大槻氏から論難される様な說明の仕方を或場合にとつたことについては小生も遺憾でありますが、病的なのは果して有三氏のみでありませうか、小生はその背後にあるものに注目したいのであります。

（**大槻曰**——つまり萬人が盗賊である時にその內の一人だけを批難するのは不公平だと云ふわけですね。併し目前でやられたら、その人に向つて個人的に注意するのが何故惡いのですか。無論、萬人が有三氏と同じコムプレクスを持合せてゐますよ。それを有三氏が知つてゐて巧みにその弱點につけ込んで「衆愚」を動かして得意になつてゐる。それが小生には甚だ不快なのです。病人の苦惱を利用してイカサマ藥を賣りつける不德商人に對するやうな憤りを感じたのです。それは賣る奴だけが惡いのではない。買ふ奴が、病人が惡いのだと貴君は云はれる。さうかも知れないが、それではあまりにイカサマ商人を辯護し過ぎる結果にはなりませんか？）

凡そ國字國語問題程同期的に起る問題はさう多くはないでありませう。滿洲事變の際に日本といふ字を頭につけさへすれば、或る力を持ち得た様に、國家意識の盛になつたときに於ける國語國字問題はジヤーナリズムが好んで取り上げるのであります。そして、此の問題について眞に歷史的な硏究をするよりも、時流に乘つた身振りを示したがる輩が多いものである。林氏の所論も身振り以上のものではない。）

（**大槻曰**——林氏の所論が「身振り」だか何だか、小生は讀んでゐないのだから分らないが、まさかさうまで林氏を侮辱したくないと思つてゐる。小生の所論もどうやら「身振り」だと思つてゐられるかも知れないが、それは貴君の御想像に一任する。併し小生は言語問題には特別の關心を有し、今までとても言語に關しては十數篇の論文を書いたことがあるし、本誌上でも屢々言語分析を試みてゐる。併し私は言語學專攻の士ではないし、またこの度の拙論が言語論でなく、心理經濟論であるのだから、貴君があの論を「身振り」だと解せられるなら、これまた貴君の感情の露出したものであると云ふ一つの證明に

なる。）

理論的に正しいものが往々にして、或ひはかへつて世に於ては受け入れられない。そして國法ででも定められないかぎり、之を使行するか否かは大槻氏の用ひた言葉によれば衆愚の思ひのまゝなのである。例へば、左横書きの如き理論的に何等批難し得ないものでも（林氏得意の生理的觀點から見ても、或ひは實例をあげれば假名も漢字も左から右へかく樣に出來て居る。）實際には一部の科學書以外には用ひられて居ない。等、そして衆愚を納得させるか否かは說明の仕方にかゝつて居る。そして「その代り衆愚から反響を待つことは確實だ。」と云はれる反響が、ルビ廢止贊成のそれならば問題はないのではなからうか。山本有三氏にとつては說明の仕方は恐らく問題ではなからう。彼は實践への彼にとつて最も可能な方法を選んだと云へる。そして、それ以外に方法がないとしたら、（端的に無駄なら無駄だと云ふことが決して實際に衆愚を動かしはしない）病的なのは果して山本有三氏のみだらうか。惡く云へば彼は邪教の精神（變な言葉ではあるが）を巧に使つたとも云へる。前にも言つた通り、山本氏は理論家であるよりも實践家なのである。

（**大槻曰**――つまり目的のためには手段を選ばぬと云ふお說ですね。慈善のためならば、泥棒しても何しても許されると云ふわけですか。こゝにも貴君の感情が露出してゐますね。）

問題解決は同じ立場に於てすることが必要である。違つた立場から說明の仕方をのみ問題とすることは初めの問題を解決しはしない。そこに生れるものは問題の正しい解決ではなく、何時迄も止まぬ水掛論のみである。そして此の爭ひの方が餘程病的である。

（**大槻曰**――問題の解決は同じ立場でせよと云ふが、問題は既に解決してゐるのだ。私はルビ廢止贊成論者である。私は有三氏とは全然別の問題（心理經濟論）を提出してゐるので、從つて別の立場からその仕方を問題にするのは當然ではないか。こゝにも貴君の感情がから云ふ歪曲せられた理窟を云はせてゐる。）

大槻氏にして「身振り無し」と云はれるならば文頭の國語運動の精神衞生は內容を語つては居らない。問題になつて居るのは山本有三氏のみである。屢々失禮な言葉を用ひたことを謝す、御一讀の上はお取捨て下さい。

（**大槻曰**――私は有三氏のみを問題にしたのではない。氏と同じコムプレクスを共有し、同じ愚かな感情やエネルギーの浪費に踊る「衆愚」をも問題にしてゐるのである。貴君が如何に自らまだ盲點の多い――感情をして理性を歪曲させるか――を自覺せられたであらうか。他にも同樣な說を立てゝ私に向つて來た方がゐられたから、代表的に貴文を揭げていさゝか辨駁して見たのである。失禮の言あらば、何卒御寬恕下さい。）

最近〝精神分析〟のバックナンバーを集めて讀んだときに伊東豊夫氏の映畫評を非常に興味をもつて讀みましたが、死去されたさうでこゝに愼んで哀悼の意を表します。

（**大槻曰**――地下の伊東君も貴君の知己の言に感謝してゐることであらうと存じます。）

編輯後記

青少年の惱みの最大のもの、從つて父兄や教育家たちが絶大の關心を拂はねばならない大問題を徹底的に研究したものとして、本號は廣く江湖の歡迎と感謝とを受ける事と期待して居ます。もしこの期待が外れたら、天下未だ具眼の士に乏しいと云ふことを證するに外なりません。我等はそれだけの自信と覺悟とを以て本號を編みました。

×

藤田氏は年少よくこれだけの長論を譯了せられたことは、大槻氏の指導もさることながら、その勞を壯としなければなりません。

宮田戊子氏の芭蕉研究は益々熱を帶びて來ますが、今度のは六十餘枚の長論でした。編輯の都合上四十餘枚のあたりで中斷じなければならなかつたのは、稿者に對して誠にお氣の毒であつたが、お許し願ひたい。

因みに宮田戊子氏は婦人、殊に宮田齊氏夫人だと思つてゐる人があるとのこと、どう致しまして、五十餘歳の紳士であり、齊氏は三十餘歳の青年校長であります。本名は保、戊子はその雅名です。藤田由美氏も婦人だと思つてゐる人があるかも知れませんが、二十六歳の青年です。

×

前々號正誌附錄一〇一頁から一〇八頁までは削除になりました。冊子七ノ四誌上でも報告いたしましたが、冊子を御覽になれない方々のため、こゝに更めて御挨拶いたします。

×

フロイド全集中の第十卷『總論』（春陽堂版）と岡倉書房の『精神分析讀本』とは重版中との旨、豫報いたしましたが、兩書とも出來いたしました故、御註文待上げます。また人生創造社發行『社會生活法』も益々好評、最近遂に第四版を出しました。良書は流石に時と共に讀者を增して行きます。「總論」は一圓八十錢に値下げになりました。

×

本研究所出版部から豫約募集で出版いたしました書は、印刷所の手不足のために大變遲れて申譯ありませんでしたが、本號が出來の頃には既にお手許に屆いてゐることゝ存じます。印刷所の手不足は事變のためで致方ありません。お許し下さい。

×

最近の特別誌友加盟者諸君の御芳名を左記御支援の御厚意を深謝いたします。

▲八戸市……吉尾貞次郎氏
▲大阪市……高松　勳氏
▲本鄉區……賀屋　勝巳氏
▲大阪市……岡田　好正氏
▲和歌山縣……富田　隆男氏
▲澁谷區……新田　裕一氏
▲荒川區……高瀨　裕孝氏
▲兵庫縣……三宅安三郎氏
▲山梨縣……進藤　俊秀氏
▲銚子市……野口　作彌氏
▲杉並區……坂本　隆良氏
▲京都市……池田　太郎氏
▲京橋區……宮崎　正路氏
▲朝鮮……金　春熙氏
▲下谷區……鈴木　英雄氏
▲芝區……松浦福三郎氏
▲川崎市……櫻堂　敏行氏
▲福井縣……三好三郎右衞門氏

×

本號から印刷所が變りましたが、これは當

方の都合でなく、前印刷所が手不足になり、仕事が不可能になつたゝめであります。當方としては已むなく永年の緣故を切つた次第であります。今度の印刷所は東京市內故、何かと便利であります。

×

本號から多少減頁いたしましたが、その代り組方をずつと詰めて、內容充實いたしましたから、實質上殆んど變りはないのです。事變がすんで、物價狀態が復舊ではないまでももつと健康になれば、また元の通りに增頁いたすことになりませう。暫く我慢して下さいこれも國策に添ふ一端であります。

×

高村光太郎氏のフロイド賞牌はまだ出來なくて、本號にもその寫眞を紹介することが出來なくなつて相濟みません。恐ろしく遲作の彫刻家で、困りました。その代りよいものが出來ました。下作りだけ見せられました。

×

文獻維持委員の募集を、前號にまた出しましたところ、黑澤敬次、山口滋の兩氏、及びその他にも誌上發表を固辭して申出られた方があり、愈〻盛んであります。諸氏の誠實なる御支援には感激いたします。

☆

次號正誌特輯は『愛憎の諸問題』といたします。これは前號にメラニエ・クラインの論文を紹介すると云ひつゝ、その約を果すことが出來ませんでしたので、その論文研究を主とし、その他に不良兒の愛情と放火の心理研究や、國際間の愛情、攻擊慾の心理研究などを添へ、その他なほいろいろ計畫中であります。相變らず御愛讀願上げます。

延島氏譯、アランディー原著『夢の研究』は同氏多忙のため今號は揭げることが出來ませんでした。次號からは間違ひなく載ることゝ存じます。

フロイド先生
額面用肖像畫
寫眞頒布

定價送料共 一圓五十錢
特別誌友には一割引

昭和十四年四月二十五日印刷
昭和十四年五月一日發行
（月刊）定價 五十錢
（外地定價）五十五錢

東京市本鄉區駒込動坂町三二七
編輯兼發行人 大槻憲二
東京市板橋區板橋町三ノ六四
印刷所 帝都印刷株式會社

定價一部 五十錢（送料共）
半年分 一圓五十錢（送料共）
一年分 三圓（送料共）

御註文規定

・本誌の御註文は一切前金に御願ひ致します。
・御送金はなるべく安全至便なる振替を御利用下され度く、振替口座東京七八八一七番へ御拂込み下さい。
・切手代用の場合は一割增に願ひます
・本誌廣告に關しては、御照會次第部員を伺はせます。

東京市本鄉區駒込動坂町三二七
發行所 東京精神分析學研究所
振替口座東京七八八一七番

大賣捌所 東京堂・東海堂・大東館
北陸館・（大阪）福音社

文献維持委員制の新設に就いて

本誌經營上の發展に伴ひ雜誌維持委員制の廢止を見るに至りましたと同時に、別に文献維持委員制を新設したいと存じますにつき、廣く一般誌友の間からこの擧に御參加下さる方々の多からむことを切望いたします。文献維持とは世界各國語の斯學關係文献を今にして蒐集しておかなければ將來は益々困難になることを虞れるために、思ひ立つたのであります。殊に前墺國ヴインに於ける斯學會及び同會所屬出版部の行く行くの解散（未だ存續的に事務をとり、新書の出版はせぬやうです）は一層その不安を大ならしめるものがありますにつき、今からでも遲すぎはせぬと思ひ、諸君の御援助を期待する次第であります。

維持費は一口五十圓とし、幾口にても御加入下さつて當方としては多々益々便ずるわけであります。維持委員諸氏に對しては、本研究所は十分にその御好意に酬ゆるの道を考へてをります。何事によらず人の好意に無償に縋らうとするやうな蟲のよい考へ方は――よしんばその目的が如何に崇高であらうとも――分析者の恥づるところでなければなりません。但し五十や百のはした金に一々代償を考へるとはあまりに神經質すぎると苦笑をされるやうな太つ腹な方々があるならば、必ずしも我々は代償をとつてくれなければ絶對に好意をも受けないと頑張るやうな偏屈人でもないと云ふことを斷つておいてもいゝです。とにかく原則としては御好意に報いる道を考へてゐます。それは本研究所關係の出版物（但し雜誌は別）は出版部の出版物なると否とを問はず、永く全部無償で謹呈する（從つてその總價は維持費を超ゆるの時期至るべきは當然）と共に、蒐集せられたる文献の閲覽權を認めることは勿論、その他、御希望の件は何なりと、當所の力に協ふ限り、應へたいと考へてゐるのであります。

維持費支拂は一時に全額を御支拂ひ下さるに越したことは御座いませんが、都合により分納にてもよろしく、但し一年以内に全納願上げたく存じます。

合本・單册「精神分析」（特輯題目及び定價）一覽表

東京精神分析學研究所
本郷區動坂町三二七・振替東京七八八一七番

第一卷・上

創刊號（昭和八年 五月）「エディポス研究號」＊
第二號（同 六月）「フロイド喜壽祝祭劇記念號」
第三號（同 七月）「教育研究號」＊
第四號（同 八月）「夢の研究號」（第一）＊
（合本としては品切）

第一卷・下

第五號（同 九月）「兒童心理研究號（第一）＊
第六號（同 十月）「社會思想・犯罪心理研究號」
第七號（同 十一月）「戰爭心理研究號」
第八號（同 十二月）「夢の研究號」（第二）
（合本としては品切）

第二卷・上

第一號（同九年 一月）「心理療法研究號」
第二號（同 二月）「女性心理研究號」＊
第三號（同 三月）「傳說研究號」
第四號（同 四月）「文學研究號」
（合本としては品切）

第二卷・下

第五號（同 五月）「ドストイフェスキー研究」
（六月休刊・以下隔月刊行）
第六號（同 七・八月）「戀愛心理研究號」
第七號（同 九・十月）「性慾心理研究號」＊
第八號（同 十一・十二月）「夫婦生活研究號」
（合本としては品切）

第三卷

第一號（同 十年一・二月）「兒童心理研究號」（第二）
第二號（同 三・四月）「宗敎心理研究號」＊
第三號（同 五・六月）「自殺・情死心理研究號」
第四號（同 七・八月）「同性愛と異性愛」
第五號（同 九・十月）「家庭問題と親子關係」
第六號（同 十一・十二月）「常態及び變態の性心理」
（合本としては品切）

第四卷

第一號（同十一年一・二月）「性格改造研究號」
第二號（同 三・四月）「母性と妖婦研究號」
第三號（同 五・六月）「夢と幻覺研究號」
第四號（同 七・八月）「兒童分析と敎育研究號」
第五號（同 九・十月）「愛慾葛藤の諸問題」
第六號（同 十一・十二月）「道德の分析」
金 三 圓（送料十五錢）

第五卷

第一號（同十二年一・二月）「思春期の研究」
第二號（同 三・四月）「不良少年少女の心理」
第三號（同 五・六月）「生理と心理」
第四號（同 七・八月）「男性と女性」
第五號（同 九・十月）「男女性格分析」
第六號（同 十一・十二月）「幼兒心理研究」
金 三 圓（送料十五錢）

＊印は單册としては品切、その他は在庫す、單册代價送料共各五十錢

『精神分析』第六巻 合本內容

第一號（一、二月號）夢と象徴（正誌）
第二號（三月號）文藝と繪畫（正誌）
第三號（四月號）東洋醫學と分析（冊子）
第四號（五月號）處女性の問題（正誌）
第五號（六月號）斷種法と優生學（冊子）
第六號（七月號）貞操の心理（正誌）
第七號（八月號）受分析者の心得（冊子）
第八號（九月號）自己愛の研究（正誌）
第九號（十月號）分析學邦文獻（冊子）
第十號（十一月號）神經症研究（正誌）
第十一號（十二月號）分析學の勸め（冊子）

▲合本は送料共三圓五十錢▲單冊は正誌一部五十錢
冊子十錢（何れも送料共）

特別誌友規約

一、本研究所在外研究會員を特別誌友と稱す。

一、特別誌友は本誌の豫約購讀者として半年分（一圓五十錢）又は一年分（三圓）前納の義務を有す。

一、特別誌友は偶數月發行「冊子精神分析」の無代配布を受く。

一、特別誌友はその研究、感想、報告を、編輯部の了解を得て本誌上に發表することを得るのみならず、司會者の承諾を得て研究會、講習會に出席することを得。

一、希望者は購讀料金と共に、住所、姓名は勿論、年齡、職業その他を報告ありたし。（且つ何月號より送本すべきかを明記せらるべきこと。）

東北帝國大學教授 醫學博士 丸井清泰先生著

晩近神經症醫學各論

精神分析療法後編

菊判本綴美裝 紙數三百三十七頁 正價金四圓 郵税金拾四錢

凡そ醫學はその專門學科の何たるを問はず神經症者との交渉を避ける事が出來ない。神經症者の處遇を誤まらざる爲には神經症者の心理・神經症の本態に關する正しい認識が前提される。又神經症の治療法には種々あるが精神療法を第一とすべきは勿論の事である。本書は著者が多年の研鑽の結果に基づき晩近著しく進步し變化した神經症學の現狀と動向を詳說し、神經症の本態を明らかに說述したものであり、特に精神療法の章は種々の精神療法の作用原理の眞髓を說きこれを批判したものであり萬人の必讀の文たるを信ず本書內容左の如し。

第一章 神經症の重要性竝に神經症發生論 **第二章** 神經症の分類 **第三章** 現實性神經症（神經衰弱症、不安神經症） **第四章** 精神神經症（「ヒステリー」症」、不安「ヒステリー」症、强迫性神經症） **第五章** 外傷性神經症及戰時神經症 **第六章** 赤面恐怖症 **第七章** 精神性陰萎症・早漏症・不感症及膣症 **第八章** 神經症の精神療法、特に精神分析療法と他の精神療法との比較 外附錄三篇

醫學博士 丸井清泰先生著

精神分析療法 前編

晩近神經官能症學總論

晩近その面目を一新せる神經官能症學、發生學的心理學を基調とせる精神病學、及び官能的神經病、精神病に對する精神分析療法への絕好の入門書として醫家の一讀を勸むべきものなるのみならず、精神分析學を理解し、斯學最近の趨勢を知らんとする者に對する良參考書として廣く江湖に推薦すべきものなるを信ず。

菊判二二〇餘頁 本綴美裝 **正價金貳圓五拾錢 〒金十四錢**

醫學博士 丸井清泰先生著

小兒期精神ノ衛生ト精神分析學

附・精神分析療法・治療教育分析法及び小兒分析法

直接兒童擁護の任に當れる教育家諸氏は勿論醫師、社會學者、精神分析を習得實施せんとする初學者、一般家庭に於ても必須缺くべからざるの良書たり。敢て江湖に一本を薦む。

菊判紙數二四〇頁 本綴美裝 **正價金貳圓六十錢 〒金十四錢**

發行所 東京市本郷區本富士町 振替東京二七九八一番 電話小石川〇五一八番 〇五一九番 克誠堂書店

VII. Jahrgang, Heft 5–6, Mai—Juni, 1939. Erscheint zweimonatlich.

ZEITSCHRIFT FÜR PSYCHOANALYSE

Herausgegeben vom „Tokio Institut für Psychoanalyse“

(Hefttitel: **Die Masturbation**)

INHALT

Studien

Zur Probleme der Onanie ... ... Kenji Ohtski

Onanie und Neurose ... ... Eiiti Nobusima

Selbstbefleckung bei Kinder (*Mabel Huschka*) ... ... Yosimi Fujita

Der Dichter Basho und seine Erotik ... ... Bosi Miyata

Psychoanalyse für Pädagogen (*Anna Freud*) ... ... Hitosi Miyata

Giovanni Segantini (*Abraham*) ... ... Tomohide Iwakura

Kritik und Methodik

Warum die Libido junger Leute derzeit unterdrückt werden müssen? ... ... Kenji Ohtski

Über die verschiedenen Filmkünste ... ...

Varia

Ein Selbstbekämpfer—ein Onanist, ... Furosenin

Einführung in die Psychoanalyse

Vorlesungen zur Einführung (8) ... ... Sigm. Freud

Terminologie (38) ... ...

Neuigkeiten des In- und Auslandes

Inhalt der ausländischen analytischen Zeitschriften ... ...

Kleine Mitteitungen ... ...

Preis des Einzelheftes, 50 Sen

Tokio Psychoanalytischer Verlag
327, Dozakacho, Hongo-ku Tokio Nippon.